鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書　(17)

# 九州縦貫自動車道関係
# 埋蔵文化財調査報告

Ⅷ

# 山崎A・C遺跡（鹿児島県姶良郡栗野町）
# 木場C遺跡（　　〃　　）

1981.3

鹿児島県教育委員会

# 序　　文

九州縦貫自動車道（えびの～鹿児島）建設に伴う栗野町山崎A，山崎C遺跡及び同木場C遺跡の調査については，昭和５３年度と５４年度に実施しました。

その後，昭和５５年度に整理調査を進め，ここに「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告第８集」として発刊することができました。

県教育委員会としては，この報告書が文化財保護のため広く活用されることを願っています。

発刊に当たり，日本道路公団をはじめ，調査に参加された方々に対し深く感謝の意を表します。

昭和５６年３月

鹿児島県教育委員会
教育長　　井之口　恒雄

# 調 査 の 状 況

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査の経緯は，それぞれ「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－」で述べた。昭和46年，姶良郡姶良町小瀬戸遺跡で調査を開始して以来すでに９年間にも及んでいる。

この間，調査については，年度毎に日本道路公団福岡建設局との間に「発掘調査の委託契約」を行い，これに基いて実施してきた。この間発掘調査の対象とした遺跡は38個所であったが，昭和55年２月21日，木場Ａ遺跡を最後にすべてを終了した。

一方，調査の整理・報告については，オⅠ～オⅦ集で24遺跡，オⅧ集で本遺跡等と27遺跡を発表したことになる。残された遺跡についても，今後，ひきつづき報告してゆく計画である。

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

（昭和46年～昭和56年３月）

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 調査面積（㎡） | 調査員 | 概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 堀之内B | 吉松町川添 | 54．9．10<br>～<br>54．9．27 | 500 | 立神<br>青崎 | ○土師式土器の散布 |
| 2 | 木場A | 栗野町木場 | 一次<br>53．12．11<br>～<br>54．3．31<br>二次<br>54．8．28<br>～<br>55．2．21 | 14,000 | 牛ノ濱<br>新東<br>宮田<br>池田<br>長野 | ○旧石器，ナイフ他剝片，集石遺構，細石核・細石刃<br>○縄文早前期土器片・集石遺構<br>○土師式土器散布 |
| 3 | 木場B | 〃 | 54．8．28<br>54．11．24 | 4,500 | 新東<br>出口<br>弥栄<br>中島 | ○土師式土器の散布<br>○中世溝状遺構 |
| 4 | 木場C | 〃 | 53．11．27<br>54．1．13 | 2,700 | 長野<br>出口 | ●北部に湯ノ谷川，北に傾斜する台地中腹に土師器，弥生式土器の散布が見られる。 |
| 5 | 山崎A | 栗野町山崎 | 52．12．13<br>53．3．26 | 6,000 | 吉永<br>牛ノ濱 | ●①弥生，土師，須恵器片の散布。<br>②中世（建物） |
| 6 | 山崎B | 〃 | 53．4．10<br>54．10．12 | 21,800 | 牛ノ濱<br>西田<br>中島<br>出口 | ○旧石器時代（細石核・細石刃）<br>○古墳時代・中世（青磁・陶磁器・建物跡・<br>○縄文時代早～後期・集石遺構土坑 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 山崎C | 栗野町山崎 | 52. 12. 13<br>53. 3. 26 | 3,000 | 中村<br>西田 | ●土師器,須恵器,青磁片の散布 |
| 8 | 中尾田<br>(山城) | 横川町中野 | 53. 5. 15<br>〜<br>54. 10. 6 | 9,800 | 新東<br>中島<br>井ノ上 | ●①縄文時代・早・前・中期土器(前平・手向山・阿高)石器集石遺構<br>②中世山城・建物遺構・青磁・陶磁器 |
| 9 | 木佐貫原 | 溝辺町木佐貫 | 51. 2. 6<br>52. 11. 31 | 17,000 | 吉永<br>牛ノ濱 | ●①縄文時代(前期・後期)土器片,炉穴<br>②土師器片 |
| 10 | 石峰 | 溝辺町麓 | 一次<br>(50.10.2<br>50.12.19<br>二次<br>51. 11. 24<br>53. 5. 15 | 20,000 | 河口<br>出口<br>西田<br>戸崎<br>青崎<br>池畑 | ●①縄文土器,住居跡1基,集石遺構<br>②土師器片 |
| 11 | 柳ケ迫 | 〃 | 51. 3. 22<br>51. 5. 17 | 700 | 長野<br>西田 | ●①細石器剝片(黒曜石)<br>②縄文時代(後期)土器片 |
| 12 | 長ケ原 | 〃 | 50. 10. 1<br>50. 11. 28 | 1,140 | 新東<br>中村 | ●①細石器剝片(黒曜石)<br>②縄文時代(前期)土器片<br>③弥生時代(後期)土器片 |
| 13 | 松木原 | 〃 | 50. 9. 18<br>50. 9. 26 | 420 | 新東<br>池畑<br>中村 | ●弥生時代(後期)土器片,黒曜石 |
| 14 | 葛根塚 | 〃 | 50. 9. 8<br>50. 9. 26 | 790 | 新東<br>池畑<br>中村 | ●①弥生時代(後期)土器片,石鏃(黒曜石) |
| 15 | 七ツ次 | 〃 | 50. 8. 5<br>50. 9. 18 | 2,700 | 弥栄<br>池畑<br>中村 | ●①縄文時代(後期)土器片<br>②弥生時代(後期)土器片 |
| 16 | 松ケ迫 | 〃 | 50. 7. 14<br>50. 8. 11 | 600 | 弥栄<br>中村 | ●①弥生時代(後期)土器片 |
| 17 | 木屋原 | 〃 | 50. 4. 7<br>51. 3. 31 | 4,520 | 弥栄<br>立神 | ●①縄文時代(前期)土器片<br>②弥生時代(後期)土器片 |
| 18 | 山神 | 〃 | 49. 6. 13<br>50. 4. 28 | 6,950 | 平田<br>牛ノ濱<br>吉永 | ●①縄文時代(前・後期)土器片<br>②弥生時代(後期)土器片<br>③平安時代・建物遺構,溝状遺構,須恵器,墨書土器(奠,廣〜坏2,破片15) |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 19 | 曲　迫 | 溝辺町麓 | 50. 1. 27<br>50. 3. 31 | 4, | 諏訪<br>弥栄 | ●①縄文時代（後期）土器片<br>②弥生時代（後期）土器片<br>③土師器片 |
| 20 | 枦　場 | 〃 | 49. 6. 5<br>50. 3. 27 | 2,500 | 平田，牛ノ濱,吉永 | ●①縄文時代(前・後期)土器片 |
| 21 | 西　免 | 隼人町西光寺 | 49. 5. 25<br>50. 2. 8 | 1,500 | 平田<br>吉永 | ●①弥生時代（後期）土器片<br>②玉髄，黒曜石<br>③弥生時代（後期）土器片<br>④土師器片 |
| 22 | 中　尾 | 〃 | 49. 9. 25<br>50. 2. 10 | 2,500 | 出口<br>吉永 | ●①縄文時代（後期）土器片<br>②弥生時代(終末期)土器片，磨製石鏃<br>③土師器片 |
| 23 | 入　道 | 〃 | 49. 8. 5<br>50. 3. 31 | 1,720 | 〃 | ●弥生時代(終末期)土器片，石鏃，土師器，溝状遺構 |
| 24 | 南十三塚 | 溝辺町崎森 | 49. 7. 16<br>49. 9. 20 | 600 | 出口<br>中村 | ●弥生時代(終末期)土器片 |
| 25 | 東　原 | 〃 | 49. 9. 17<br>50. 1. 24 | 8,700 | 諏訪<br>弥栄<br>中村 | ●①縄文時代（早期）土器片，<br>②弥生時代（後期）土器片，住居跡１基<br>③土師器片 |
| 26 | 桑ノ丸 | 〃 | 49. 8. 1<br>50. 4. 25 | 8,750 | 新東<br>牛ノ濱<br>中村 | ●①縄文時代(早・前・後期)土器片，石斧，石鏃 |
| 27 | 三代寺 | 加治木町<br>日木山 | 49. 3. 15<br>49. 7. 31 | 2,300 | 河口<br>新東<br>弥栄<br>牛ノ濱 | ●①縄文時代（早・前期）土器片，石斧，石鏃，集石遺構<br>②弥生時代（終末期）土器片<br>③土師器，土坑，ピット群 |
| 28 | 建馬場 | 加治木町反土 | 46. 12. 8<br>46. 12. 12 | 180 | 盛園<br>立神 | ①弥生時代（後期）土器片 |
| 29 | 松木田 | 姶良町鍋倉 | 46. 12. 12<br>46. 12. 15 | 42 | 〃 | ①柱穴～22個 |
| 30 | 小瀬戸 | 姶良町<br>西餅田 | 46. 8. 20<br>46. 11. 2 | 3,050 | 河口<br>戸崎<br>立神<br>尾ノ上<br>中間<br>有元 | ①縄文時代（前期）土器片（塞ノ神）<br>②弥生時代（中期）土器片<br>③墨書土師器（伴，大伴，原仲家），青磁，白磁,縁釉陶器，須恵器，紡錘車，土錘，井戸枠，木製器，柱穴(多数) |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 小　山 | 吉田町<br>東佐多浦 | 46. 11. 6<br>47. 2. 10 | 1,050 | 河口<br>戸崎<br>立神<br>尾ノ上<br>中間<br>有元 | ①縄文時代（早・前期）土器片（吉田，塞ノ神）<br>②弥生時代土器片<br>③墨書土師器，須恵器片，青磁，白磁，緑釉陶器，滑石製石鍋 |
| 32 | 谷　口 | 吉田町本城 | 46. 11. 10<br>46. 11. 18 | 124 | 盛園<br>立神 | ①縄文時代（後期）土器片，黒曜石剝片<br>②弥生時代土器片<br>③土師器，白磁，滑石製石鍋 |
| 33 | 上城城址 | 〃 | 47. 1. 14<br>47. 1. 18 | 20,000<br>現地踏査 | 盛園<br>田野辺 | ①中世～山城，青磁，白磁，瓦器 |
| 34 | 宮　後 | 吉田町宮ノ浦 | 46. 11. 10<br>46. 11. 18 | 44 | 〃 | ①縄文時代（晩期）土器片，石鏃（黒曜石）<br>②土師器 |
| 35 | 木の迫 | 鹿児島市<br>川上町 | 50. 12. 9<br>50. 12. 11 | 300 | 立神<br>牛ノ濱<br>吉永 | ●①弥生時代（後期）土器片 |
| 36 | 加治屋園 | 〃 | 50. 11. 26<br>51. 7. 31 | 1,200 | 弥栄<br>新東<br>長野<br>中村 | ●①細石器～細石刃，細石核，同時期土器片（有文）<br>②縄文時代前期土器片（塞ノ神式），集石遺構<br>③弥生時代後期土器片 |
| 37 | 加栗山 | 〃 | 50. 2. 15<br>51. 10. 16 | 30,600 | 戸崎<br>青崎<br>立神<br>吉永<br>牛ノ濱 | ●①細石器～細石刃，細石核，石鏃14，局部磨製石斧1，大型台形石器1<br>②縄文時代(前期)土器片（吉田式，前平式），住居跡17，土坑72，集石遺構14，石鏃，陰陽石（軽石製）<br>③中世～山城，柵列跡，空堀，柱穴，青磁，瓦器 |
| 38 | 神の木山 | 〃 | 50. 5. 12<br>50. 5. 15 | 20 | 戸崎<br>青崎 | ●①耕作土の下部はシラス層で遺物なし |

（●は，調査報告書発行終了）

# 山崎Ａ・Ｃ遺跡

# 例　　言

1．この報告書は，九州縦貫自動車道建設によって消滅する遺跡について行なった事前調査のうち，昭和52・53年度に発掘した山崎A遺跡と山崎C遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団の受託事業として，鹿児島県教育委員会事務局文化課が実施した。

3．山崎A遺跡と山崎C遺跡の調査は，第１次調査を新東晃一，立神次郎，池畑耕一が行ない，山崎A遺跡の第２次調査を吉永正史，牛ノ浜修，西田茂が，山崎C遺跡の第２次調査を中村耕治，西田茂が担当した。

4．本書の執筆は，山崎A遺跡の第３章３節３を牛ノ浜が，他を吉永が，山崎C遺跡は中村が行なった。

5．本書に用いたレベル数値は海抜絶対高である。

6．遺物番号は，山崎A遺跡・山崎C遺跡で通し番号を付した。

7．発掘調査にあたり、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏に指導・助言を得た。また石材については，鹿児島県教育委員会事務局学校教育課指導主事上竹利彦氏に鑑定を依頼し，青磁については，九州歴史資料館主任技師亀井明徳氏に鑑定を依頼した。

# 目　　次


第１章　山崎Ａ・Ｃ遺跡の位置及び環境…… 11
第２章　調査の経過…… 14
１節　調査に至るまで…… 14
２節　調査の組織…… 14
３節　調査の経過…… 14
第３章　山崎Ａ遺跡…… 17
１節　調査の概要…… 17
２節　土層…… 17
３節　遺構…… 29
1　集石…… 29
2　古道跡…… 29
3　建物跡…… 32
４節　遺物…… 32
1　土器…… 32
2　須恵器…… 41
3　青磁…… 44
4　古銭…… 45
5　石器…… 46
５節　小結…… 49
第４章　山崎Ｃ遺跡…… 51
１節　調査の概要…… 51
２節　遺構…… 51
３節　遺物…… 51
1　土器…… 51
2　石器…… 59
４節　小結…… 59
第５章　まとめにかえて…… 59

# 挿　図　目　次


第１図　山崎Ａ・Ｃ遺跡の位置図及び周辺の遺跡……12
第２図　山崎Ａ遺跡の地形図及びグリッド図……19
第３図　山崎Ａ遺跡の土層図(1)……21
第４図　〃　(2)……23
第５図　〃　(3)……25
第６図　〃　(4)……27
第７図　山崎Ａ遺跡出土の集石……29
第８図　〃　古道跡……30
第９図　〃　建物跡……31
第10図　〃　土器（縄文土器）……33
第11図　〃　〃（甕）……35
第12図　〃　〃（甕）……36
第13図　〃　〃（壺・高坏）……37
第14図　〃　土師器(1)……39
第15図　〃　〃(2)……40
第16図　〃　須恵器(1)……42
第17図　〃　〃(2)……43
第18図　〃　〃(3)……44
第19図　〃　青磁……45
第20図　〃　古銭……45
第21図　〃　石器……46
第22図　〃　石鏃……47
第23図　山崎Ｃ遺跡の地形図及びグリッド図……53
第24図　〃　土層図……54
第25図　〃　遺構及び遺物出土状態……55
第26図　〃　出土の遺物（縄文土器）……57
第27図　〃　〃（石斧）……57
第28図　〃　〃（石鏃）……57
第29図　〃　〃（土師器）……58

# 図　版　目　次


図版　1－1 山崎A遺跡の遠景……61
図版　1－2　〃　発掘風景……61
図版　2－1　〃　土層……62
図版　2－2　〃　集石……62
図版　3－1　〃　集石の断面……63
図版　3－2　〃　古道跡(1)……63
図版　4－1　〃　〃　(2)……64
図版　4－2　〃　建物跡の確認状況……64
図版　5－1　〃　〃　検出状況……65
図版　5－2　〃　〃　ピット断面……65
図版　6－1……　〃　遺物の出土状況(1)……66
図版　6－2　〃　〃　(2)……66
図版　7　〃　出土遺物(1)……67
図版　8　〃　〃　(2)……68
図版　9　〃　〃　(3)……69
図版　10　〃　〃　(4)……70
図版　11　〃　〃　(5)……71
図版　12　〃　〃　(6)……72
図版　13　〃　〃　(7)……73
図版　14　〃　〃　(8)……74
図版　15　〃　〃　(9)……75
図版　16　〃　〃　(10)……76
図版　17－1 山崎C遺跡の遺跡近景……77
図版　17－2　〃　ピット検出状況……77
図版　18－1　〃　出土遺物(1)……78
図版　18－2　〃　〃　(2)……78
図版　19－1　〃　遺物の出土状況……79
図版　19－2　〃　出土遺物(3)……79
図版　19－3　〃　〃　(4)……79
図版　20－1　遺物の出土状況……80
図版　20－2　出土遺物(5)……80
図版　20－3　〃　(6)……80

# 第１章　山崎Ａ・Ｃ遺跡の位置及び環境

山崎Ａ・Ｃ遺跡は，鹿児島県姶良郡栗野町米永牛瀬戸に所在し，鹿児島空港の北約16kmの地にあり，国鉄栗野駅の南西約750ｍの標高約210～220ｍのシラス台地上にある。

遺跡の所在する栗野町は，鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置する。東では，霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接している。北は熊峯を隔てて吉松町，西は伊佐郡菱刈町，西南隅に国見岳がある。南は牧園・横川両町と境を接しているが，火山灰土で地形が複雑である。

熊本県白髪岳に源を発した川内川は，吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地をつくり，米作地帯を形成し，約300*ha*の田地を潅漑している。以前は，川内川の氾濫のたびに中央低地は泥海化するのが例年であったが，護岸工事の進捗によって近年ようやく被害を僅少に止めるようになった。

栗野岳の裾野は栗野町に広く拡がって来ており，一帯は火山灰土に覆われ，火山岩・火山灰・砂土が多くみられ，水の浸食がひどく地形は複雑であるが，町の畑耕作地の過半を与えている。又，幸田・恒次・米永方面は，栗野岳の裾野と国見岳等の裾野で，小高原の形となってはいるが，雨水の浸食を受けて複雑な地形をなしている。

遺跡のある牛瀬戸という地名は，炭疽予防のため，市来どんの屋敷で牛の血を採っていた。このとき牛を引いて瀬戸を通っていたので牛瀬戸と呼ぶようになったという。[1] 周囲は畑に利用されており，桑が栽培されている。

遺跡の周辺には，割合多くの遺跡が地域の研究者等により確認されている。[2] 旧石器時代では，細石刃・細石核等が採集されている麦生田遺跡[3]や昭和53・54年度に九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された木場Ａ・Ａ－２遺跡[4]がある。古墳時代では北方遺跡の地下式横穴[5]が調査されており，周辺の人家の石垣に使われている粘板岩質の割り石は地下式板石積古墳の存在を考えさせるものとなっている。歴史時代では，松尾城跡[6]があり，本丸・二の丸跡が現存し，田尾原[7]・稲葉崎[8]には県指定史跡の供養塔群がある。

(1)　「栗野町郷土史」　栗野町

(2)　林昭男・米満重満　「栗野町の遺跡について」　鹿児島考古８号　1973他

(3)　(2)に同じ

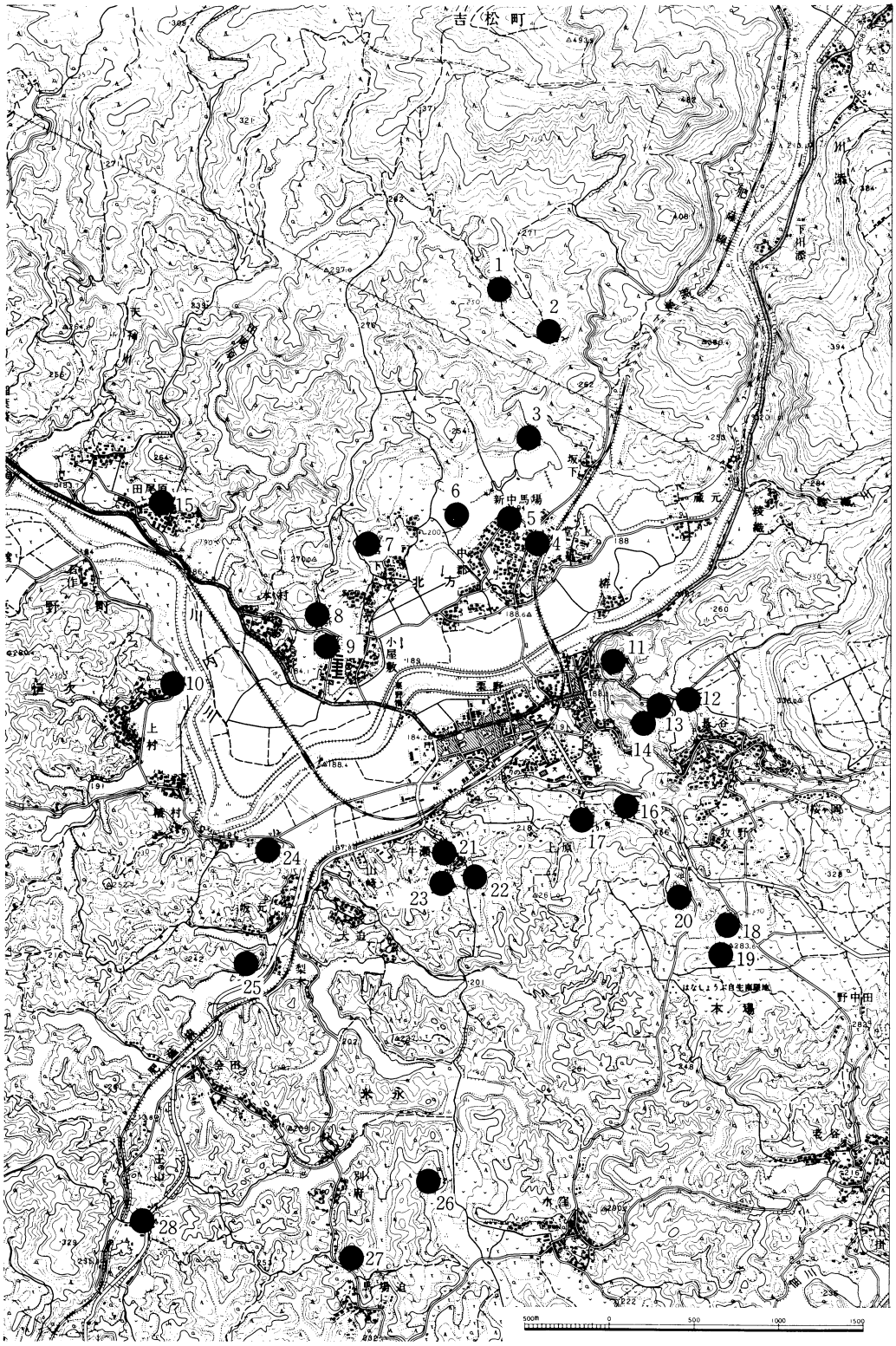
(4)　鹿児島県教育委員会発掘　現在整理中

(5)　河口貞徳　「北方地下式横穴」　鹿児島考古５号　1971

(6)　「栗野町郷土史」　栗野町他

(7)　五味克夫　「栗野町稲葉崎・田尾原供養塔群」　鹿児島県文化財調査報告書第13集　1967

(8)　(7)に同じ




第１図　山崎Ａ・Ｃ遺跡の位置及び周辺の遺跡

表１　山崎Ａ・Ｃ遺跡周辺の遺跡一覧表

| No. | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 遺　　物 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 山ノ口Ｂ | 姶良郡栗野町北方山ノ口 | 弥生 | |
| 2 | 山ノ口Ａ | 〃 | 縄文・弥生・土師 | |
| 3 | 麦生田 | 麦生田 | 旧石器（細石刃・細石核） | (1) |
| 4 | 堂ノ上 | 堂ノ上 | 弥生・土師 | |
| 5 | 北　方 | 北方真中馬場 | 地下式横穴 | |
| 6 | 柿ノ木 | 中郡柿ノ木原 | 縄文・弥生 | |
| 7 | 宮　下 | 北方宮下 | 〃 | |
| 8 | 池ノ川 | 池ノ川 | 弥生 | |
| 9 | 迫　山 | 迫山 | 〃 | |
| 10 | 上村井丸 | 恒次上村井丸 | 縄文（指宿・御領） | |
| 11 | 松尾城跡 | 木場 | 城跡 | |
| 12 | 木場Ａ－２ | 〃 | 旧石器（細石刃・細石核） | (2) |
| 13 | 木場Ａ | 〃 | 縄文(吉田･前平･塞ノ神･平栫)･旧石器 | (2) |
| 14 | 木場Ｂ | 〃 | 土師 | (2) |
| 15 | 田尾原 | 田尾原 | 供養塔群 | |
| 16 | 木場Ｃ | 木場 | 縄文（岩崎）・土師 | 本報告書 |
| 17 | 諏訪岡 | 田木場諏訪岡 | 縄文(阿高･出水･市来･御領) | (1) |
| 18 | 上佐牟田 | 木場上佐牟田 | 縄文(押型文･曽畑･吉田･轟) | (1) |
| 19 | 西　原 | 西原 | 縄文(押型文･曽畑･轟)・弥生 | (1) |
| 20 | 花ノ木 | 花ノ木 | 縄文(塞ノ神･深浦･押型文)集石･土坑 | (3) |
| 21 | 建崎Ｂ山 | 牛瀬戸 | 建物跡･堀･縄文(吉田･前平)・土師 | (2) |
| 22 | 山崎Ａ | 〃 | 建物跡・古道・土師 | 本報告書 |
| 23 | 山崎Ｃ | 〃 | 青磁・土師 | 〃 |
| 24 | 下坂元 | 下坂元 | 弥生 | |
| 25 | 坂元城跡 | 坂元 | 城跡 | |
| 26 | 後ケ迫 | 水窪後ケ迫 | 弥生 | |
| 27 | 石の本 | 石の本 | 縄文 | |
| 28 | 玉ノ山 | 玉ノ山 | 弥生 | |

(1)　林昭男・米満重満　「栗野町の遺跡について」　鹿児島考古８号　1973

(2)　鹿児島県教育委員会発掘　　現在整理中

(3)　鹿児島県教育委員会　「花ノ木遺跡」　1975

他「鹿児島県市町村別遺跡地名表」　鹿児島県教育委員会　1977　等より引用

# 第２章　調査の経過

## １節　調査に至るまで

昭和47年２月23日に日本道路公団は「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき，鹿児島線（吉松―加治木線）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対し，鹿児島県教育委員会文化室（当時）は，昭和47年８月２～10日，同月18～26日までの２回にわたり，延長38km，幅２kmにわたって分布調査を実施した。

この結果に基づいて，文化室は路線の決定について埋蔵文化財の保護の上から十分配慮されることを要望した。さらにその後，昭和49年１～２月に河口貞徳氏の協力を得て再確認のための分布調査を実施し，これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め，道路公団と協議の結果保存する遺跡１ケ所（吉松町堂迫地下式横穴），記録保存する遺跡10ケ所（当遺跡等）が決定した。

発掘調査面積

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡面積 | 山崎Ａ | 14,000㎡ | 山崎Ｃ | 4,000㎡ | | |
| 第１次調査面積 | 山崎Ａ | 700㎡ | 山崎Ｃ | 500㎡ | | |
| 第２次調査面積 | 山崎Ａ | 6,000㎡ | 山崎Ｃ | 3,000㎡ | 計 | 9,000㎡ |

## ２節　調査の組織

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査責任者 | 文化課長 | 嶋元　牧雄 | (S.52.10～53.3) |
| | 〃 | 谷崎　哲夫 | (S.53. 4～54.3) |
| | 〃 | 山下　典夫 | (S.54.4～　　) |
| 調査企画 | 専門員 | 本蔵　久三 | |
| 調査担当者 | 主事 | 新東　晃一 | |
| | 〃 | 立神　次郎 | |
| | 〃 | 池畑　耕一 | |
| | 〃 | 吉永　正史 | |
| | 〃 | 牛ノ浜　修 | |
| | 〃 | 中村　耕治 | |
| | 文化財調査員 | 西田　　茂 | |
| | 〃 | 井上　秀文 | |
| 事務担当 | 係長 | 中條　　享 | (S.52.10～55.3) |
| | 〃 | 川畑　栄造 | (S.55.4～　　) |
| | 主事 | 伊地知千晴 | (S.52.10～54.3) |
| | 主査 | 安藤　幸次 | (S.54.4～　　) |
| | 主事 | 天辰　京子 | |

## ３節　調査の経過

発掘調査は，昭和52年10月24日から昭和53年11月24日まで行なったが，経過は日誌抄により以下略述する。

10月24日　発掘器材の搬入，第１次調査開始，山崎Ｃ遺跡トレンチ設定及び掘り下げ
10月26日　谷頭の丘上に古墳様墳丘２個を発見し，調査を併せて行なう。
27日　山崎Ａ遺跡にトレンチ設定及び掘り下げ。溝状遺構を確認する。
11月４日　古墳様墳丘の調査終了。
７日　池畑主事に代り立神主事調査に参加。
11日　第１次調査終了。
12月７日　プレハブ移設，器材の搬入。
13日　第２次調査の開始，山崎Ａ遺跡トレンチ設定及び掘り下げ。
15日　Ｍ・Ｎ－６区にpitを確認する。
21日　Ｍ・Ｎ－６・７区の全面調査を開始する。
23日　年内の作業終了，安全対策・道具の点検。
１月９日　新年の調査再開。２×３間の建物跡を確認（Ｈ・Ｎ－７区）。
10日　２×３間の建物跡を確認（Ｍ・Ｎ－６区）。
12日　Ｍ・Ｎ－６・７区の建物跡$^{1}/_{20}$実測。
17日　建物跡pitの掘り込み状況観察のため断ち割りを行なう。
19日　１号建物跡のpitの最深部より内黒土師片出土。
遺物分布平板実測（$^{1}/_{100}$）
20日　Ｆ～Ｌ－１～９区の畑にトレンチ設定及び掘り下げ。
23日　トレンチ掘り下げ続行。Ｌ－７区土層実測（$^{1}/_{20}$）
Ⅱａ 層から土師器・須恵器の破片多く出土。
31日　平板実測（$^{1}/_{100}$）
２月１～６日　積雪のため作業中止。
７日　掘り下げ続行。
16日　Ｌ－４区に古道跡を確認。
Ｇ～Ｉ－９～11区の畑に十字のトレンチ設定。
22日　Ｍ－６区Ｖ層に集石を検出。
23日　集石の実測（$^{1}/_{20}$）
24日　Ａ～Ｅ－14～18区にトレンチ設定。
27日　Ｊ～Ｌ－６，Ｈ－６～８区の土層実測（$^{1}/_{20}$）
３月２日　Ｈ～Ｋ－４～７区の全面調査開始，ブルによる表土剝ぎ。
６日　山崎Ｃ遺跡第２次調査開始，中村主事調査に参加。
８日　Ａ遺跡－Ｃ－15～18区に古道を確認，遺物は土師が中心。
10日　Ｃ遺跡－全面調査を開始する。表土剝ぎにブルを投入。
14日　Ｃ遺跡－Ⅲ層上面に円形ピット検出。

17日　Ａ遺跡ートレンチ調査終了し，Ｉ～Ｋ－４～６区の全面調査。

23日　Ａ遺跡ー洪武通宝，皇宋通宝出土。

24日　Ｃ遺跡ーpitの検出ほぼ終る。つながりは判明しない。

Ａ遺跡－Ⅱａ層の掘り下げ，土師器片多し。

30日　Ｃ遺跡ー平板実測（1／50）

31日　52年度の調査本日まで。安全対策，道具の点検。

４月10日　53年度の調査開始。

12日　Ａ遺跡－Ⅱａ層下部からⅡｂ層上部に東西に走る古道確認（Ｉ～Ｋ－４区）。

Ｃ遺跡ートレンチ設定し縄文の確認を行う。

14日　Ｃ遺跡－Ⅲａ層より石鏃出土。

19日　排土処理のためマルチローダーを投入する。

Ａ遺跡－Ⅱｂ層の掘り下げ。土師器片の散布。

25日　Ａ遺跡－Ⅱｃ層の掘り下げ。土師器片の散布。

26日　Ｃ遺跡ー西田調査員調査に参加。

27日　Ａ遺跡ー土層実測（1／20）

28日　Ｃ遺跡ー縄文の確認トレンチ，中村主事今日まで。

５月１日　Ａ遺跡－Ⅱｂ層掘り下げ，

Ｃ遺跡ートレンチ掘り下げ続行

４日　Ａ遺跡ー出土遺物平板実測

15日　Ａ遺跡－Ｈ～Ｋ－４区の古道検出終了，写真撮影，平板実測（1／100）

Ｃ遺跡ートレンチ掘り下げ続行

25日　Ａ遺跡－Ｃ－14～19区のユンボによる覆土・表土剝ぎ

Ⅱｃ層の掘り下げ開始

31日　Ｃ遺跡ートレンチ掘り下げ終了

６月２日　吉永主事今日まで。

８日　Ｃ遺跡土層実測（1／20）調査を終了する。

９日　今日からＡ遺跡へ全員は入る。Ｃ－14～19区の全面調査開始。

19日　Ⅱａ層の掘り下げほぼ終了し，古道跡の検出へかかる。

雨の日が多く調査が遅々として進まず。

29日　古道跡（溝状遺構？）の写真撮影

７月５日　土層用トレンチ掘り下げ。　平板実測（1／100）

12日　土層実測（1／20）　Ｊ～Ｋ－４～６区Ⅲａ層掘り下げ

14日　Ｃ－14～19区土層実測（1／20）　Ｊ～Ｋ－４～６区土層用トレンチ掘り下げ

24日　Ｊ～Ｋ－４～６区土層実測（1／20）

山崎Ａ遺跡調査終了

# 第3章　山崎A遺跡

## 第1節　調査の概要

遺跡は，栗野インターチェンジの計画地内にあり，付近は標高208～220mで，ほぼ北に傾斜した谷頭部にあたる。

谷線にほぼ沿った形で，10×10mのグリッドを設定し（グリッド方位NW21°），西から東へA・B……区，北から南へ1・2……区とし，各グリッドは，A－1区，B－2区と呼ぶことにした。

確認調査時のトレンチは，グリッドの東側・北側にあるという意味を付すためにA－1－E（A－1区の東側にある）トレンチ，B－2－Nトレンチと呼ぶこととし，北から南へ漸次確認を行なった。

その結果，M・N－6・7区，I～K－4～6区，C－14～18区で全面発掘を行った。

M・N－6・7区から建物跡2基，縄文時代に属すると思われる集石1基，I～K－4～6区とC－14～18区で古道跡と思われるものが検出された。

遺物は第Ⅱ層に土師器，須恵器，青磁，染付破片が，第Ⅲ層の上部に成川式，下部に縄文式土器片が，第Ⅴ層に縄文式土器片がそれぞれ包含されていた。石器では，石斧・敲石，石鏃が検出された。

## 第2節　土　層

現在の地形は，耕地化のために階段状となっており，部分的に削平されたり覆土されたりしており，保存状況は必ずしも良好とはいえない。

第Ⅰ層　表層であり，現在の耕作土である。

第Ⅱ層　黒色火山灰土層である。土師器・須恵器・青磁・染付等の遺物を包含する。

第Ⅲ層　赤褐色軟質土層で，俗に赤ホヤ，赤ボッコと呼ばれるもので，暗赤褐色軟質土（Ⅲa）と赤褐色軟質土（Ⅲb）に細分できる。第Ⅲa層には成川式土器を，第Ⅲb層には縄文式土器を包含する。

第Ⅳ層　黄褐色パミス層で無遺物層である。このパミスは鬼界カルデラにその源を求めることができるという。(町田洋　“火山灰は語る”　1977)

第Ⅴ層　細分すれば4枚に分けられる。Vaが青灰色土層，Vbが黄褐色砂質層，Vcが乳褐色砂質土，Vdが灰褐色砂質土である。Vc・Vdはシラスの二次堆積の可能性が考えられる。

第Ⅵ層　6枚に細分できる。Ⅵa・d・fが黒褐色砂質土，Ⅵbが茶褐色粘質土，Ⅳc・eが黄褐色砂質土で無遺物層である。

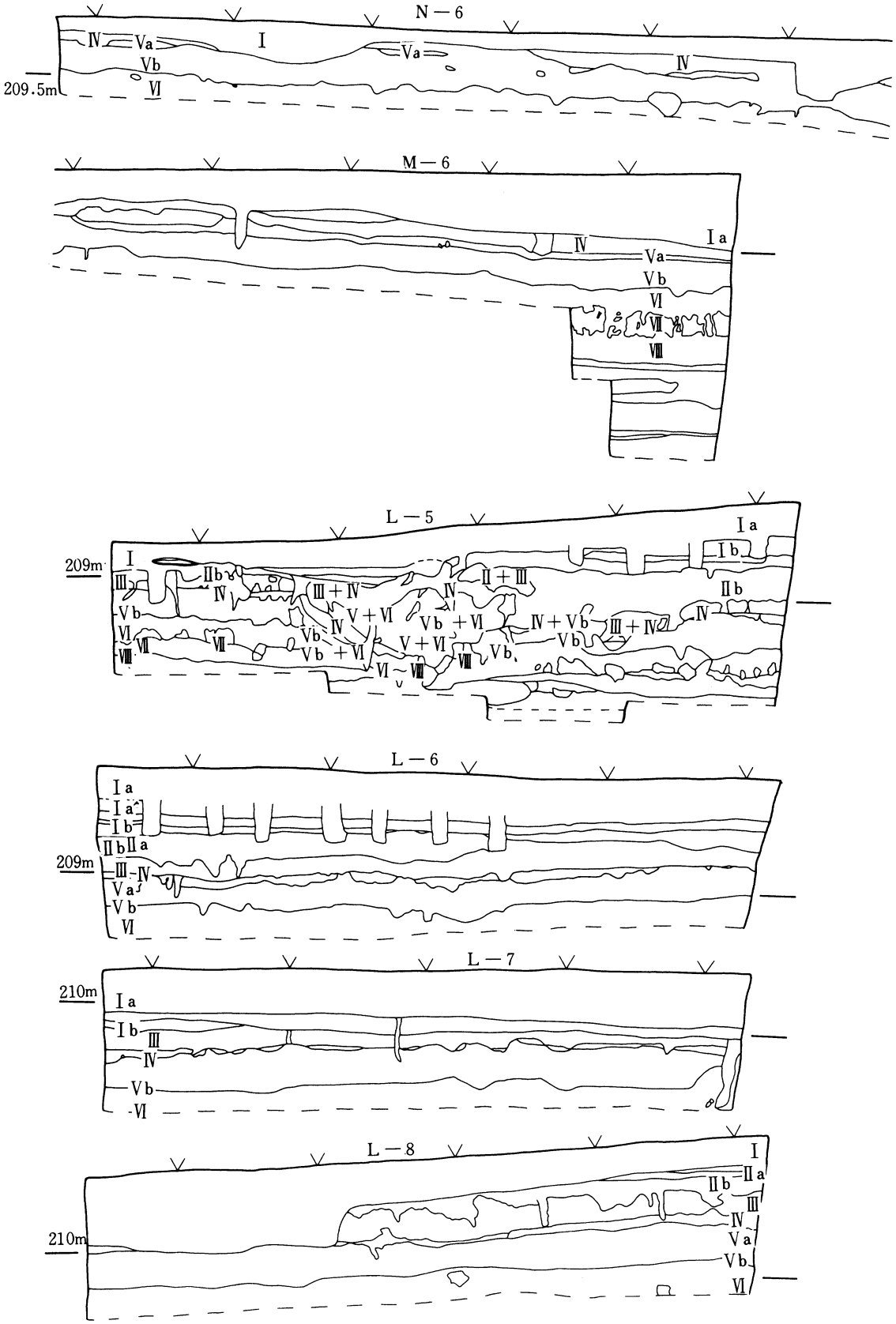
第Ⅶ層　茶褐色粘質土で無遺物層である。

第Ⅷ層　黄褐色硬質土で無遺物層である。

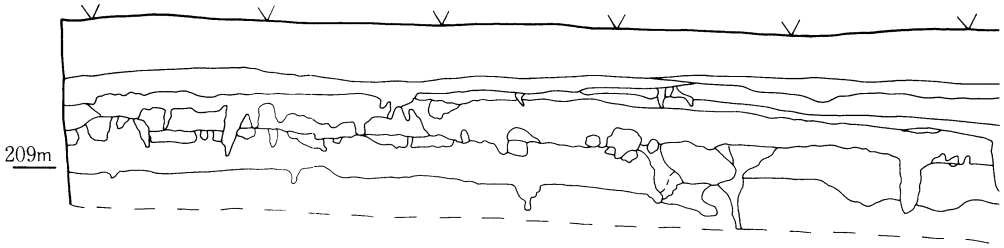
第Ⅸ層　シラス土であり，これ以下を基盤層として取り扱った。

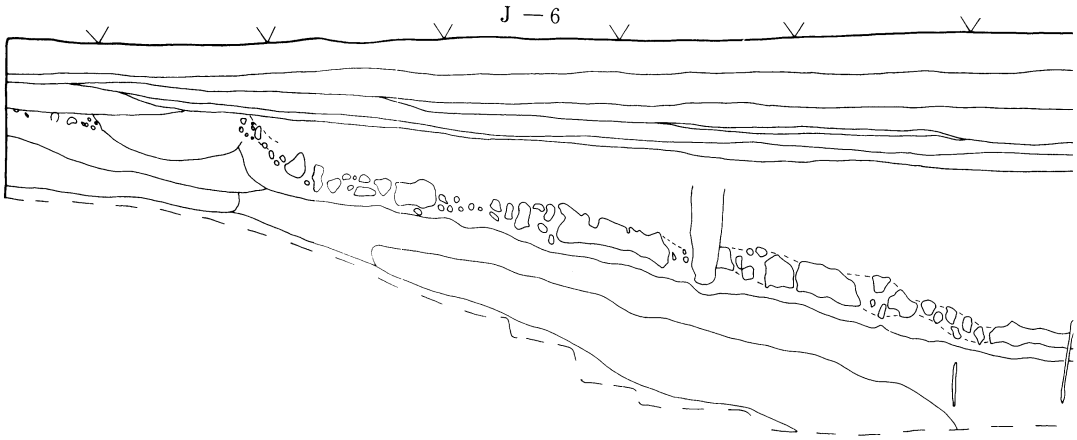
第２図 山崎Ａ遺跡の地形図及びグ

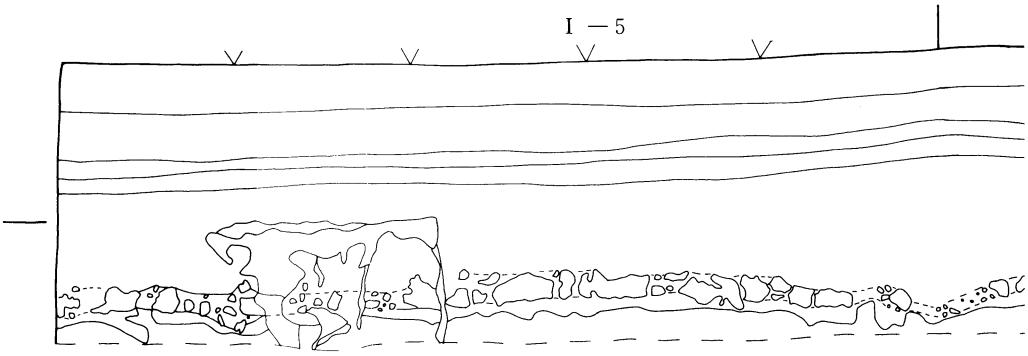
ッド図



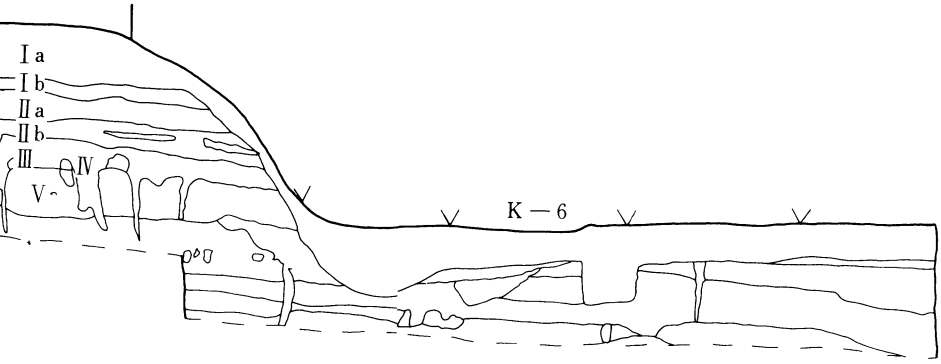

第3図 土 層 図 （1）

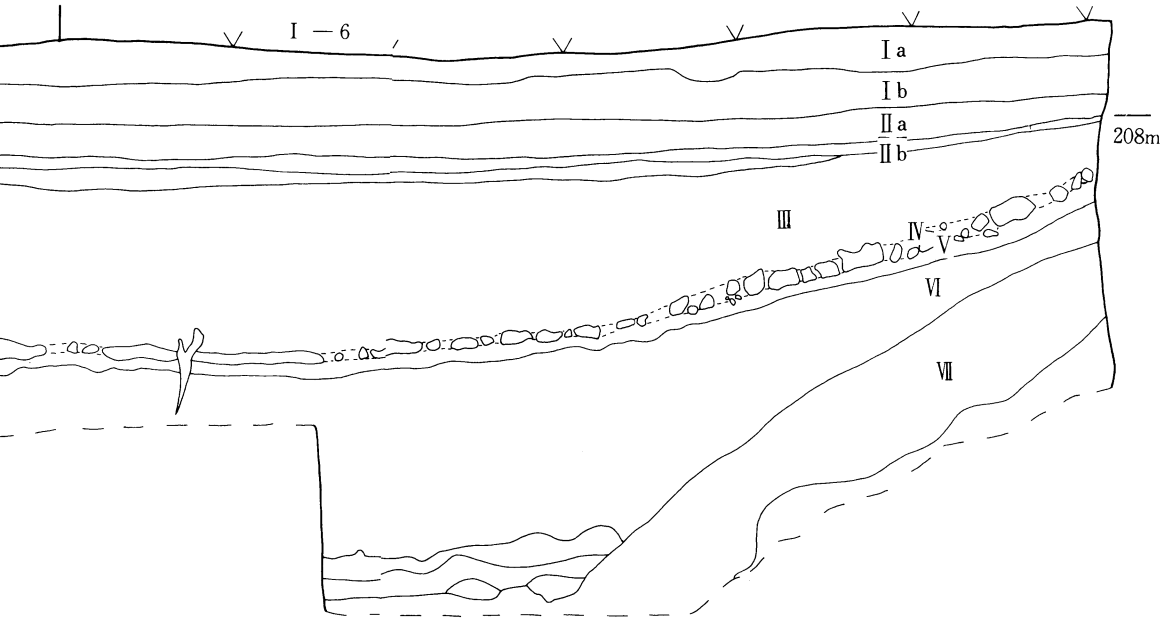


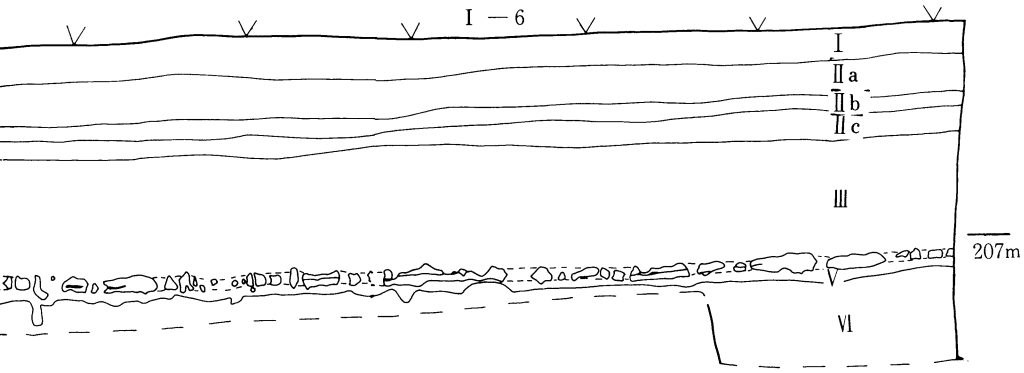



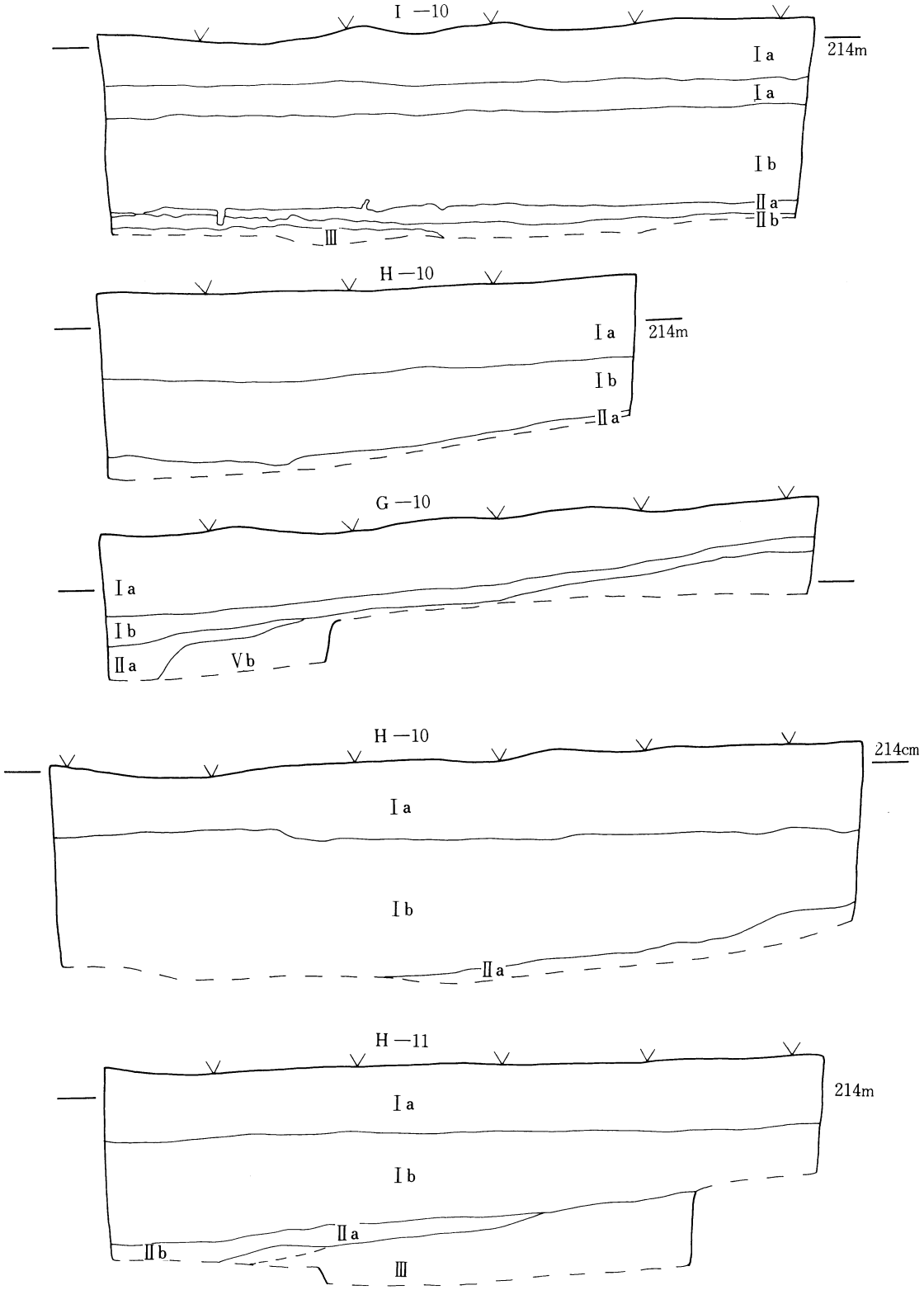

**第4図　土　層　図**



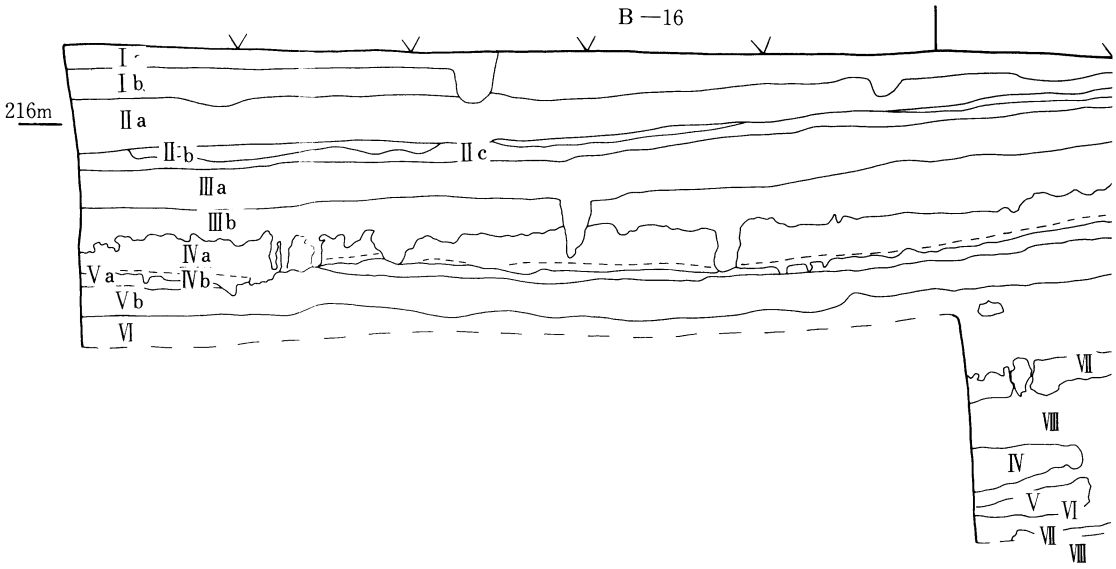



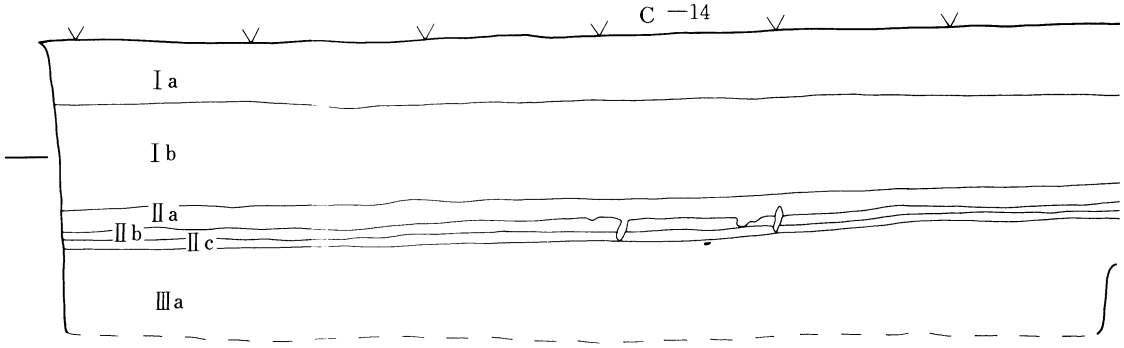



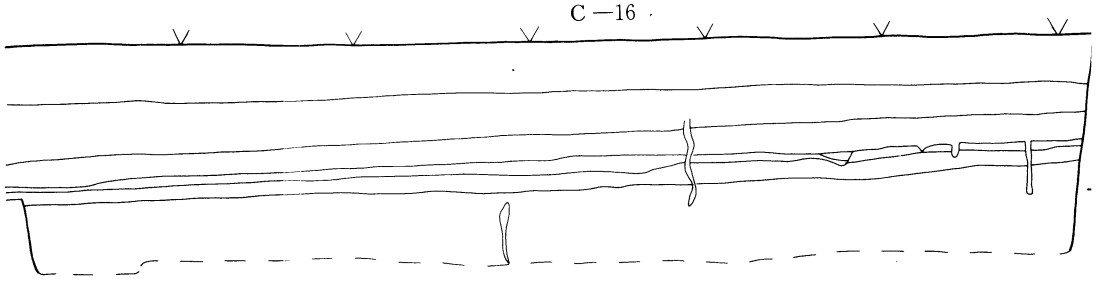

2)


I —10
214m
Ⅰa
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲ
H —10
214m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
G —10
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅴb
H —10
214cm
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
H —11
214m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
Ⅲ

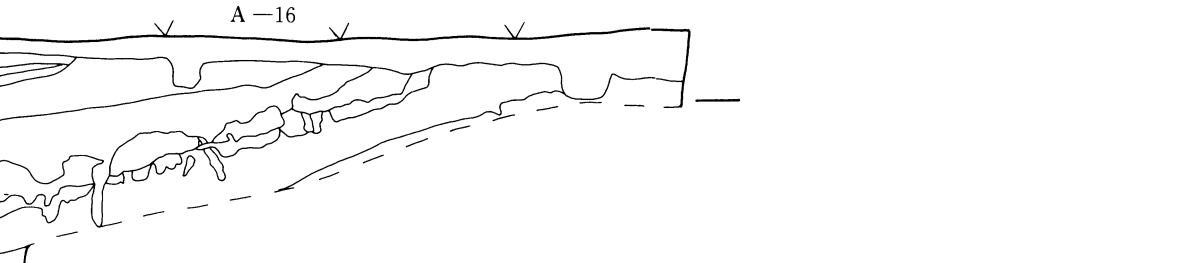
第5図 土 層 図 (3)

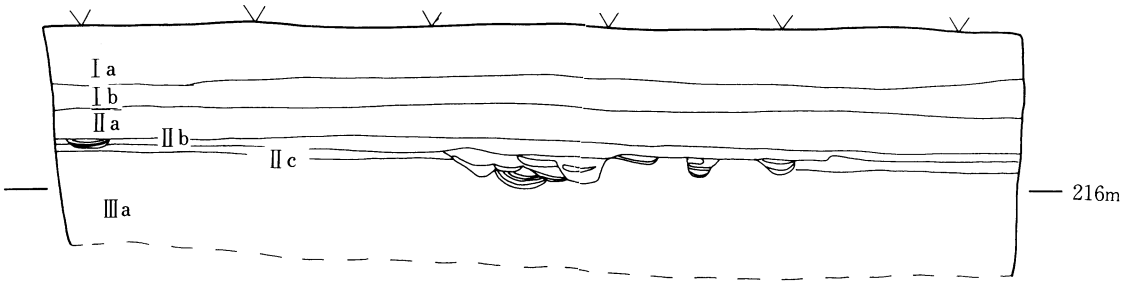

B —16
216m
Ⅰ
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴa
Ⅴb
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ

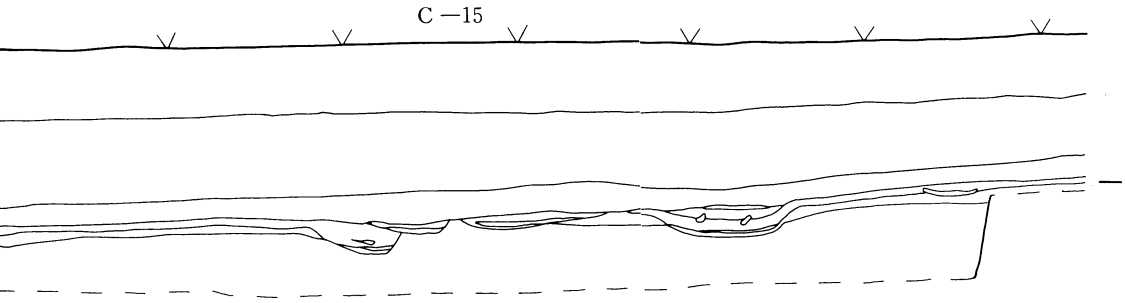

C —14
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱc
Ⅲa


C —16

**第6図 土　層　図**




216m

## 第3節　遺　構

### 1　集　石

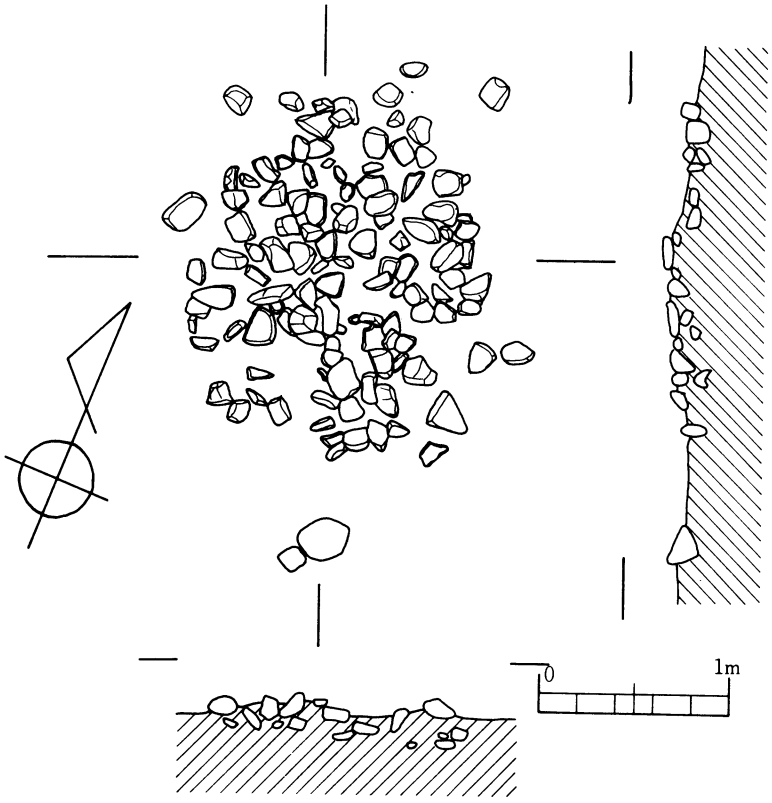
**(第7図, 図版2,3)**

M－6区の第Ⅴ層の青灰色土層の下部から，径が10～20cmの大きさの石よりなる集石が確認・検出された。

この集石は，ほぼ水平で，掘り込みは確認できなかった。

礫の一部には，熱を受けたためか赤褐色を呈するものもみられた。

集石の中や周囲からの出土遺物はなかった。




**第7図　山崎A遺跡出土の集石**

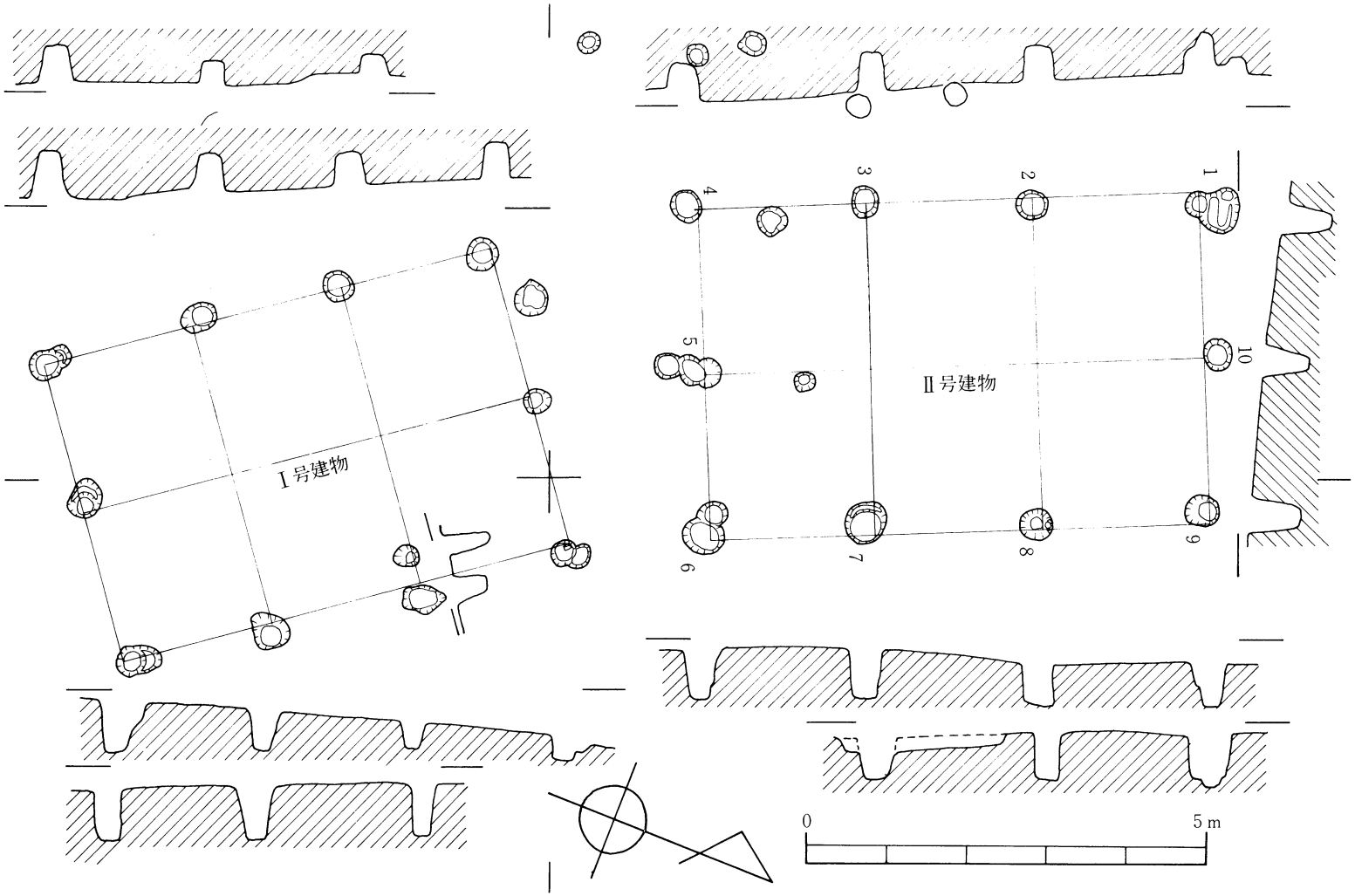
### 2　古道跡　(第8図, 図版3,4)

古道跡は，東西方向と南北方向の2種類に大別される。東西方向の古道は5本みられ，第Ⅲ層の赤褐色軟質土層に第Ⅱ層の火山灰土層が埋土し，その底面は踏み固めたとみられる面が検出された。Ⅰ～L－4区に検出され，幅30～70cmで長さ30m程検出できたが，西側は範囲外に延びているため確認できなかった。

南北方向の古道跡は，C～L～4～20区に6本検出され，たがいに複合している。やはりⅢ層に第Ⅱ層が埋土しているが，砂層と黒色土層の互層でレンズ状に砂層があり，その表面は酸化鉄によって固くなっている。約160m程確認・検出できたが，C－19区の南側は道路予定地外となり確認できなかった。

F
G
H
I
J
K
L
M
N
2
3
4
5
6
7
8
9
E
210
215
210
A
B
C
D
11
12
1
14
15
16
17
18
19
20
215
225
230
220
235
0
50m

第8図　古　　道




第9図 建　物　跡

### 3．建物跡（第９図，図版4,5）

Ｍ・Ｎ－６・７区において，表土下に第Ⅲ層があらわれ，黄褐色の砂質土が落ち込んでいるピットが37個検出された。そのうちの20個は10個で１単位の２×３間の建物跡が２基確認・検出された。

Ⅰ号建物跡は，芯心間が192cmのものである。この建物の長軸の方位はＮＷ31度である。ピットの径は30～40cm，深さは30～64cmである。

Ⅱ号建物跡は，芯心間が204cmのものである。この建物の長軸の方位はＮＷ17.5度である。ピットの径は30～40cm，深さは48～60cmである。

ピットの径や深さはそれぞれ異なってはいるものの，深さにおいてはその$\frac{1}{3}$～$\frac{1}{2}$が地囲めされており，その上面が１号及び２号においてそれぞれほぼ水平となっている。このことは掘立柱を建てる際に坪地業がなされたのではないかと想定することができる。

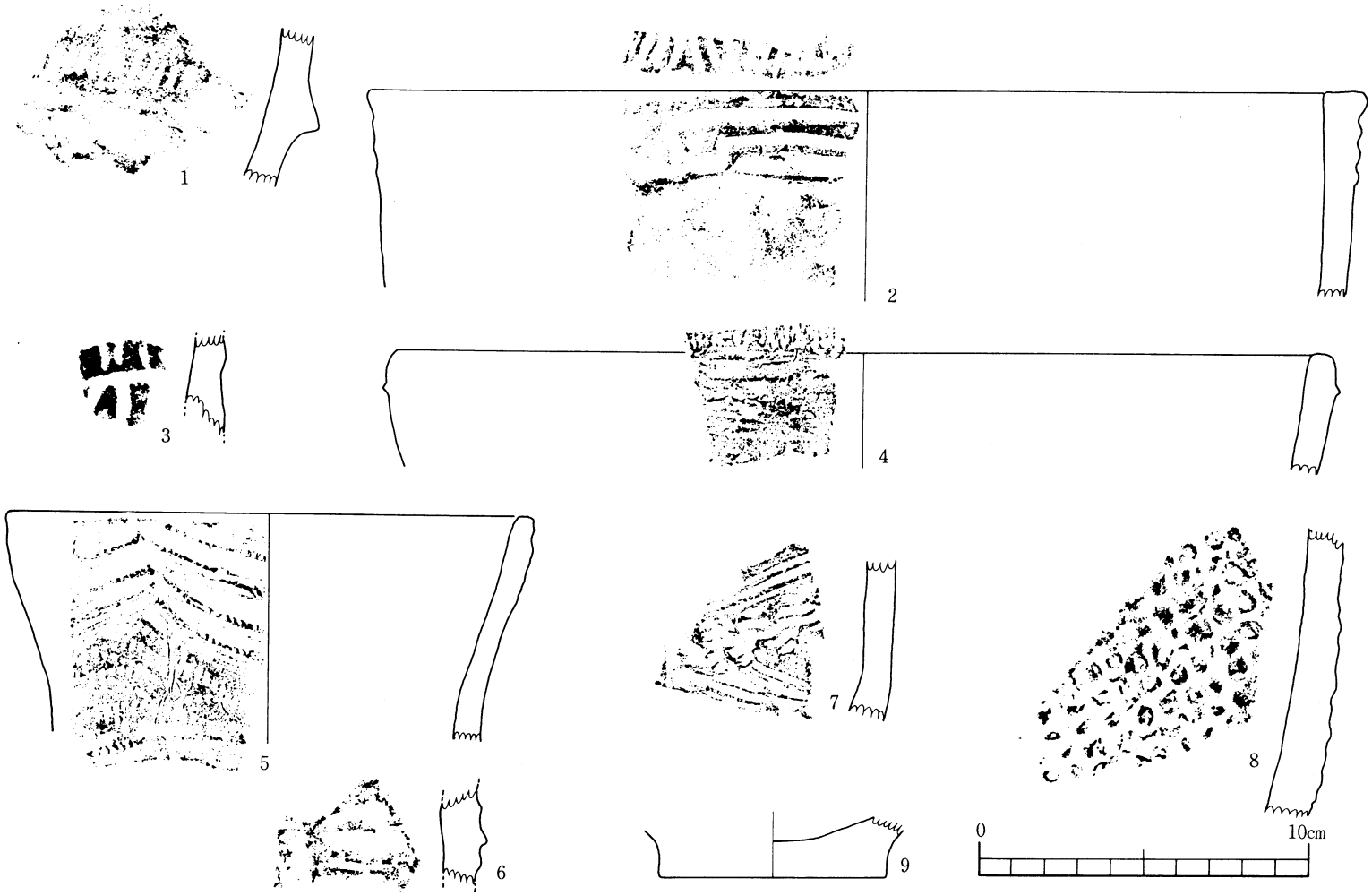
又，Ⅱ号建物において，１～10のピットのなかで，**2**・**3**・**7**・**8**のピットの最深部には内黒土師器の小破片（１～２cmの大きさ）が１～２個ずつ埋められていた。これらの破片は，胎土・色調からみて同一個体のものと考えられるものであり，意図的に埋設されたことが考えられる。

## 2節　遺　物

### 1．土　器

**縄文式土器（第10図，図版7）**

第Ⅲ層と第Ⅴ層から出土したものである。**1**～**6**・**9**が第Ⅲ層から，**7**・**8**が第Ⅴ層から出土した。**1**は赤茶褐色を呈する口縁部片である。断面が三角形を呈する突帯を有し，その上面にヘラによる爪形文を施している。胎土には多くの砂粒を含み，小礫も混じている。焼成は良い。**2**は口縁径が30.2cmの深鉢形土器の口縁部片である。平担な口唇部には３条のヘラによる「W」字の連続文を施し，口縁部には，ヘラみがきした後に浅い沈線文を施し文様帯を構成する。文様帯下部はあらいヘラなでによる調整が下から上へ向ってなされている。内面はヘラなでである。色は暗茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。焼成は良い。**3**は暗茶褐色を呈する口縁部の破片である。外面はヘラによる浅い沈線文を施す。内面は横位の調整がなされている。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**4**は口縁径28.5cmの口縁部の破片である。口唇部に貝殻腹縁による連続刺突文を施す。口縁部は横位の一条の突帯をする。調整は内外共横位である。　外面が赤褐色，内面は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**5**は口縁径15.8cmの深鉢土器の破片である。口縁部に細い突帯を３～４条ヘラにより作し出し，貝殻腹縁による連点文を施し，胴部にも連点文を施すものである。色は黒褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。焼成は良い。**6**は茶褐色の胴部片である。外面に細い突帯を貼り付けている。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**7**は茶褐色の胴部片である。外面に３～５条の貝殻腹縁による条痕文を施している。内面も貝殻条痕交を有する。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**8**は楕円押型文土器の胴部破片である。色は赤褐色を呈し，胎土に細砂粒を含む，焼成は良い。**9**は底部径 6.9cmの平底




第10図　縄　　文

の破片である。外面は茶褐色を呈し，内面は灰褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。

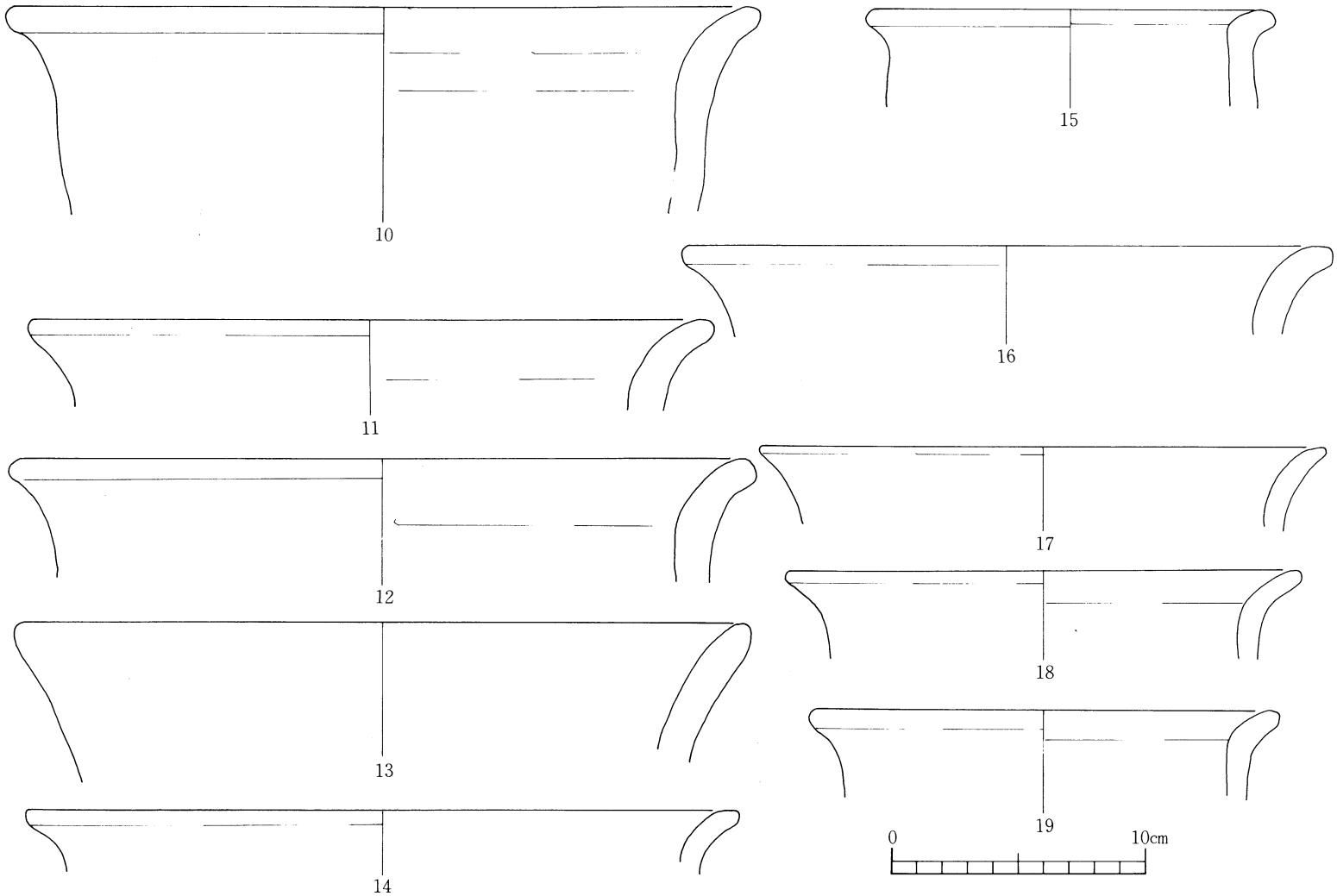
**甕　(第11,12図,図版7,8)**

第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上部にかけて出土したものである。**10**～**21**は口縁部片である。

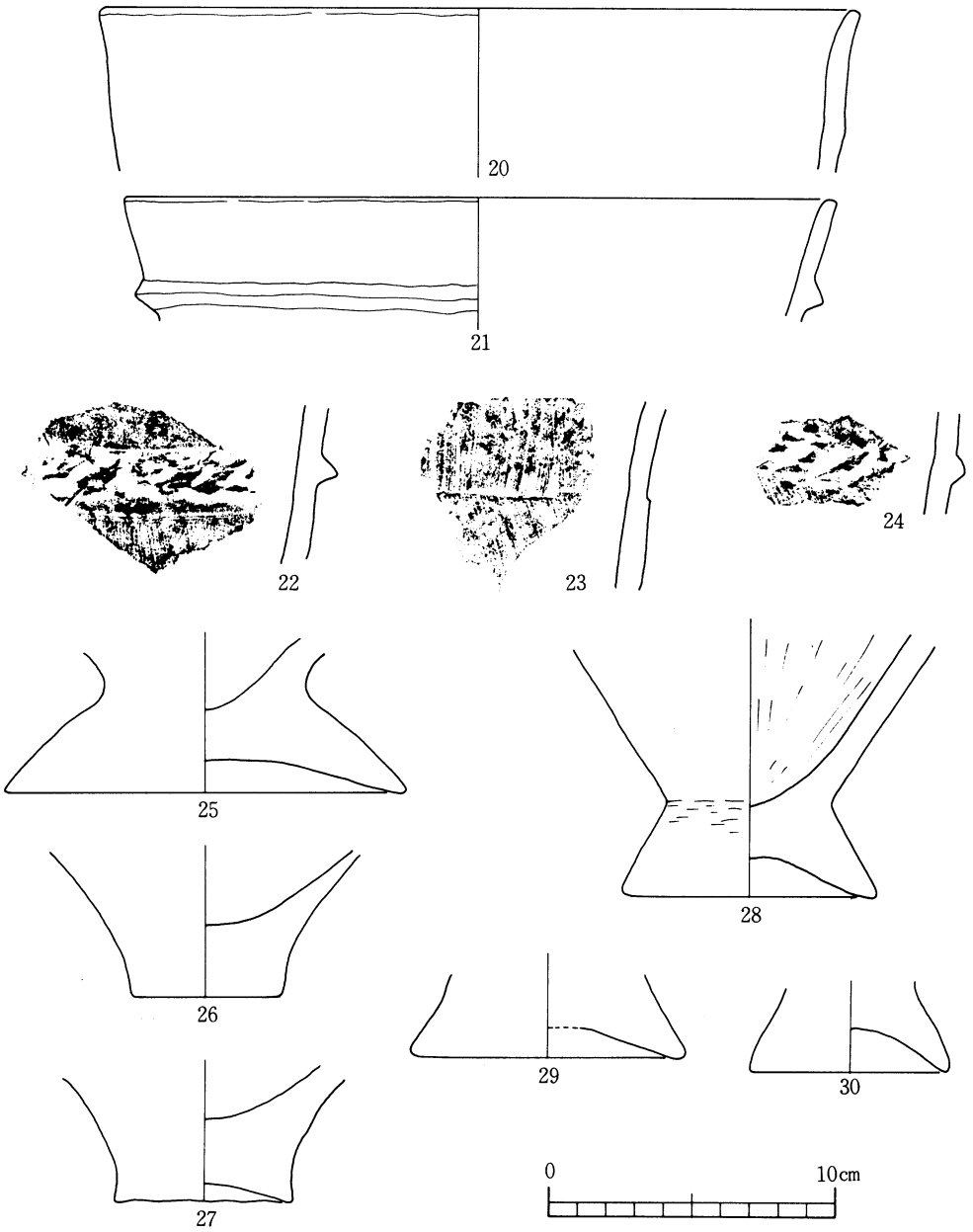
**10**は暗茶褐色を呈し，口縁部径は29.4cmである。口縁部の内外は横位のハケ目で，頸部以下は外面が縦位の櫛目，内面が斜位のヘラなでである。胎土には砂粒を多く含み，焼成は良い。**11**は暗茶褐色を呈し，口縁部径は26.9cmである。口縁部の内外は横位のハケ目である。胎土には小礫も含まれており，焼成は良い。**12**は茶褐色を呈し，口縁部径は29.4cmである。内外にハケ目を横位に施す。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。**13**は暗茶褐色を呈し，口縁部径は29.2cmである。頸部近くの内面は斜位のヘラなでである。胎土に小礫を含み，焼成はやや悪い。**14**は茶褐色を呈し，口縁部径28.2cmである。内外面なで仕上げである。胎土に小礫を含み，焼成は良い。**15**は外面が茶褐色，内面が黒褐色を呈する。口縁部は「く」字状で，口縁部径は16.2cmとやや小形のものである。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**16**は茶褐色を呈し，口縁径は25.7cmである。内外ハケ目を施す。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。**17**は茶褐色を呈し，口縁径は22.3cmである。仕上げは**16**と同様である。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。**18**は灰茶褐色を呈し，口縁部径は20.3cmである。内面はなで仕上げである。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**19**は暗茶褐色を呈し，口縁部径は18.6cmである。外面にはススが付着しており，なで仕上げである。内面は頸部以下がなで仕上げ，口縁部はハケ目である。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。

**20**・**21**は第Ⅲ層の最上部から出土したものであり，やや直線的に開く口縁部片である。**20**は茶褐色を呈し，口縁部径は26.6cmである。外面にはススが付着している。内外共なで仕上げである。胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。**21**は断面三角形の貼り付け突帯があり，口縁径は25.6cmである。胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。**22**・**24**は三角突帯に斜位の刻みをもつ頸部片であり，突帯は貼り付けによるものである。茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**23**は頸部片で，頸部のくびれ部は，櫛目による調整が口縁に向って始まっており，その始まりの部分で小さな段を有するものである。小さな段より下位は斜位の櫛目がある。色調は黒褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。

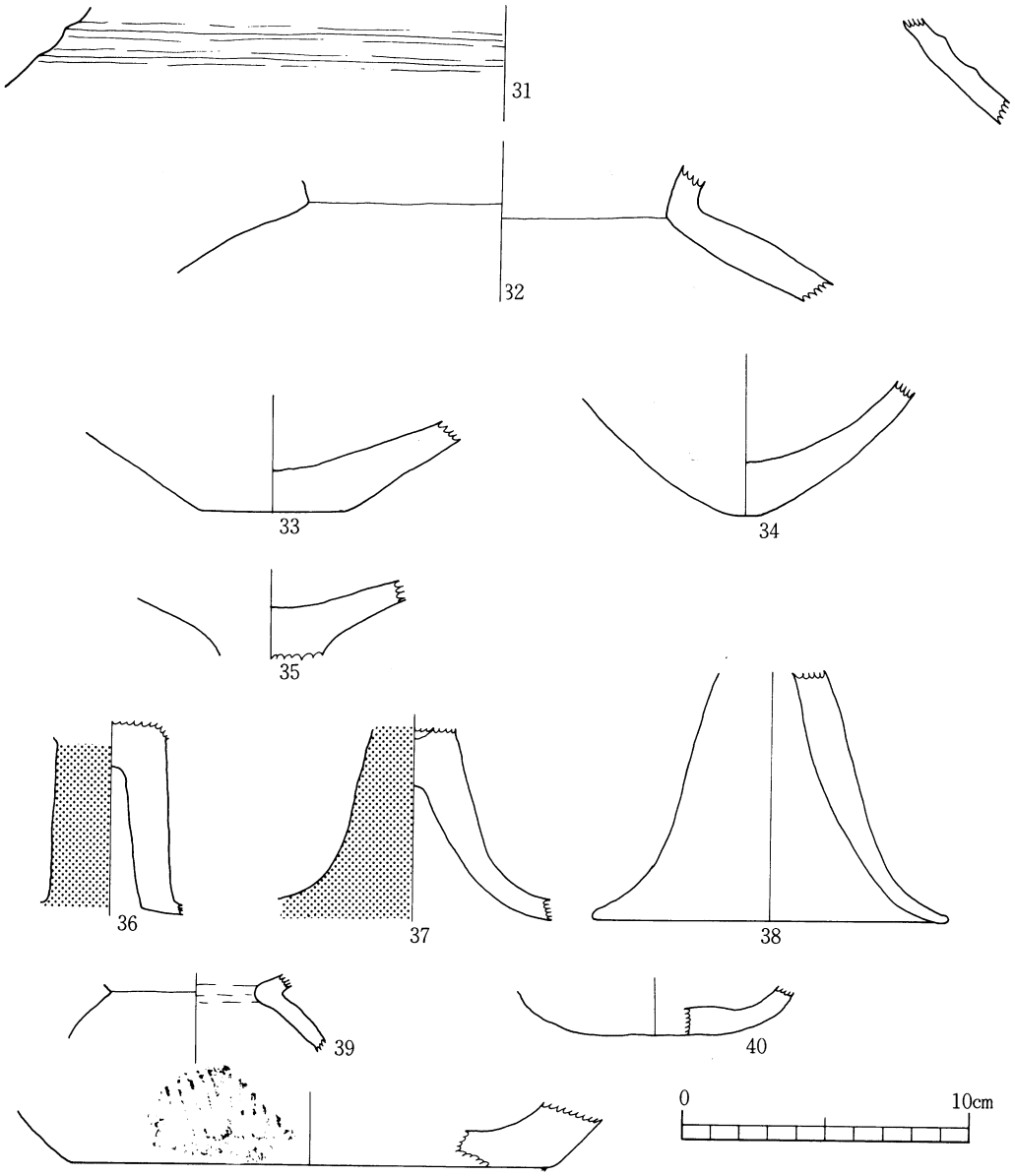
**25**～**30**は甕の脚部である。**26**は充実した脚をもつが，他は浅い脚部である。色調は**26**が黒褐色を呈し，他は茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。




第11図　甕




第12図 甕




**第13図　壺・高坏・坩**

**壺　(第13図, 図版9)**

第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上部にかけて出土したものである。

**31**は２条の三角突帯をもつ肩部の破片である。突帯は貼り付けではなく，ヘラ状のものでつくり出したものである。暗茶褐色を呈し，内外共なで仕上げである。胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。**32**は頸部片である。頸部では「く」字状となり，口縁部へと広がる。淡茶褐色を呈し，なで仕上げである。胎土に砂粒を含み，焼成はやや悪い。

**33・34**は壺の底部片である。**33**が平底に近いもので，**34**はやや尖り気味の丸底である。色調

は，茶褐色を呈し，**34**の内面が赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。

**高　坏　（第13図，図版9）**

第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上部にかけて出土した。

**35**は坏部の破片である。外面は赤褐色を呈し，内面は灰褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。**36**〜**38**は脚部の破片である。**36**は細い筒部をもち，ほぼ直角に裾部へ向かうものである。外面及び裾の内側には丹が薄く塗られている。胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。

**37**は短い筒と裾をもつ脚である。坏部との接合部分は，脚部の方にさし込む形であり，脚部の方が凹んでいる。外面には丹が塗られている。内面は茶褐色を呈している。胎に砂粒を多く含み，焼成は良い。丹は風化のためか一部剝落している。**38**は外面が茶褐色，内面が黒褐色の脚部である。裾がやや短いものである。外面は縦位のヘラなでである。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。

**坩　（第13図，図版9）**

第Ⅱ層下部から第Ⅲ層上部にかけて出土したものである。

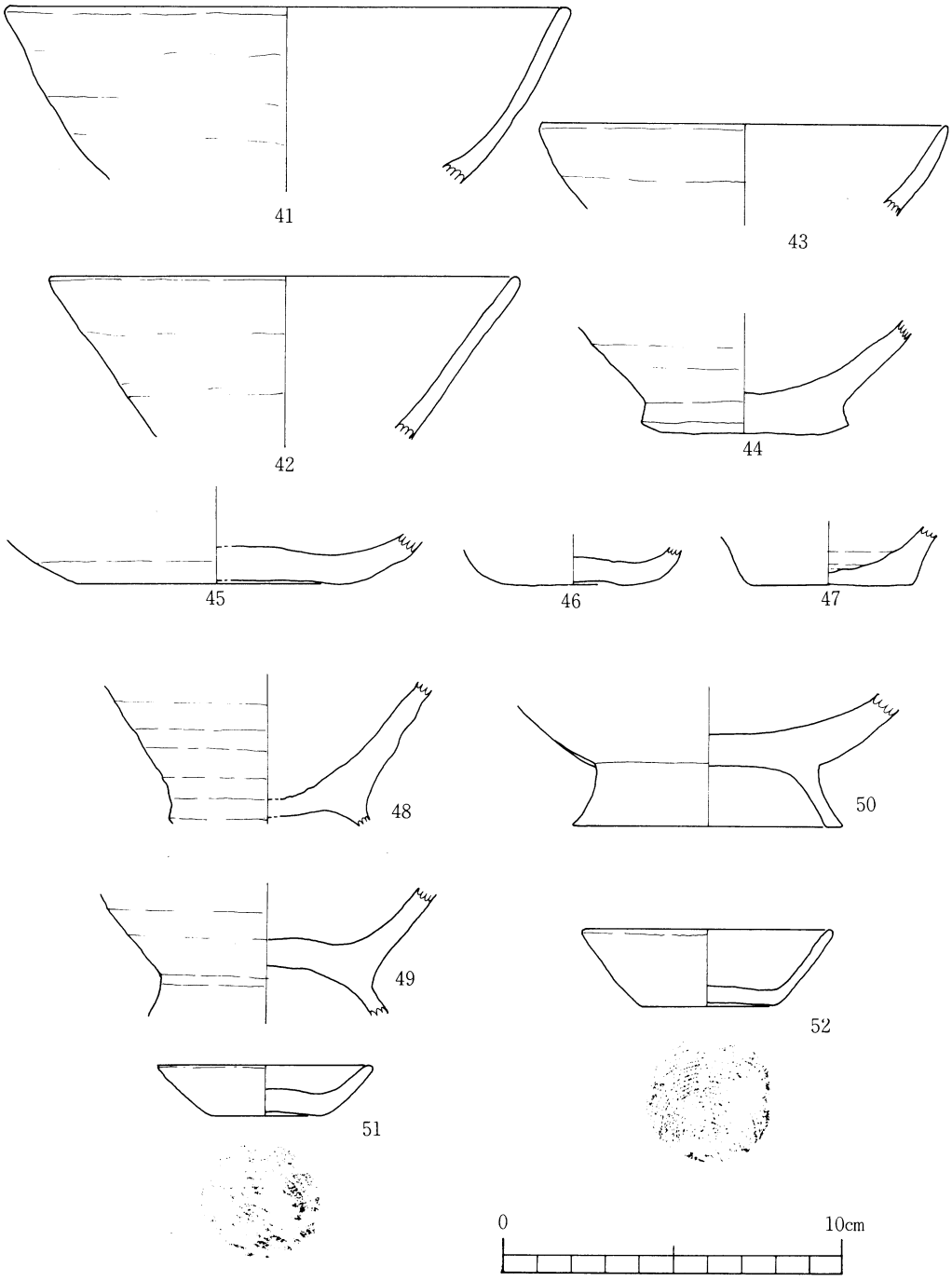
**39**は坩の頸部片である。外面は赤褐色，内面は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は非常に良い。**40**は坩の底部片である。内外面共に暗茶褐色を呈する。胎土に砂粒を含み，焼成は非常に良い。

**土　師　器　埦　（第14・15図，図版10・11）**

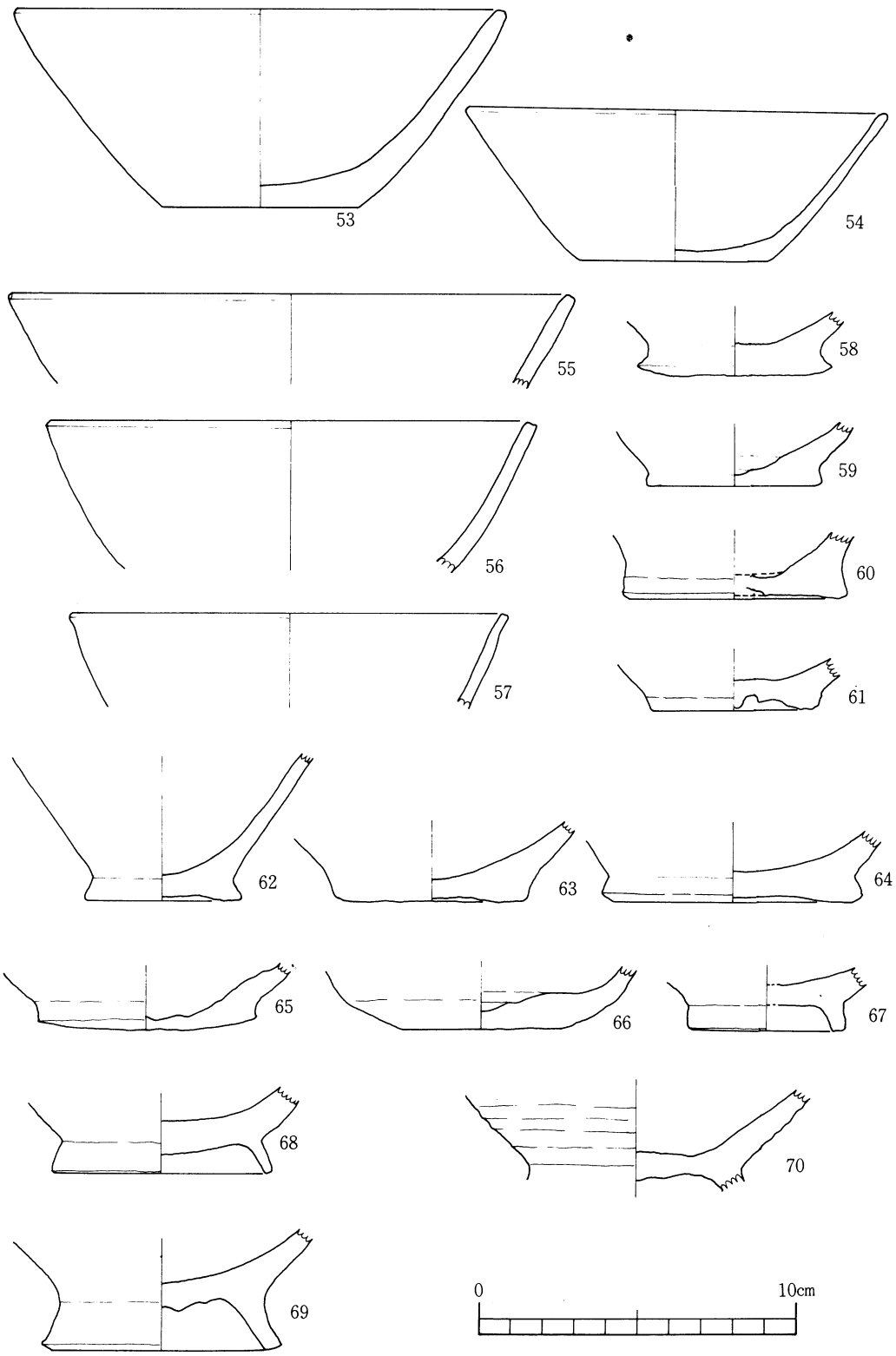
第Ⅱ層から出土したものである。**46**〜**52**が第Ⅱa 層から，**53**〜**70**が第Ⅱb 層から出土した。

**41**〜**43**は土師器埦の口縁部である。**41**は口縁径が16.8cmあり，口縁部はゆるやかに内湾するものである。**42**は口縁径が14.0cmあり，口縁部は直線的に開く。**43**は口縁径が12.0cmあり，**36**同様口縁部はゆるやかに内湾する。色調は淡茶褐色を呈し，焼成は良い。

**44**〜**50**は土師器埦の底部片であり，**48**〜**50**は高台をもち，**45・46**は糸切り底であり，糸の回転は右まきである。**44・47**はヘラ起しである。**44**は淡茶褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含んでおり，焼成は良い。**45**は赤茶褐色を呈し，胎土は精製土を使用しており，焼成は良い。**46**は，内面で淡赤褐色を呈し，底部の外面は黒褐色を呈している。胎土は精製土を使用し，焼成は良い。**45・46**は灯明皿としての使用が考えられる。**47**は平底のもので，淡茶褐色を呈しているが，一部淡赤褐色を呈する部分がある。胎土は精製土を用い，焼成は良い。**48**は内面が茶褐色，外面が淡茶褐色を呈している。胎土に砂粒を含んでいる。焼成は良い。外面には水引きの痕が明瞭に残る。**49**は淡茶褐色を呈しており，高台はやや広がり気味のものである。胎土に小礫を含み，焼成は良い。**56**は高台付きの内黒土師器である。内面は光沢をもつ黒褐色を呈す。底部の厚さに較べて，高台は薄く仕上げられており，付け高台であることが観察できる。外面は丁寧に仕上げられており，淡茶褐色を呈する。胎土は精製土で，焼成は良い。**46・47**は土師器の灯明皿である。**51**は口縁径が 6.3cmの浅いものである。**52**は口縁径が 7.4cmのもので，口縁は直線的に開き，**51**に較べやや深いものである。底部は両者とも糸切り底であり，糸切りの方向は右巻である。**52**の方が**51**よりもススの付着が多く，内底にまで付着している。




第14図　土　師　器（1）




**第15図　土　　師　　器 (2)**

**53**は第２号建物跡の近くから，**54**は第２号建物跡のピット内から須恵器の**34**と一緒に出土した。**53**・**54**は平底で，口縁部が直線的に開く器形を有している。**53**は器壁がやや厚く，外面では淡茶褐色を呈するが，一部灰褐色・赤褐色の部分がある。内面は黒褐色を呈しており，一部光沢があり，内黒土師器と考えられる。胎土には砂粒を含んでおり，焼成はやや悪い。**54**は茶褐色を呈し，一部赤褐色を呈する部分がある。胎土には砂粒を含んでおり，焼成は良い。口縁径は**53**が15.6cm，**54**が13.4cm，高さは**53**が5.7cm，**54**が4.7cmである。**55**〜**57**は口縁部片である。**55**は口縁径18.0cmのもので，口縁は直線的に開くものである。淡茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**56**は口縁径15.5cmのもので，口縁はやや内湾するものである。外面には水引き痕を残す。茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含み，石英砂が観察できる。焼成は良い。**57**は口縁径13.9cmで，口縁部は端反りを呈する内黒土師器である。外面は淡茶褐色を呈し，胎土は精製土で，焼成は良い。**58**〜**66**は平底の底部片であり，底部はヘラ起しである。**61**はその痕跡を明瞭に残している。**58**は茶褐色を呈し，細砂粒を含む，焼成は良い，**59**は淡茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含む，焼成は良い。**61**は灰褐色を呈し，細砂粒を含む。焼成はやや悪く，内面が風化している。**62**は淡茶褐色を呈し，胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。**63**は茶褐色を呈し，細砂粒を含み，焼成は良い。底部は半乾燥の状態の時ヘラ削りを行ったためか，縮緬皺が観察される。**64**は外面（底部）が灰褐色，内面が灰茶褐色を呈し，胎土は精製土で，焼成は良い。**65**は淡茶褐色を呈し，胎土に細砂粒を含み，焼成は良い。**66**は茶褐色を呈し，胎土に精製土を使い，焼成は良い。**67**〜**70**は高台をもつ底部片である。**67**〜**69**は内黒土師器の底部である。
**67**が茶褐色，**68**・**69**が淡茶褐色を呈す。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。**69**は茶褐色を呈し，外面に水引痕を残す。胎土に砂粒を含み，焼成は良い。

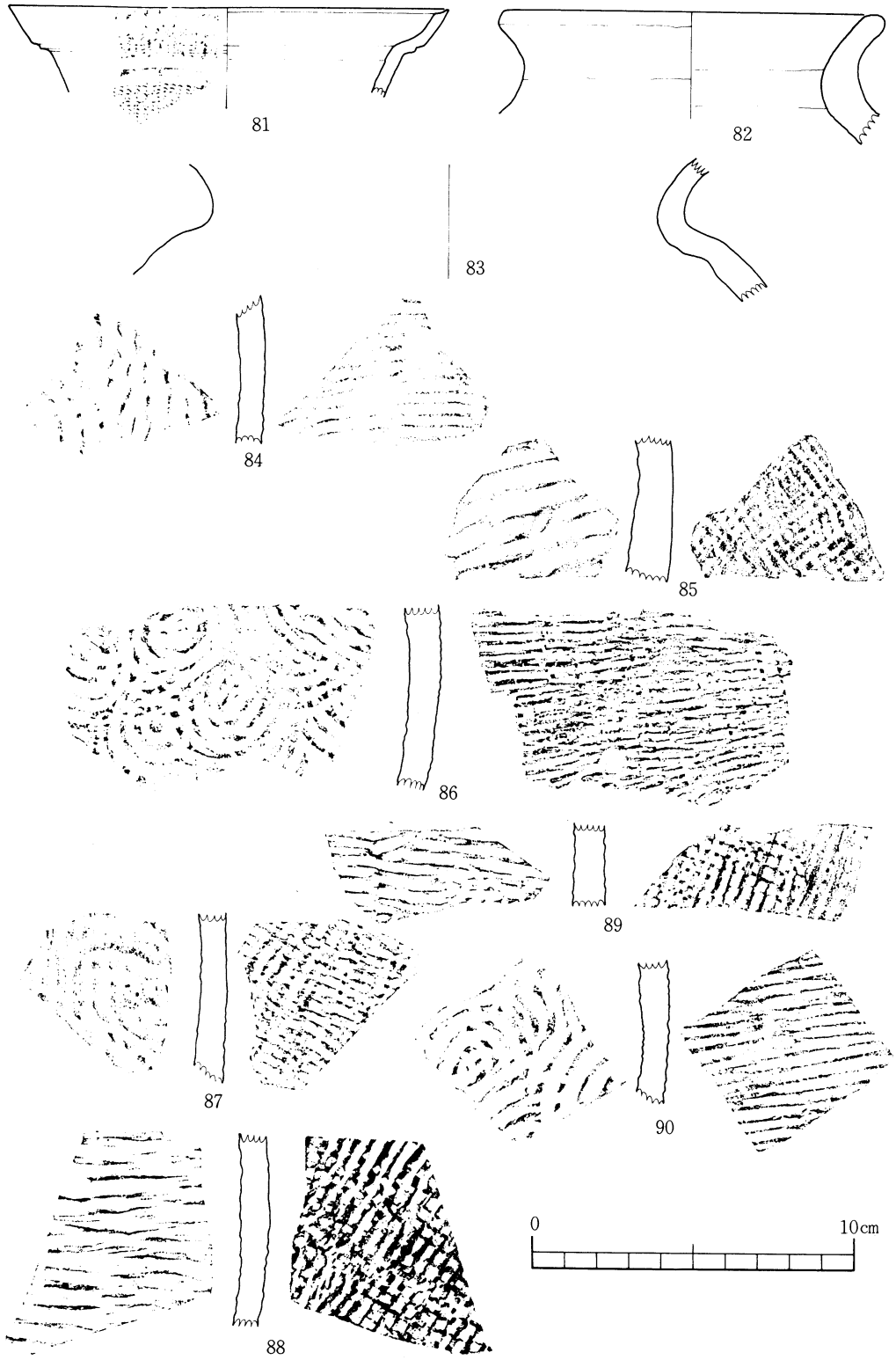
**2．須　恵　器　（第16〜18図，図版12〜14）**

第２層出土のものである。**71**〜**80**が第Ⅱa 層から，**81**〜**95**が第Ⅱb 層から出土した。

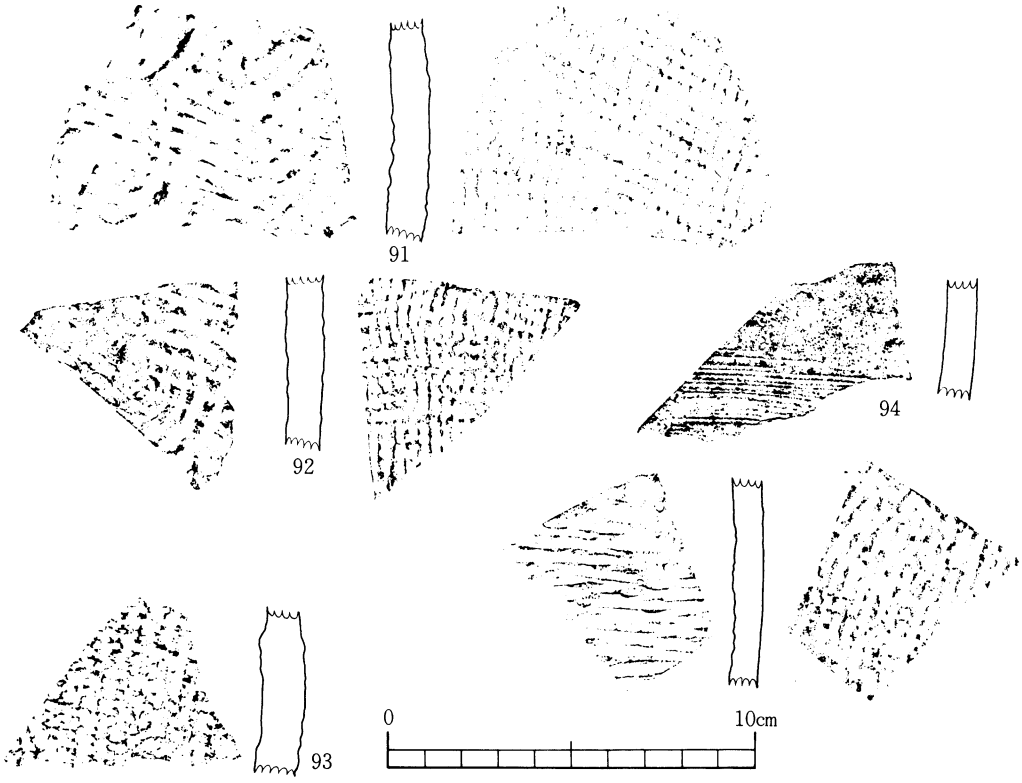
**71**は浅鉢で，口縁径23.8cmのものである。色調は暗灰褐色を呈するが，口縁近くでは黒褐色を呈する。**72**は椀の底部である。薄手のもので，底部はややあげ底気味である。底部切り離しはヘラ切りである。色調は灰褐色を呈し，水引きの痕が明瞭である。**73**〜**80**は甕の胴部破片である。叩き目は，**73**・**75**・**77**・**80**の外面が平行線文・**74**・**76**・**78**・**79**が格子文である。内面では，**73**・**74**・**77**・**79**が同心円文・**75**・**76**・**78**・**80**が平行線文である。**74**は暗茶褐色を呈し，**73**・**79**の内面が暗灰褐色を呈し，他は灰褐色を呈する。

**81**は口縁径13.8cmを測る甕の口縁部片である。口縁端部と口辺部に波状の櫛目文を施’　段の下部には平行状の櫛描文を施す。内面には自然釉が付着している。**82**は甕の口縁部片で，口縁径12cmを測る。色調は灰褐色を呈する。外面には水引きの痕を残す。**83**は甕の頸部で頸部径14.8cmを測る。頸部から肩部へ続く部分には平行叩き目を施した後に叩き目を消したことがわかる。胎土には小礫を含む。色調は灰褐色を呈する。**74**〜**95**は甕の肩から胴にかけての破片である。**94**は第２号建物跡のピット内出土のものである。色は灰褐色を呈し，胎土に小礫を含んでいる。内外面共に水引きの痕を明瞭に残し，外面ではやや粗い水引き痕が残る。

第16図　須　　恵（1）




第17図　須　　恵 (2)



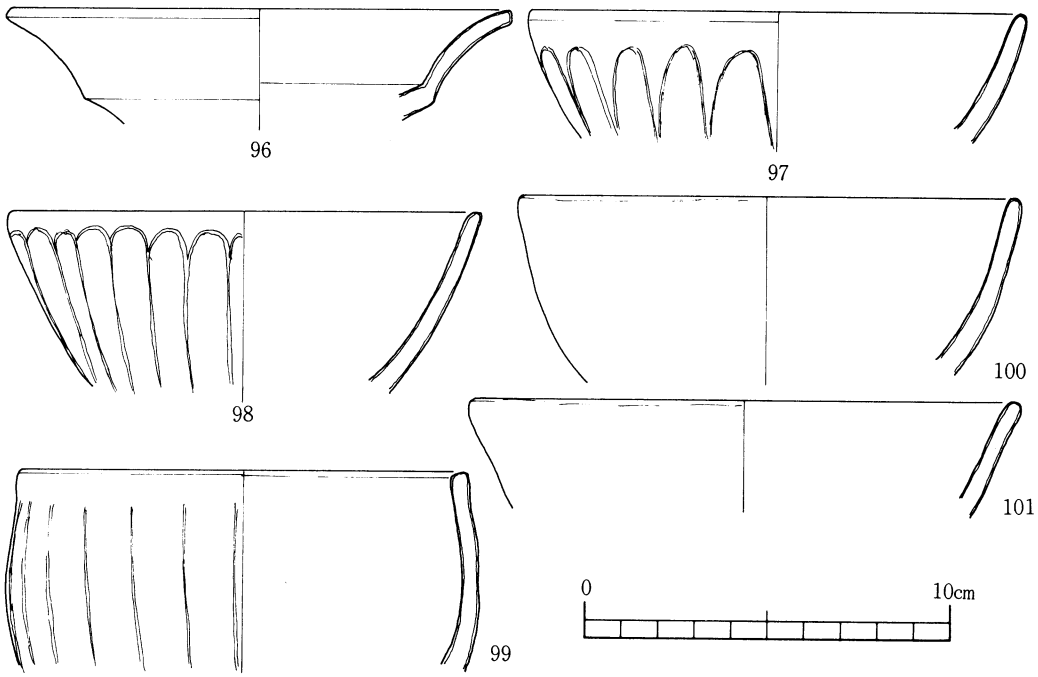

**第18図　須　　恵 (3)**

叩き目は，外面において**84・86・90**が平行線文，**85・87・88・89・91～93・95**が格子目文で，内面では**84・86・87・90～92**が同心円文，**85・88・89・95**が平行線文である。色調は，**89**と**95**には暗褐色の自然釉がみられる。**84・88・90・93**は淡茶褐色，**26**が茶褐色，**27・31・32**は黒褐色を呈する。焼成は**84・88・90・93**がやや悪い。又，**87・91・92**は焼成がやや悪いのか断面が赤褐色を呈しており，叩き目等から同一個体の破片とも考えられる。

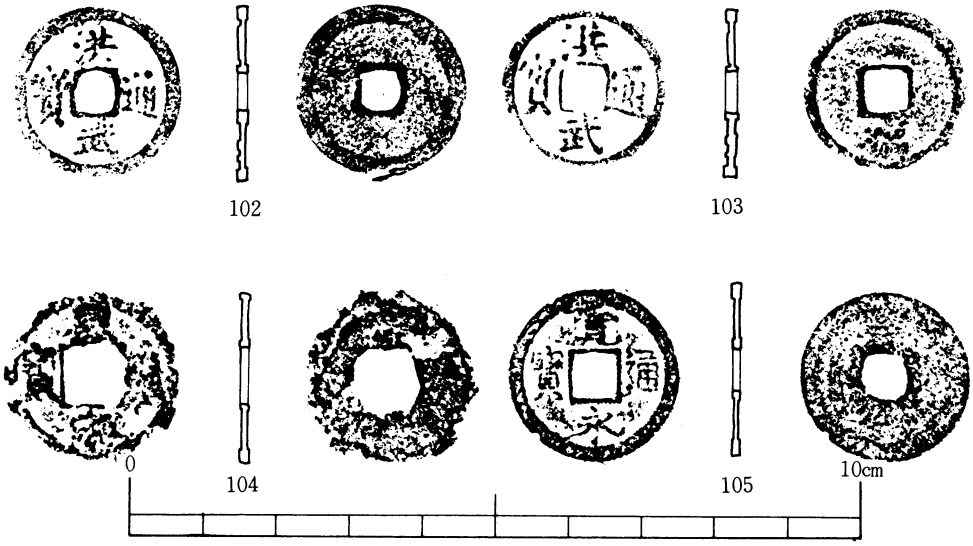
**3．青　磁　(第19図，図版15)**

Ｉ～Ｋ－４～６区の第Ⅲａ層から出土したものである。

**96**は青緑色の菱花皿の破片である。口縁の内側に３条の平行線を陰刻する。**97**は暗青緑色の蓮弁文碗である。蓮弁はヘラ描きで，弁間が離れており鎬がないものである。**98**は暗青緑色，**99**は淡青灰色の細蓮弁文の細い陰刻文をもつ，**100**は暗青緑色の碗で，口縁近くに 3.2cmの横線を１本陰刻するものである**101**は淡青緑色の蓮弁文碗である。蓮弁は鎬がなく，弁先が尖り，細い形をしているものである。器形の上では，**99**が熊川形をなし，**97・98・100・101**が碗形をなし，**96**が皿形を呈するものである。これらは口縁部片のみで，高台の形状は不明である。




第19図　青　　磁




第20図　古　　銭

**4．古　銭　(第20図，図版15)**

Ⅰ～K－4～6区の第Ⅱa 層から4枚出土している。**102・103**は洪武通宝である。**102**には背文がないが，**103**には磨滅して判読しにくいが「福」と読めるが，これは足利時代終り頃から江

戸時代まで私鋳されたという加治木銭の可能性がある。**103**は**102**にくらべて内径の窓がやや大きく，字体も若干異なっている。**104**は腐食によりやや判読しにくいが,「皇宋通宝」である。**105**は江戸時代に使用された「寛永通宝」である。

(注) 加治木郷土誌　　加治木郷土史編纂委員会　　1966

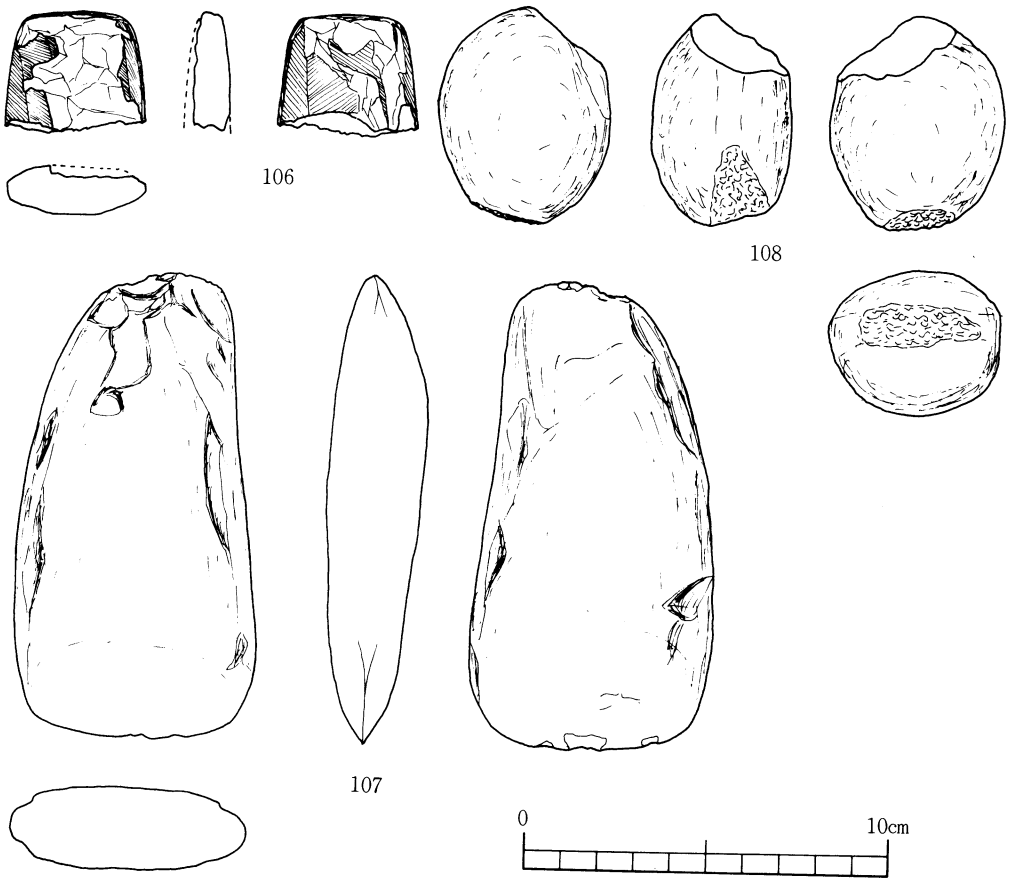
**5．石　器　(第21，22図，図版16)**

**石　斧　(106・107)**

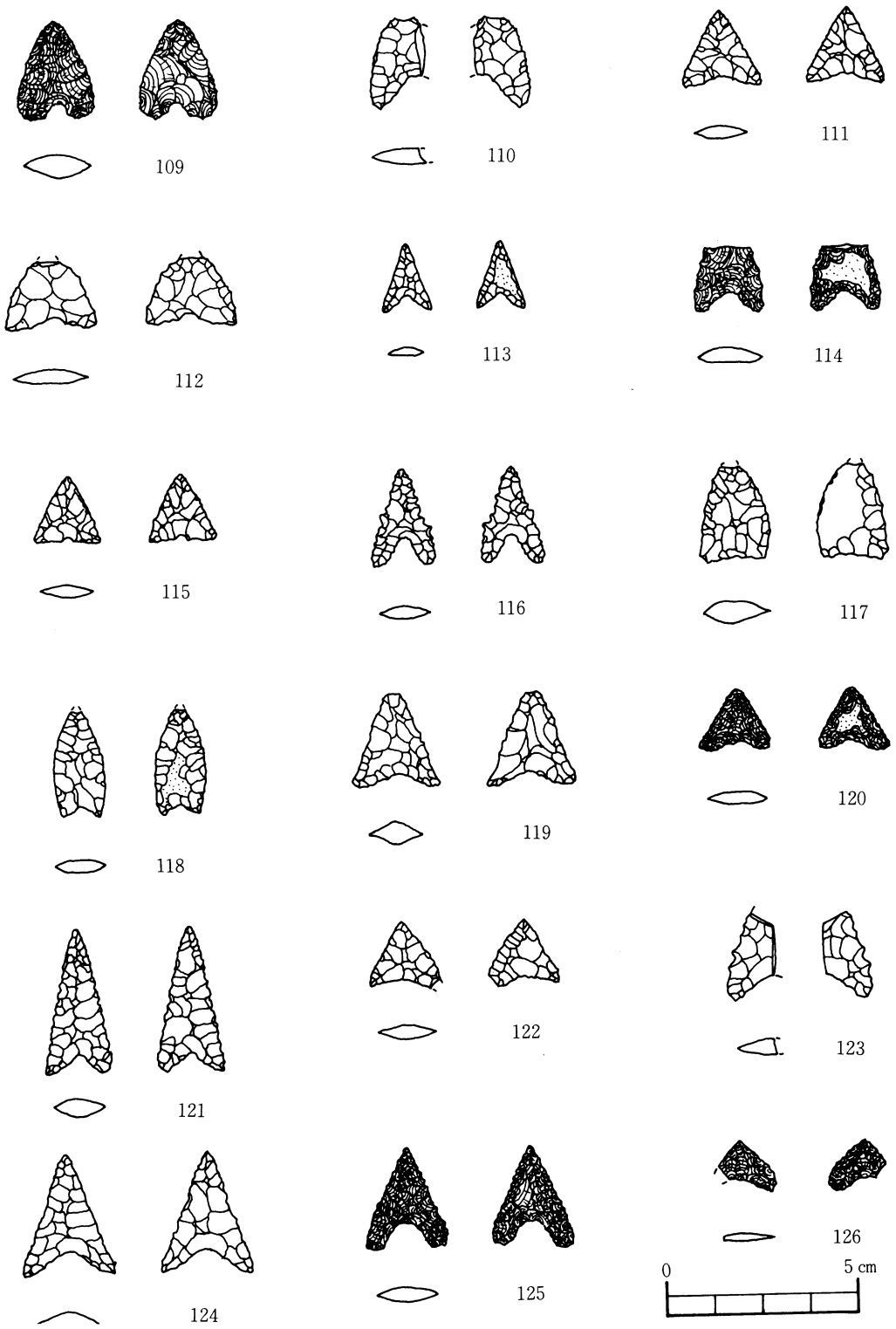
第Ⅲ層から出土したものである。**106**と**107**は磨製石斧である。**106**は蛇紋岩製のもので，全体を丁寧に研磨したものであろう。頭部片で刃部は破損している。**107**は玄武岩製のもので，やや扁平なものである。長さ12.7cm，最大厚さ1.3cm，刃部幅6.6cmである。刃部は使用のためか剝離がみられる。

**敲　石　(108)**

**108**は安山岩製の敲石である。一部破損しているが，ほぼ球形を呈していたと思われる。側面の一ケ所のみに敲打痕がみられる。第Ⅲ層から出土したものである。




**第21図　石　　器**


109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
0
5 cm

第22図　石　　鏃

**石　鏃　(第22図, 図版16)**

**106**は表土，**107**～**116**は第Ⅱ層，**117**～**122**は第Ⅲ層，**123**・**124**は第Ⅴ層からそれぞれ出土した。

全て打製石鏃で，無茎石鏃である。石材は，黒曜石，玄武岩，石英，玉髄，熱変成を受けた疑灰岩と多種である。**110**・**112**・**117**・**119**・**123**は細石鏃の部類にはいる。**110**・**111**・**115**・**117**には自然面を残している。**114**には第１次剝離面を残す。他は全面に丁寧な剝離を行なっている。

基部についてみると，**114**が平基式で他は凹基式である。凹基式のものでは，**108**・**109**・**112**・**115**・**116**・**117**・**119**が浅く，他は深いものである。**106**・**122**は「U」字状をなし，他は「V」字状をなしている。

刃部では，俗にサメ歯あるいは鋸歯とも呼ばれるもの(**113**) もある。

**表１　石器計測表**　　(　) 内は現存部計測

| No. | 層位 | 石　材 | 長さ(cm) | 幅　(cm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **106** | Ⅲ | 蛇紋岩 | (3.1) | 3.7 | 13 | (20.2) | 磨製石斧 |
| **107** | 〃 | 玄武岩 | 12.7 | 6.6 | 22 | 114.0 | 〃 |
| **108** | 〃 | 安山岩 | (5.9) | 4.8 | 39 | (326) | 敲　石 |
| **109** | Ⅰ | 黒曜石 | 2.1 | 1.6 | 5.5 | 0.83 | 打製石鏃 |
| **110** | Ⅱ | 玉　髄 | 1.9 | (1.1) | 3 | (0.74) | 〃 (片脚欠損) |
| **111** | 〃 | 玄武岩 | 1.6 | 1.65 | 3 | 0.6 | 〃 |
| **112** | 〃 | 〃 | (1.4) | 1.9 | 3 | (0.97) | 〃 (先端部欠損) |
| **113** | 〃 | 玉　髄 | 1.4 | 1.05 | 2 | 0.67 | 〃 |
| **114** | 〃 | 黒曜岩 | (1.4) | 1.4 | 3 | (0.66) | 〃 (先端部欠損) |
| **115** | 〃 | 〃 | 1.4 | 1.4 | 3 | 0.3 | 〃 |
| **116** | 〃 | 〃 | 2.05 | 1.3 | 3 | 0.3 | 〃 |
| **117** | 〃 | 玉　髄 | (2.0) | 1.5 | 5.5 | 0.8 | 〃 (先端部欠損) |
| **118** | 〃 | 疑灰岩 | (2.2) | 1.1 | 2 | (0.91) | 〃 |
| **119** | Ⅲ | 玄武岩 | 1.95 | 1.8 | 4.5 | 1.4 | 〃 |
| **120** | 〃 | 黒曜石 | 1.3 | 1.5 | 2 | 0.33 | 〃 |
| **121** | 〃 | 〃 | 3.1 | 1.4 | 4 | 1.05 | 〃 |
| **122** | 〃 | 石　英 | 1.4 | (1.5) | 3.5 | 0.53 | 〃 |
| **123** | 〃 | 玄武岩 | (1.9) | (1.1) | 3 | (0.37) | 〃 (片脚欠損) |
| **124** | 〃 | 〃 | 2.6 | 2.0 | 5 | 1.25 | 〃 |
| **125** | Ⅴ | 黒曜石 | 2.15 | 1.8 | 3 | 0.6 | 〃 |
| **126** | 〃 | 〃 | 1.1 | 1.2 | 2 | (0.1) | 〃 (片脚欠損) |

## 5節　小　結

山崎A遺跡においては，縄文時代早期から歴史時代にかけて各種の遺構・建物が検出されたので，時代ごとに若干まとめておきたい。

縄文時代

縄文時代に属する遺物は第Ⅲ層と第Ⅴ層から出土している。第Ⅲ層からは**1**・**6**・**9**が出土している。**1**が市来式土器・**2**が出水式土器，**3**が岩崎式土器に比定されるものである。**4**～**6**は類例がないため比定できないが，貝殻文の系統であることと出土層が鬼界カルデラの墳出によるとされる赤ホヤ層であることなどから後期に属するものであろう。**9**も同様である。

**7**は，桑ノ丸遺跡[1]・木佐貫原遺跡[2]等にその類例を見ることができる。**7**・**8**は出土層から考えて縄文時代早期～前期に属するもの[3]であろう。

縄文時代に属する遺構は，集石のみであった。火を受けて赤化したと思われる礫の存在から炉としての性格をもつと考えられるが，今後検討されねばならないものである。類例は山崎B遺跡[4]・花ノ木遺跡[5]・木場C遺跡[6]等にも見られ，花ノ木遺跡では平栫式土器や塞ノ神式土器などに伴なうものとされている。当遺跡においては共伴遺物がなかったが，出土層が第Ⅴ層であることから縄文時代早期～前期に属すると考えられる。

古墳時代

古墳時代に属する遺物は第Ⅱ～Ⅲ層から出土している。刻みのある突帯をもつ甕は，いわゆる成川式と総称されているものである。坩・高坏等も同時期のものと考えられ，鹿児島市笹貫遺跡等から出土する笹貫タイプに属するものである。須恵器では，甕の破片は多かったが器形等を知ることができなかったが，瓶の口縁部片がⅢ期に属するものと考えられることから，これらの遺物は6世紀頃に属すると思われる。

歴史時代

歴史時代に属する遺物は，第Ⅱ層から出土している。遺物は，ヘラ切り離しによる土師器埦，内黒土師器埦，糸切り離しによる土師器埦，青磁，古銭が出土している。糸切り離しによる土師器埦は，灯明皿として使用されたことがうかがえるものもある。これらの土師器埦は，鹿児島県においては，その編年がまだ確立されていないためその時期を決定することがむずかしいが，奈良時代～平安時代に属するものと思われる。

建物跡は，Ⅰ・Ⅱ号建物跡ともに庇をもたないものであった。又ピットについては，坪事業が行なわれており，その類例が乏しく，新しい問題を提起してくれた。

又，ピットの最深部に内黒土師器埦の破片を埋納することは，民俗学的な面からも検討を加えていく必要があると考える。

建物跡の時期設定は，そのピットの中に埋納されていた内黒土師器埦の破片等から考えて，奈良～平安時代に属するものであろうと考えられる。

青磁は，**96**・**97**・**100**・**101**が14～15世紀のもので，そのうち**96**は熊本県城南町板野の1410年

刻銘の石塔の下から出土したものと同じタイプのものであるという。[8] 他の**98**・**99**は15～16世紀のものである。

古銭は，皇宋通宝が11世紀，洪武通宝が14～15世紀に使用されたものであり，青磁類と同時期のものであろう。

検出された古道跡は谷に沿っており，複合しているところから同時期に５～６本あったのではなく，何回かにわたって使用されたものと考えられるが新旧関係は確認できなかった。

古道跡の時期については，土師器片や内黒土師器片，須恵器の破片がその周囲，ないしはその埋土の中にあることから，奈良～平安時代に属するものと考えられるが，その廃止時期については不明である。

こういった古道跡は，上ノ城遺跡[9]で確認され，岩崎遺跡[10]・入道遺跡[11]にも類例が知られ，その性格等については，今後の問題点として取り扱わねばならないだろう。

註１　町田洋　「火山灰は語る」
註２　鹿児島県教育委員会　「桑の丸遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告(7)　1977
註３　〃　「木佐貫原遺跡」　〃　(12)　1979
註４　鹿児島県教育委員会が発掘調査　現在整理中
註５　鹿児島県教育委員会　「花ノ木遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告(1)　1975
註６　本報告書
註７　河口　貞徳「鹿児島県における弥生諸遺跡について」鹿児島県考古学会紀要第２号1952
註８　亀井明徳氏御教示
註９　加世田市教育委員会　「上ノ城遺跡」　1980
註10　河口貞徳　「岩崎遺跡」　鹿児島県考古学会紀要第３号　1953
註11　鹿児島県教育委員会　「入道遺跡」　鹿児島県埋蔵文化財調査報告(10)　1978

# 第4章　山崎C遺跡

## 第1節　調査の概要

山崎C遺跡は昭和52年10月24日より10月27日まで，新東晃一・池畑耕一・立神次郎氏等により確認調査が行なわれ，その時に青磁・白磁・土師器・およびピットが認められている。

本調査は昭和53年3月6日より5月31日まで行なわれる。グリッドは確認調査で設定されたもので，谷に直行するものを利用する。グリッドは10×10mを基本単位とし，グリッド名称は南側が谷頭になるため，南側から1・2～8とし，西側より東側へA・B・C・Dとする，各グリッドはA－1，B－1と呼称する。

調査は確認調査により，青磁・白磁・土師器等が認められているが，その広がりと包含層の深さを再度確認するためトレンチ調査より行なう。その結果，遺跡が谷部にあたるために表層が厚く，包含層が深いために，断面実測終了後，重機により表土を剝ぎ全面調査を行なう。

層位はⅠ層・灰黒色土で耕作土，部分的に二次的な堆積状態が見られる。Ⅱ層・黒褐色土でやや粘質をおびる。青磁・白磁・土師器（内黒土師器も含む）の包含層と思われる。部分的に見られない所がある。Ⅲ層はa・b・cの三層に分かれる。Ⅲa層は暗赤褐色土でやや軟質，古墳時代の成川式系の遺物包含層。Ⅲb層は赤褐色土でやや軟質・縄文時代の遺物包含層，Ⅲc層は赤黄褐色軽石層で鬼界カルデラ起原と思われる。Ⅳ層・青灰色土で硬質である。

遺物包含層は，Ⅱ層・Ⅲa層・Ⅲb層である。Ⅱ層の青磁・白磁は出土量が少なく破片も小さい。土師器は坏，高台のある坏等が出土する。又内黒土師器も見られる。Ⅲa層からは古墳時代の成川式系の土師器片が出土する。Ⅲb層からは縄文式土器，および，石斧・石鏃が出土している。遺構はⅢ層上面において，Ⅱ層の落ち込みと思われるピットが多数検出された。

## 第2節　遺構（図版17，第25図）

遺構はⅢ層上面において，大小約90個のピット群が検出された。このピットはⅡ層，黒褐色土の落ち込みで，青磁・白磁，及び土師器の時期と思われる。しかしながら，大きさ，形が不統一でまとまりのない状態である。又深さも浅く性格を判断するのは困難である。D－5区，E－5区においては溝状の遺構も見られたが性格は判明しない。Ⅲa層，Ⅲb層においては遺構は認められなかった。

## 第3節　遺物

### 1．土器

土器は縄文式土器・成川式系土器，土師器等が出土している。又須恵器，磁器（青磁・白磁）も見られる。しかしながら量的に少なく，破片も小さなものがほとんどである。

〈縄文式土器〉（図版18・第26図・131～139）

縄文式土器はⅢb層より出土しているが，量は少なく破片も小さいものである。131は復元口縁径36.2cmを測る深鉢形土器である。胴部はやや張るものと思われる。平担におさめた口唇部には棒状の施文具による刻目が施される。口縁部直下には棒状施文具による凹線文が施され

る。焼成は良好，色調は淡茶褐色を呈する。胎土には石英・長石・角閃石等が含まれる。 **132**・ **133**は口縁部である。口唇部は平担におさめ，口縁部下には棒状施文具による凹線文が施される。 **135**～ **138**は胴部である。いずれも棒状施文具による凹線文が施される。 **132**～ **138**はいずれも焼成は良好で色調は茶褐色を呈する。ただし **138**は二次的なススが付着しているため黒くなっている。胎土には石英・長石・角閃石等が含まれる。**139**は復元口縁径15.8cm，器高が14.6cmを測る小型の深鉢形土器である。若干上げ底気味の底部は，外側へひろがり，胴部は直線的に口縁部へといたる。胴部には文様は施されないが，口唇部に斜位の細い刻目が見られる。器面はハケによる調整が認められるが，凹凸が著しく粗い器面調整がうかがわれる。焼成は良好，色調は茶褐色を呈する。胎土には石英・長石・角閃石等が含まれる。

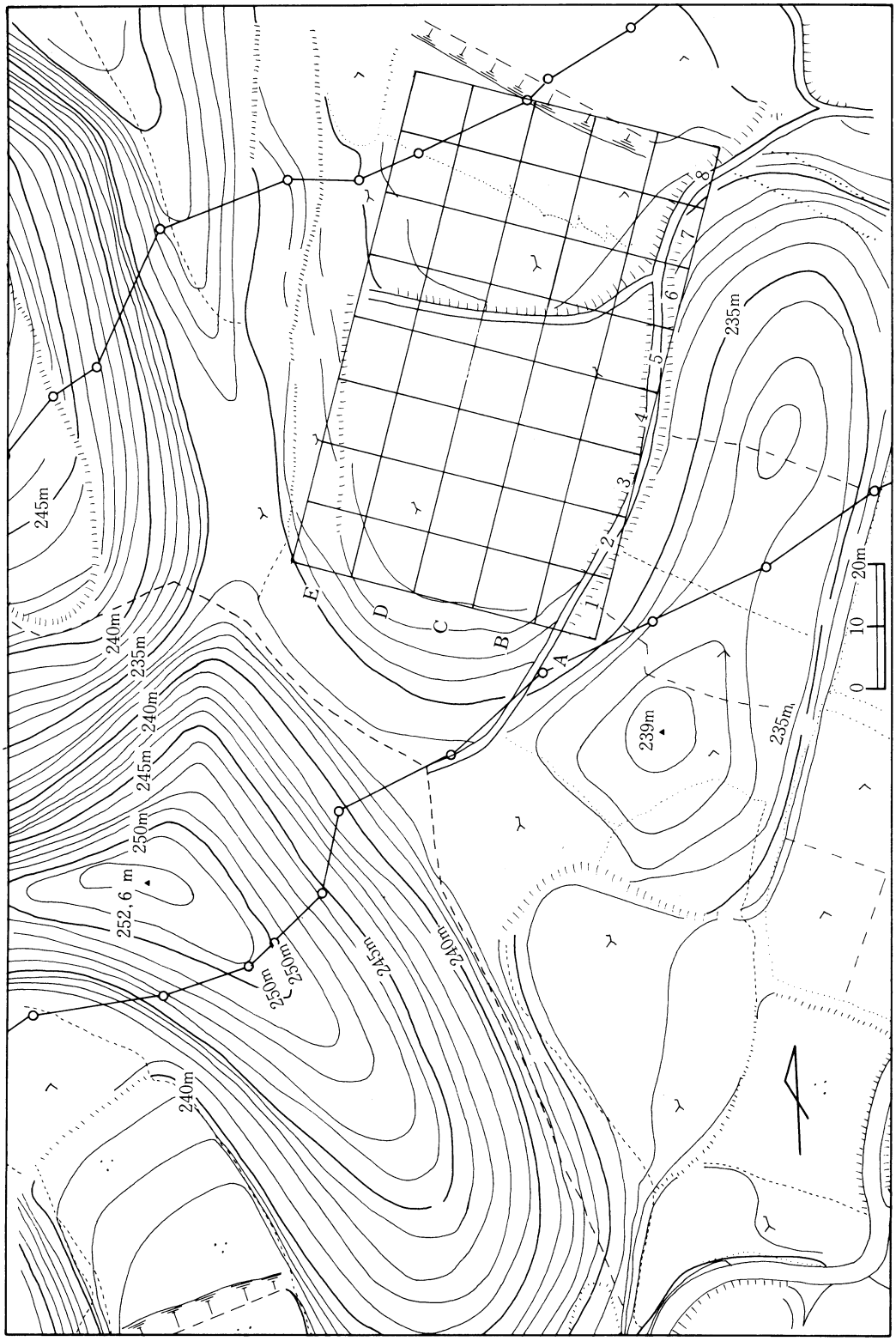
〈成川式系土器〉（図版19－①・②，第29図142～148）

古墳時代の成川式系土器はⅢａ層中より出土した。しかしながら小破片が多く図化出来たものは少ない。 **142**～ **144**は甕形土器である。 **142**は復元頸部径29cmを測る。胴部はやや張り，口縁部は外反するものと思われる。 **143**・ **144**は貼付突帯を有するものである。突帯には布目痕のある刻目を施す。 **145**～ **147**は壺形土器である。 **145**・ **146**は胴部に貼付突帯を有するもので，突帯には布目痕のある刻目を施す。 **147**は底部径４cmを測る壺形土器の底部で，丸底に近い平底である。 **148**は高坏の取りつけ部および脚上部である。取り付け部においては坏部が貼り付けてある状態がうかがえる。脚上部にはヘラによるナデ上げが認められる。 **142**～ **146**の器面調整はハケ調整である。いずれも焼成は良好，色調は茶褐色を呈する。胎土には石英・長石等が多く含まれる。

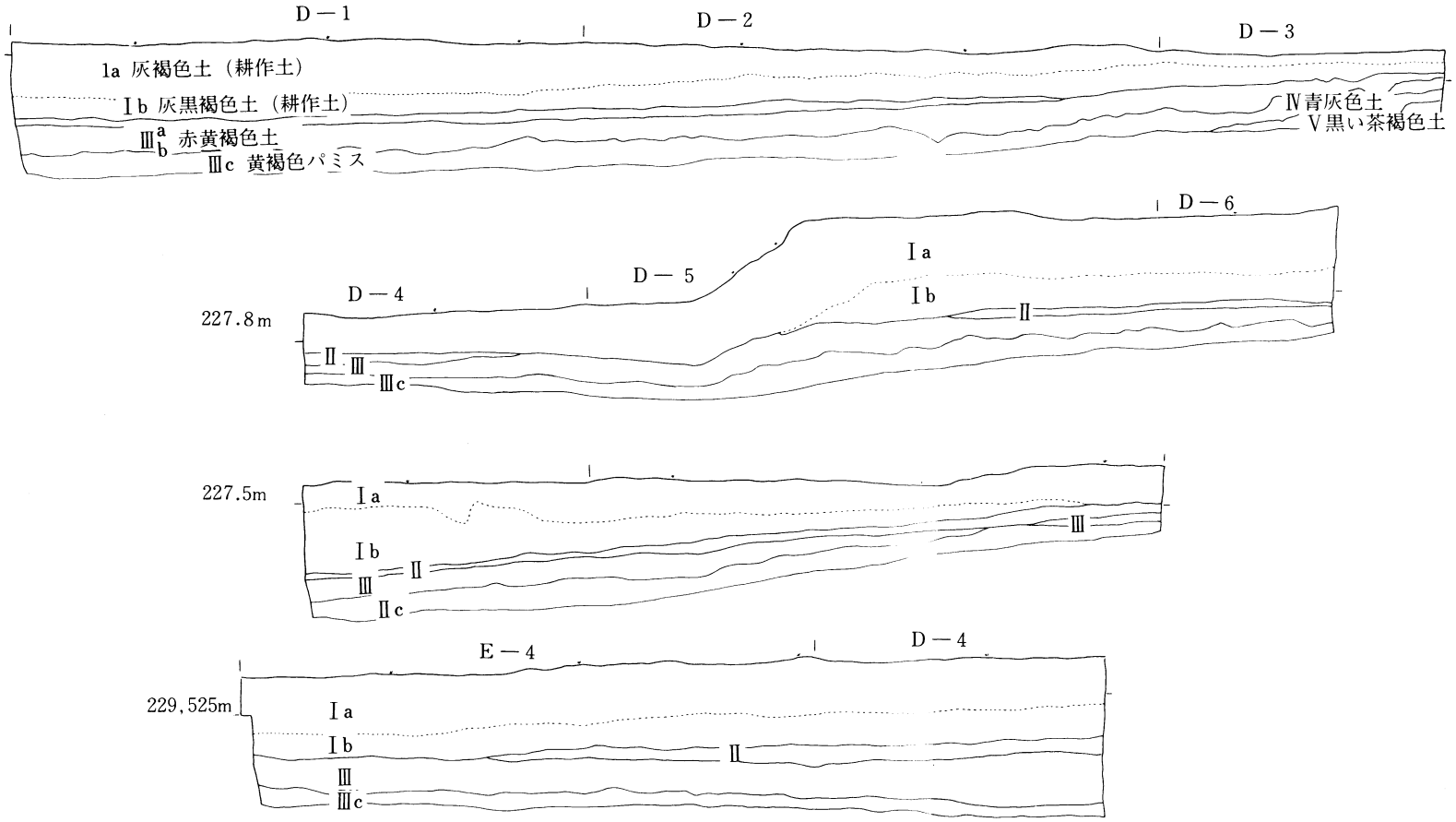
〈土師器〉（図版19－③，図版20－①・②　第29図149～159）

土師器はⅡ層中より出土した。 **149**～**153** は坏である。底部の切り離しはいずれもヘラ切りによるものである。 **149**は復元口縁径13.4cm，器高4.2cmを測る，**150**は復元口縁径13cm，器高4.1cmを測る。**151**は復元底部径７cm，**152**は復元底部径６cmを測る。これらは，いずれも底部から外側へ直線的に立ちあがり，口縁端部は丸くおさめるものである。 **153**は復元口縁径13cmを測るもので，直線的に立ちあがり，口縁部近くですぼまり，口縁端部はやや外反し丸くおさめる。**154**，**155**は高台部分である。 **154**は底部径7.4cmを測る。高台はやや外びらきで端部は丸味をおびる。高台の貼り付けが認められる。**155**は底部径7.6cmを測る。高台は外びらきで端部は平たくおさめる。

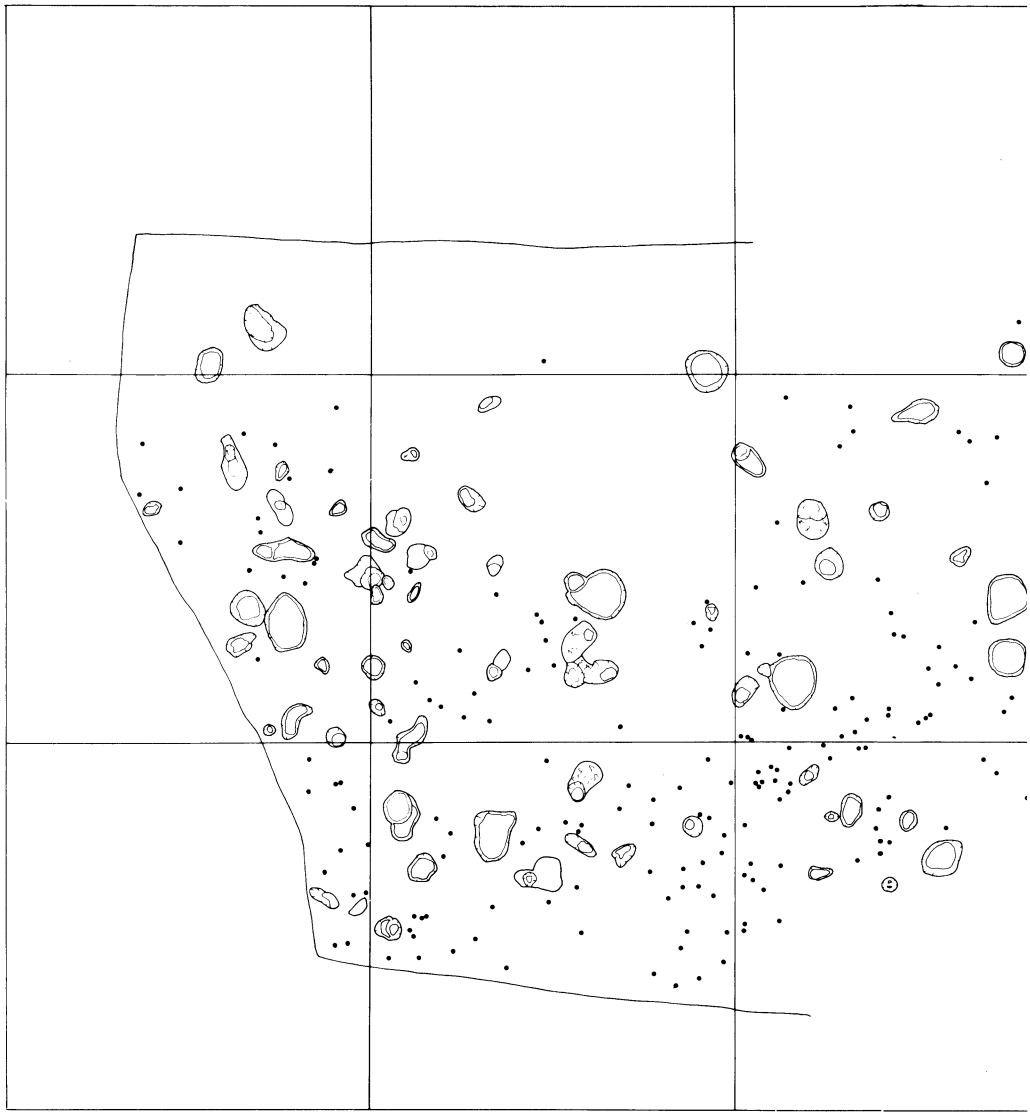
**156**～**159**は内黒土師器である。 **156**は坏で復元底部径８cmを測る。底部の切り離しはヘラ切りによる。底部から外側へ直線的に立ちあがるものである。 **157**は高台付きの皿で復元口縁径13.4cm，器高3.5cmを測る。高台は貼り付けでやや外びらきになる　皿部は外側へ直線的にひろがり，口縁端部は丸くおさめる。皿部の深さは1.7cmである。**158**は高台付の椀で底部径6.6cmを測る。高台は貼り付けで外びらきになり，端部は丸くおさめる。 **159**は高台付きの椀で復元口縁径18cmを測る。胴部はやや張って居り口縁部は端反りの感じで外反する。口縁端部は丸くおさめる。



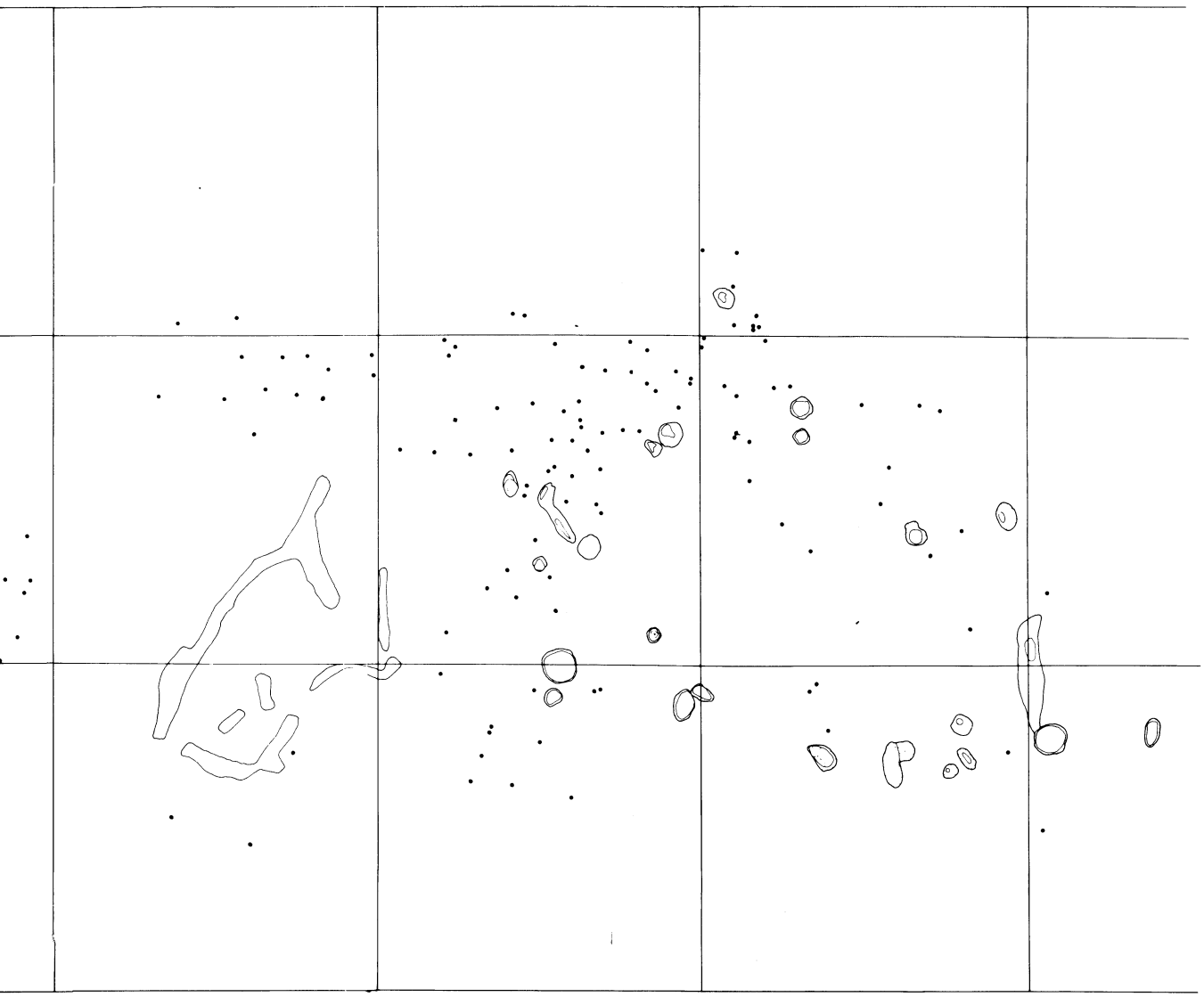

第23図　山崎遺跡地形図及びグリッド配置図



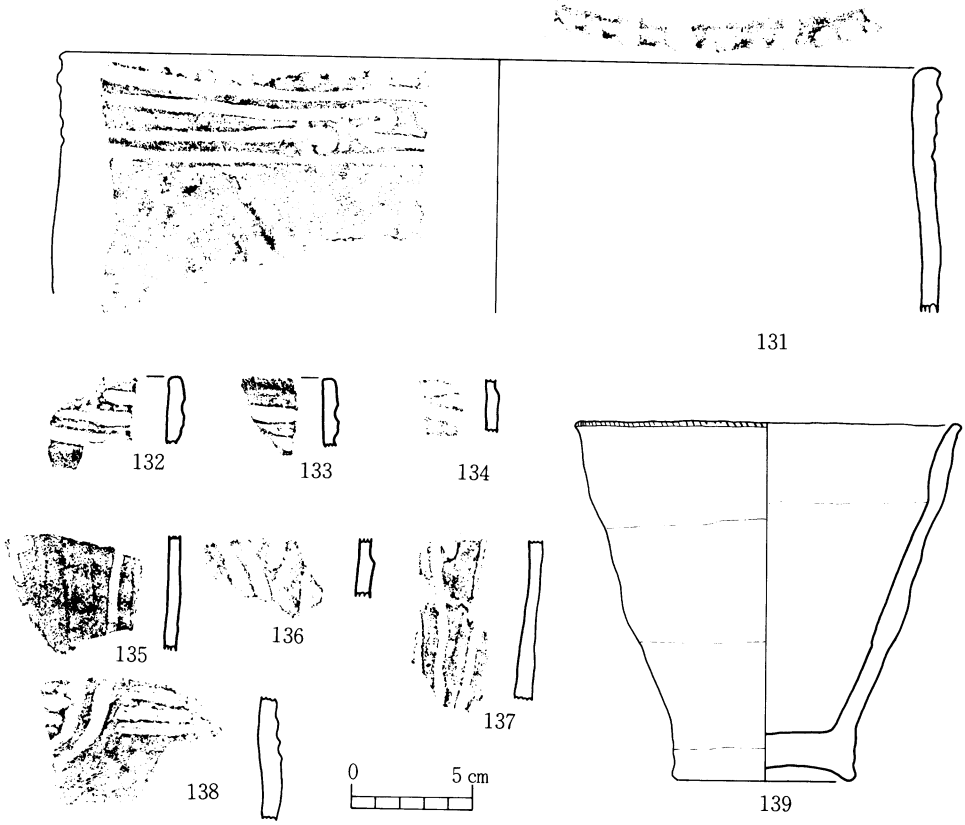

第24図　山崎遺跡土層図



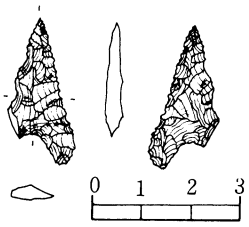
第25図　山崎Ｃ遺跡Ⅲ層上面検出



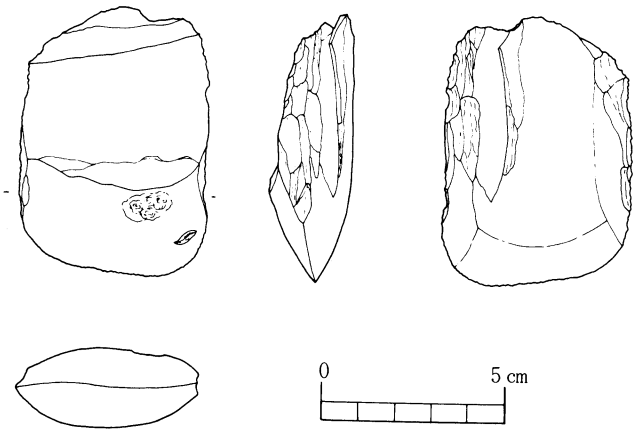
のピット群



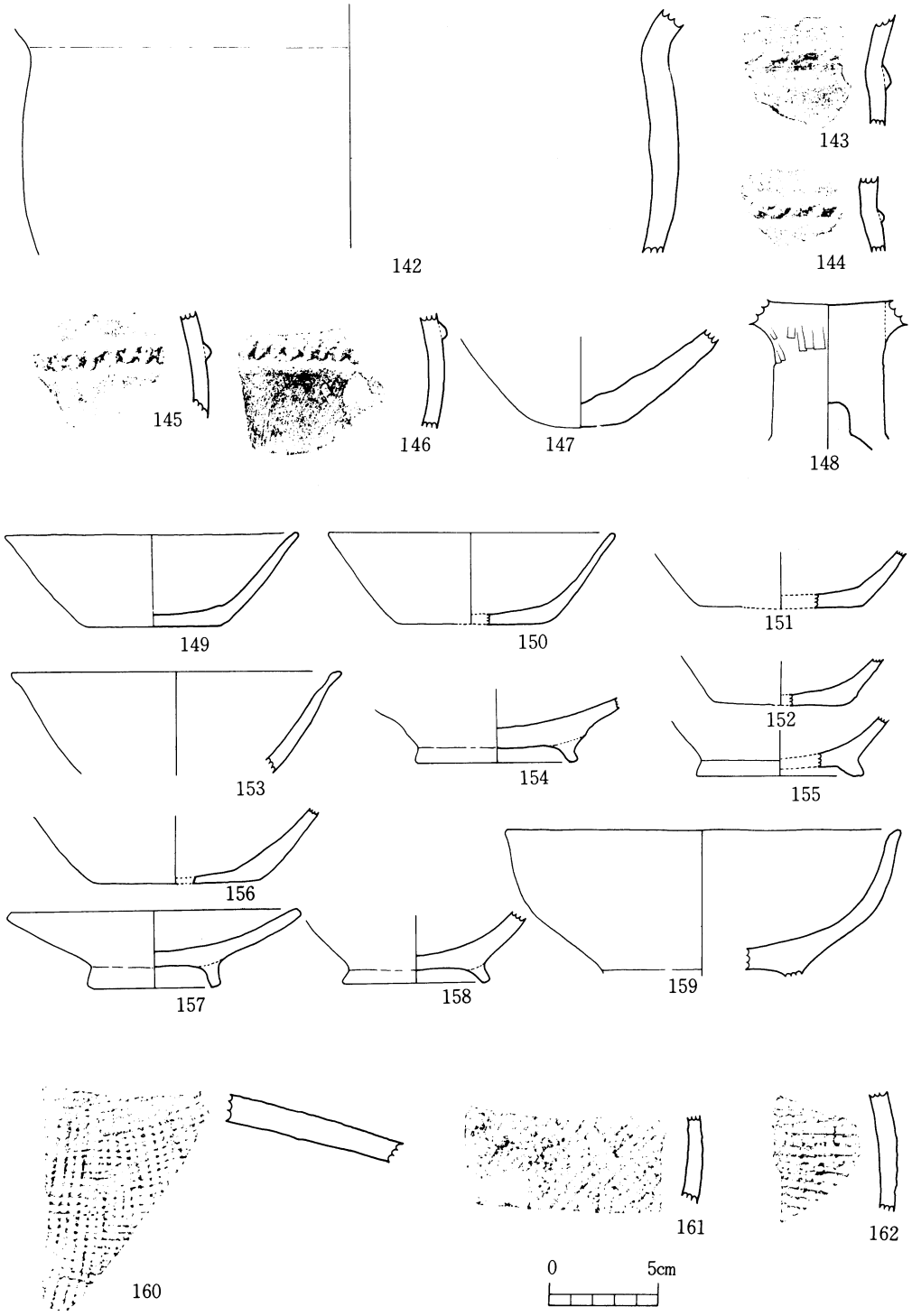

第26図　山崎Ｃ遺跡出土の遺物（縄文）




第28図　山崎Ｃ遺跡出土遺物（石鏃）




第27図　山崎Ｃ遺跡出土遺物（石斧）




**第29図　土師器，須恵器実測図及び拓影**

〈須恵器〉（図版20－③　第29図160～163）

須恵器はⅡ層中より若干出土している。**160**は甕の肩部である。外面は青灰色を呈し格子目叩きを施す。内面は赤褐色を呈し同心円叩きを施す。**161**・**162**は甕の胴部である。いずれも灰色を呈し，外面は格子目叩き，内面は同心円叩きを施す。

**2 .石器**　（第27図，第28図）

石器はⅢb層中より，石斧，石鏃が出土している。**140**は安山岩を利用した磨製石斧である。現存長7.3cm，最大巾5.1cm，厚さ2.1cmを測る。基部は欠損して居り刃部だけ残っている。刃部はよくみがかれた両刃で，鋭く蛤刃状を呈する。**141**は黒曜石製の石鏃である。全長2.9cm，想定巾1.8cm，厚さ0.3cmを測る二等辺鏃である。基部は凹基式であるが，片脚は欠損している。両面共に入念な交互剥離により調整された鋭利な鏃である。

### 第4節　小結

山崎C遺跡において，遺構はⅢ層上面に検出されたピット群が見られる。しかしこのピット群も建物を想定出来るものではなく性格も判明しない。又ピット内からの遺物も少ないため時期も不明であるが，埋土がⅡ層土であるため青磁・白磁，もしくは土師器の時期と思われる。

遺物についてみると，縄文時代の土器・石器（石斧・石鏃）が見られる。土器は凹線文を施すもので，器面に貝殻条痕が施されていないものである。縄文後期初頭に位置づけられよう。石器も同時期と考えられる。古墳時代の土器についてみると，いわゆる成川式系と呼ばれるものが出土しているが，破片が小さいため確定的なことは判断出来ない。歴史時代についてみると土師器，内黒土師器が出土しているが，底部の切り離しが，ヘラ切りであるが，平安時代に位置づけられよう。

## 第5章　まとめにかえて

山崎A遺跡・山崎C遺跡においては，山崎A遺跡のL～N－4～10区を除いた地区は両者ともに，谷頭部分に形成された遺物散布地としての性格が強いように考えられる。

両者の調査後に，山崎B遺跡の調査が続けて行なわれ，遺構として空堀・建物跡等が検出されており，山崎A・B・C遺跡[註]をとりまくエリアについて，その関係等を明らかにしていく必要があると考えられる。

註　鹿児島県教育委員会が調査　現在整理中

1．山崎Ａ遺跡全景

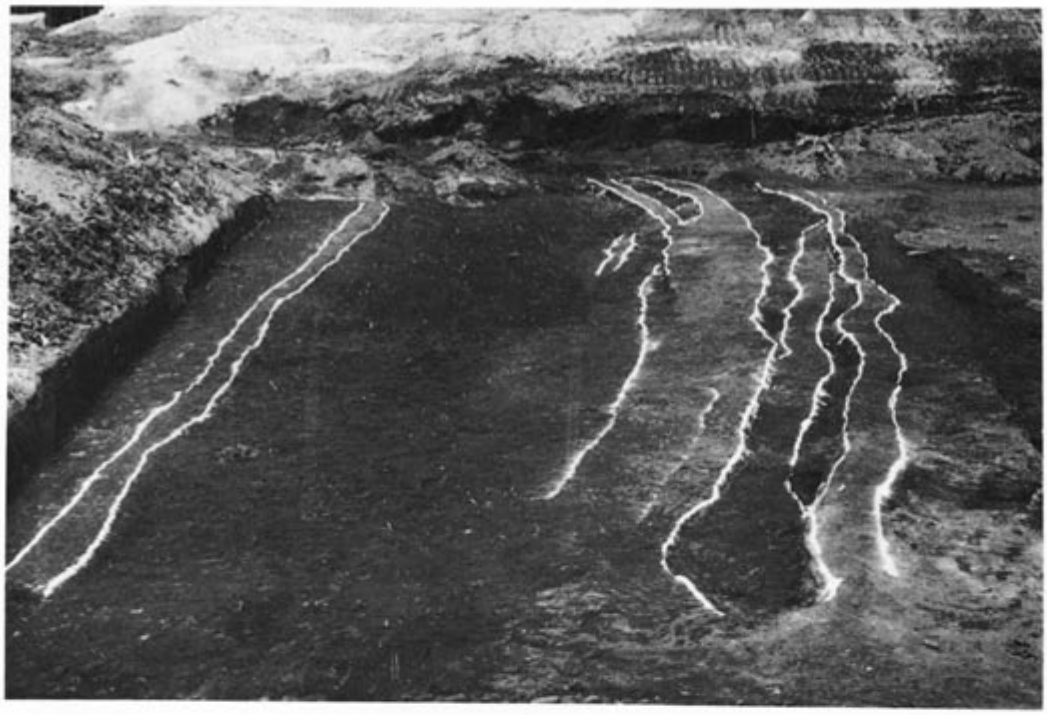
2．山崎Ａ遺跡発掘風景

図版2

2．山崎Ａ遺跡の集石

1．山崎Ａ遺跡の土層

1．山崎Ａ遺跡　集石の断面



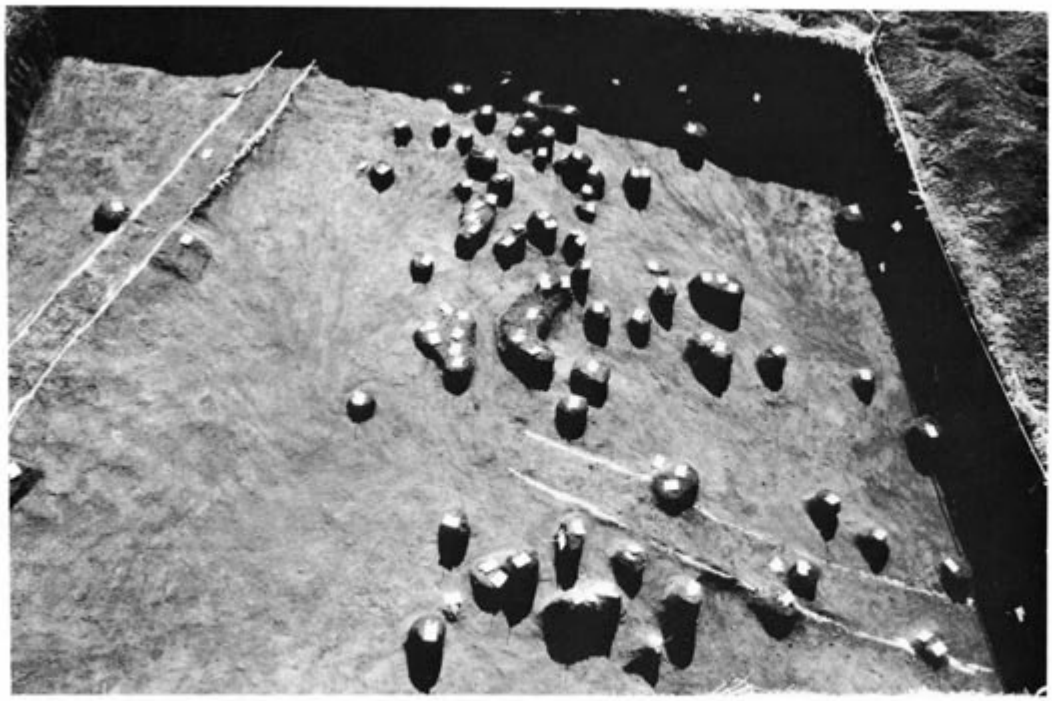
2．山崎Ａ遺跡の古道跡(1)

1．　山崎Ａ遺跡の古道路(2)

2．山崎Ａ道跡の建物跡確認状況

1．山崎Ａ遺跡　建物跡の検出状況

2．山崎Ａ遺跡　建物跡ピットの断面

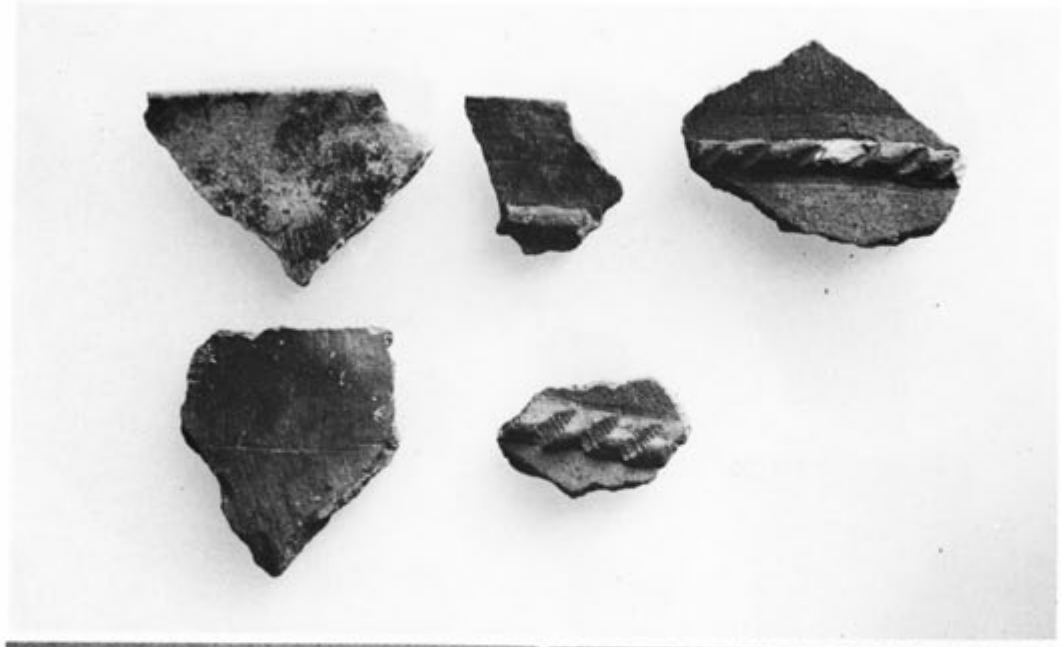


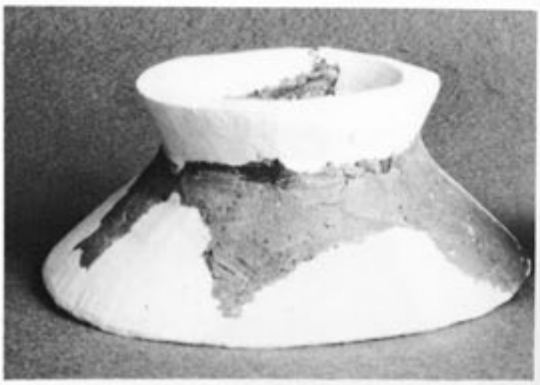
1．山崎Ａ遺跡の遺物出土状況(1)

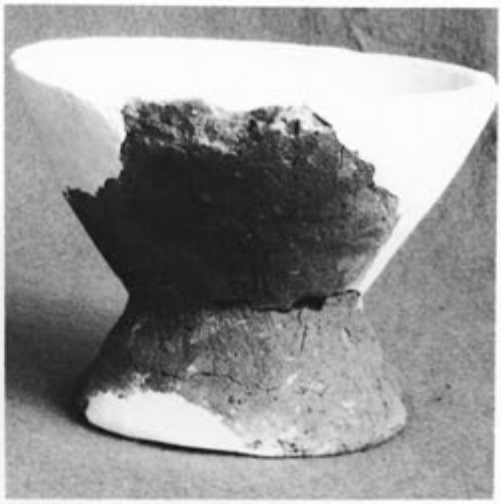
2．山崎Ａ遺跡の遺物出土状況(2)

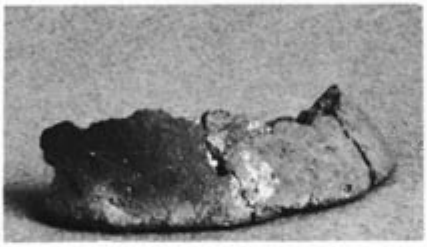
山崎Ａ遺跡の出土遺物(1)

図版8

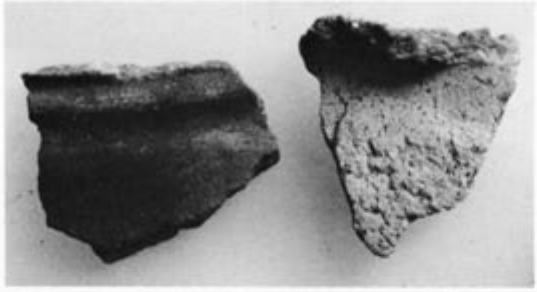


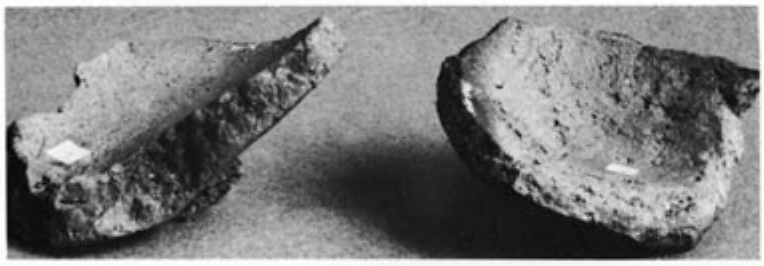






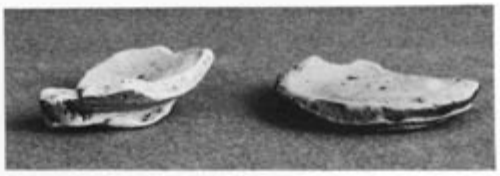
山崎Ａ遺跡の出土遺物(2)

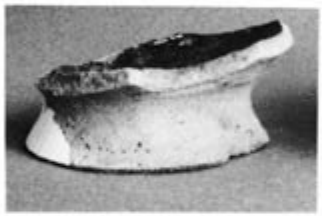




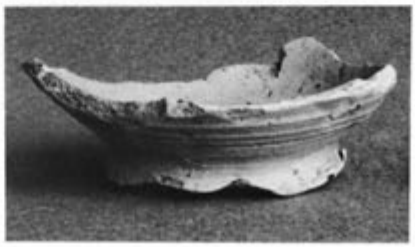
山崎Ａ遺跡の出土遺物(3)

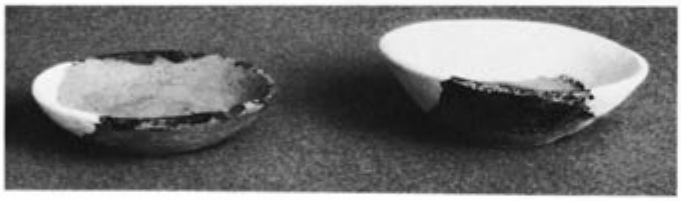
図版10





山崎Ａ遺跡の出土遺物(4)

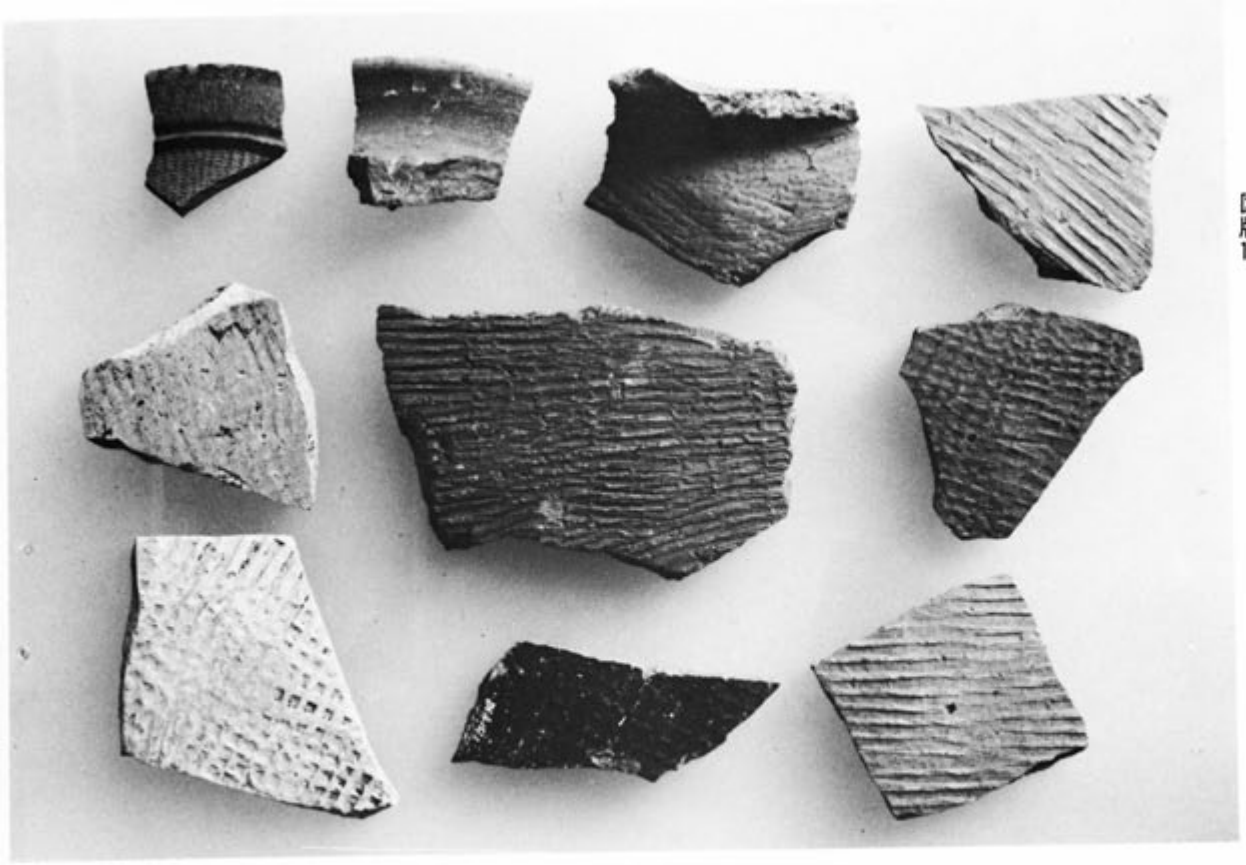




山崎Ａ遺跡の出土遺物(5)

図版12

山崎Ａ遺跡の出土遺物(6)



山崎Ａ遺跡の出土遺物(7)

図版14

山崎Ａ遺跡の出土建物(8)

図版15

山崎Ａ遺物の出土遺物(9)

図版16

山崎Ａ遺跡の出土遺物10

①山崎Ｃ遺跡、近景（南方より）

②山崎Ｃ遺跡、Ⅲ層上面ピット群検出状態

①山崎Ｃ遺跡出土遺物(1)

②山崎Ｃ遺跡出土遺物(2)

①山崎Ｃ遺跡の
遺物の出土状態

142

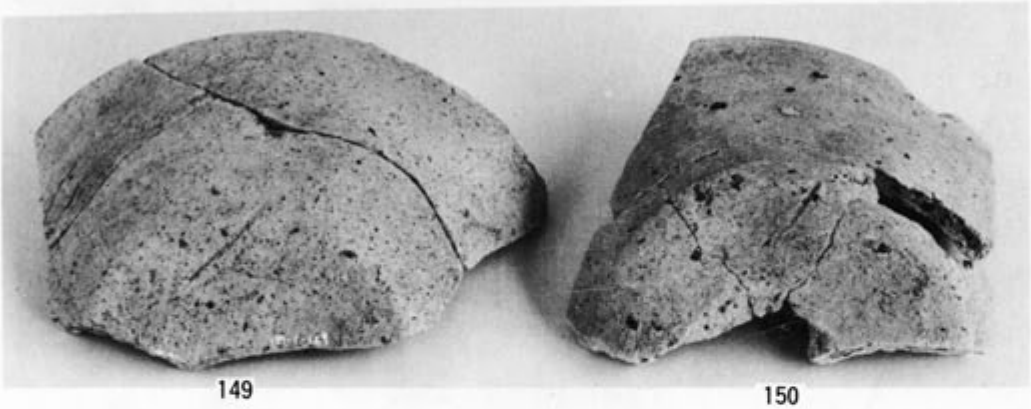
143

144

146

145

②山崎Ｃ遺跡の出土遺物(3)



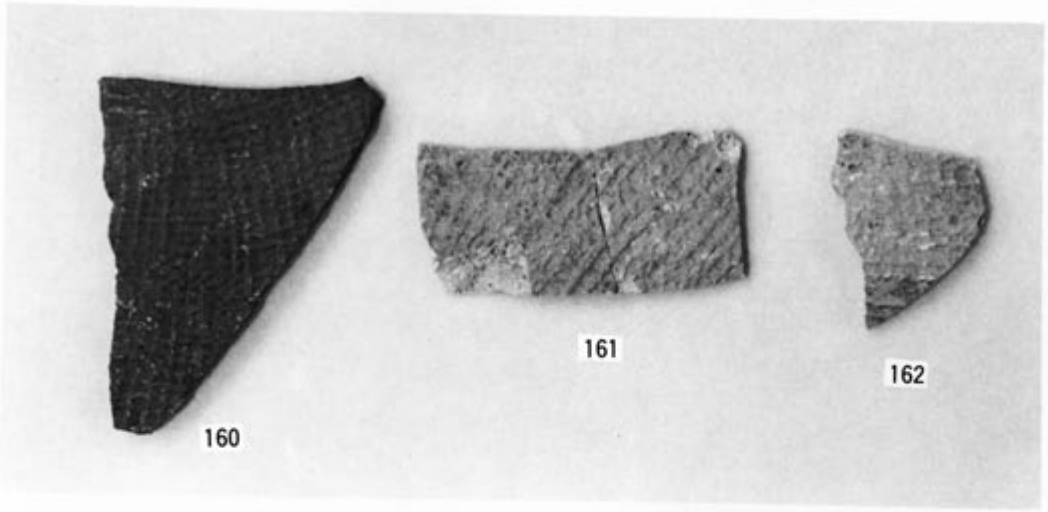
149　　150

③山崎Ｃ遺跡の出土遺物(4)

図版20

①山崎Ｃ遺跡の
遺物の出土状態

②山崎Ｃ遺跡の出土遺物(5)




③山崎Ｃ遺跡の出土遺物(6)

# 木 場 C 遺 跡

# 例　　言

1．この報告は，九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって消滅する遺跡について行なった事前調査のうち，昭和53年度に発掘した木場Ｃ遺跡の調査報告である。

2．発掘調査は，日本道路公団の受託事業として，鹿児島県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆は，つぎのとおりである。

| | |
|---|---|
| 第１章，第３章第４節，第４章 | 池畑　耕一 |
| 第２章，第３章第１節・第２節 | 長野　真一 |
| 第３章第３節 | 出口　浩・中村　耕治 |

なお，現場の実測図作成・写真撮影は調査担当者が行ない，遺物の実測・製図・写真撮影は池畑が行なった。

4．出土品は，文化課収蔵庫に保管している。遺物には遺跡名をＫＢＣで略記した。

5．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。

6．挿図の遺物番号と，図版の遺物番号は一致する。

# 目　　次


第１章　木場Ｃ遺跡の地理的・歴史的環境…… 84
第２章　調査の経過および組織…… 86
　第１節　調査の経過…… 86
　第２節　調査の組織…… 86
第３章　調査の内容…… 88
　第１節　概　要…… 88
　第２節　層　序…… 89
　第３節　遺　構…… 89
　　1　集石…… 89
　　2　縄文式土器の出土状況 …… 89
　第４節　遺　物…… 90
　　1　縄文式土器…… 90
　　2　土師器…… 92
　　3　内黒土師器…… 96
　　4　須恵器…… 96
　　5　磁器…… 96
　　6　土製品…… 98
　　7　石製品…… 98
第４章　まとめにかえて…… 99


# 挿　図　目　次


第１図　木場Ｃ遺跡の位置および周辺の遺跡……85
第２図　地形図……87
第３図　断面図……88
第４図　集　石…… 89
第５図　縄文式土器出土状況……90
第６図　縄文式土器……91
第７図　土師器(1)（坏・皿・椀・高坏・鉢）……93
第８図　土師器(2)（鉢・かめ）…… 95
第９図　内黒土師器…… 96
第10図　須恵器・磁器…… 97
第11図　土製品・石製品…… 98

# 表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……84
第２表　坏一覧表……92

# 図　版　目　次

図版１－１　遠景（木場Ｂ遺跡より望む）……101
　　２　近景（南より）……101
図版２－１　集石（北西より）……102
　　２　集石（南西より）……102
図版３－１　縄文式土器出土状況……103
　　２　地層断面……103
図版４　縄文式土器……104
図版５　土師器（坏・高坏・かめ）……105
図版６　土師器（坏）・磁器……106
図版７　土師器（かめ）……107
図版８　須恵器……108
図版９　スラグの付着した土器・鉄鋌……109
図版10　石鉄……110

# 第１章　木場Ｃ遺跡の地理的・歴史的環境

鹿児島県の北部に位置する栗野町は，霧島山系と国見岳山系とに囲まれた盆地状の町である。吉松町境の熊峯をうがって流れている川内川は，町の中心で向きを西へ変える。川内川は，古くより氾濫しやすく，北方・米永あたりの台地末端には厚く砂礫の層が堆積している。川内川の流域は水田が営まれ，その端は急崖をなしてシラス台地に接している。

木場Ｃ遺跡は，栗野町木場字上原に属し，現在牧野橋の鹿児島寄りにあたる。北側は谷に向かって急崖となり，東側は丘陵を背し，南側は小谷を面前とした西向きの台地つけねにある。

栗野町では旧石器時代から連綿として，遺跡が存在する。旧石器時代の遺跡は，麦生田・木場Ａ２などがある。ともに細石器文化である。縄文時代になると，一段と数が増す。早・前期の主な遺跡としては麦生田・柿ノ木・木場Ａ・花ノ木・射場平・上佐牟田・西原などがあり，木場Ａ・花ノ木では集石が検出されている。中・後期の遺跡も多く，九日田・中尾・諏訪岡・石ノ本などがある。弥生時代の遺跡は多くない。上佐牟田・西原両遺跡は中期の遺物を出す。古墳時代の墳墓として，北方一帯に地下式横穴が存在する。他に板石積石室・円墳も同地区にみられる。奈良時代以降の遺物も各地にみられ，中世山城も北里・坂元などに築かれる。松尾城は石垣を巡した大規模なものである。一方，稲葉崎・田尾原などには供養塔群もある。

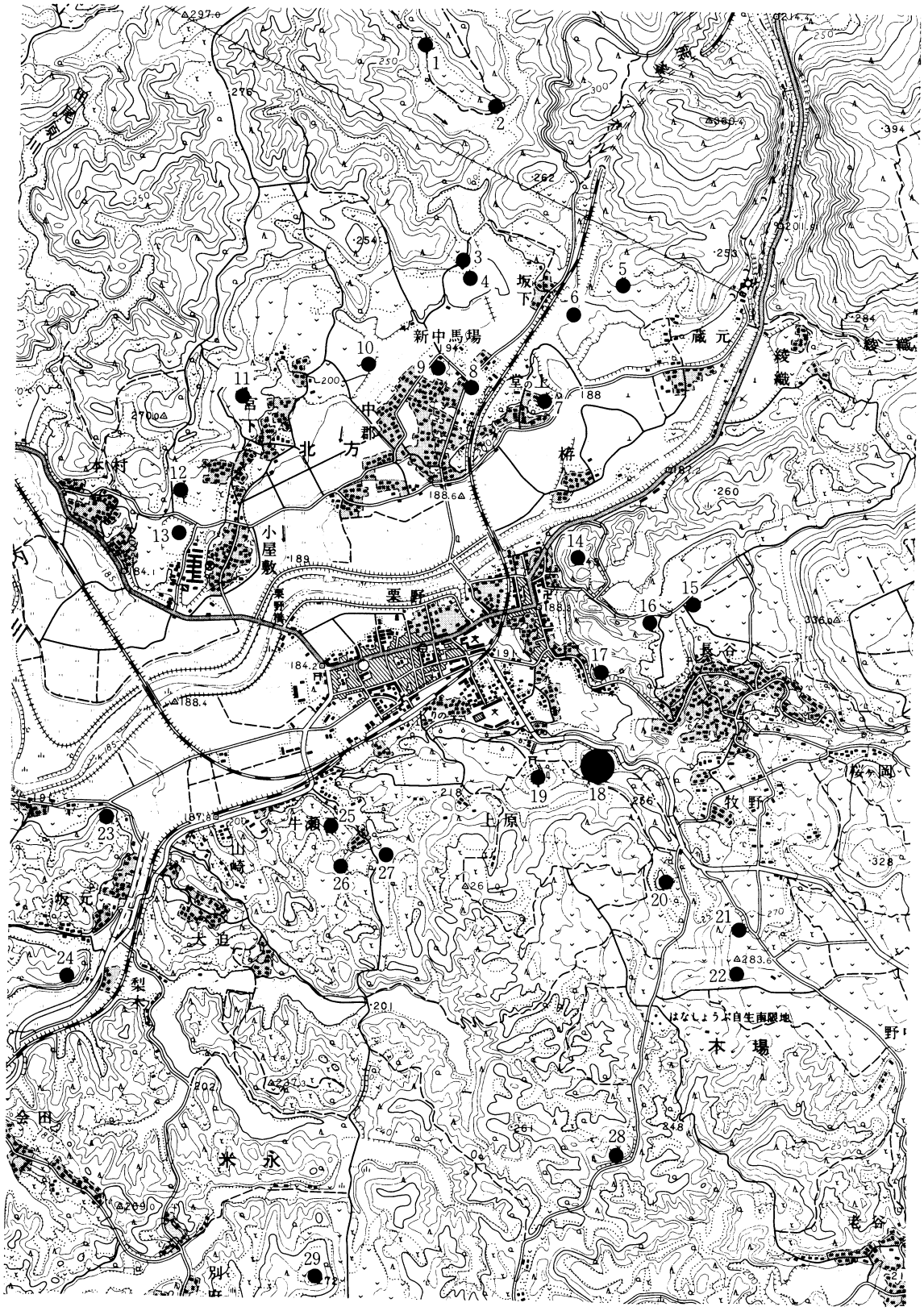
参考文献

(1)林昭男・米満重満「栗野町の遺跡について」『鹿児島考古』第８号　１９７３年

(2)『栗野町郷土誌』　１９７５年

| 図番 | 遺跡名 | 時期 | 図番 | 遺跡名 | 時期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 山ノ口Ｂ | 縄文（中），古墳 | 15 | 木場Ａ２ | 旧石器 |
| 2 | 山ノ口Ａ | 縄文（早・中） | 16 | 木場Ａ | 旧石器，縄文（早） |
| 3 | 麦生田 | 旧石器，縄文（早・中） | 17 | 木場Ｂ | 縄文（後・晩），古墳 |
| 4 | 九日田 | 縄文（後・晩），奈良～平安 | 18 | 木場Ｃ | 縄文（後），古墳，平安～中世 |
| 5 | 宇都 | 縄文・古墳 | 19 | 諏訪岡 | 縄文（早・中・後） |
| 6 | 新中馬場 | 古墳（地下式横穴） | 20 | 花ノ木 | 縄文（早・前） |
| 7 | 正階寺 | 縄文（前） | 21 | 上佐牟田 | 縄文（早・前），弥生（中） |
| 8 | 堂の上 | 古墳(地下式横穴・板石積石室) | 22 | 西原 | 縄文（前），弥生（中） |
| 9 | 隈田 | 古墳（円墳・地下式横穴） | 23 | 下坂元 | 古墳 |
| 10 | 柿ノ木 | 縄文（早・前），古墳 | 24 | 坂元城 | 中世 |
| 11 | 宮下 | 縄文（後），古墳 | 25 | 山崎Ｂ | 旧石器 |
| 12 | 池ノ川 | 古墳（地下式横穴） | 26 | 山崎Ｃ | 古墳・中世 |
| 13 | 迫山 | 古墳 | 27 | 山崎Ａ | 縄文（早・後），古墳，中世 |
| 14 | 松尾城 | 中世 | 28 | 城ケ尾 | 縄文（中），古墳 |
| | | | 29 | 後ケ迫 | 弥生（前） |

第１表　周辺遺跡一覧表




第１図　木場Ｃ遺跡の位置および周辺の遺跡

# 第２章　調査の経過および組織

## 第１節　調査の経過

日本道路公団は，昭和47年２月23日に九州縦貫自動車道鹿児島線（吉松～加治木線）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対して，鹿児島県教育委員会文化室（当時）は，昭和47年８月２日～10日，８月18日～26日の２回にわたり，延長38km，幅２kmにわたって分布調査を行なった。その結果にもとづいて，文化室は路線の決定については，埋蔵文化財保護の上から十分配慮されることを要望した。

昭和49年１月～２月には再度，再確認のための分布調査を実施し，これらの結果にもとづいて道路公団と協議した。当遺跡は，47年の分布調査で確認された丸池遺跡の一部に含まれ，その最北端に相当する。路線内に含まれるため，事前調査の対象となった。

発掘調査は，昭和53年11月27日から，54年１月19日まで行なった。対象面積3150㎡。

日誌抄

11月27日　トレンチ設定。道具搬入。

11月28日　トレンチ調査開始。

12月１日　遺跡内の土層堆積がほぼ明らかとなる。

12月４日　Ｃ２区の4b層より礫群１基が検出される。写真撮影。

12月６日　断面図の作成にはいる。礫群の実測。

12月11日　最初からはいっていた出口・中村と長野が交代する。

12月12日　５層以下に包含層等がなく，4b層の礫群も他に広がらないことを確認。Ｂ６区・Ｃ６区を中心とした第２層に少量含まれる土師式土器の最終検出にはいる。

12月15日　Ｂ４区・Ｂ５区の２層検出にはいる。

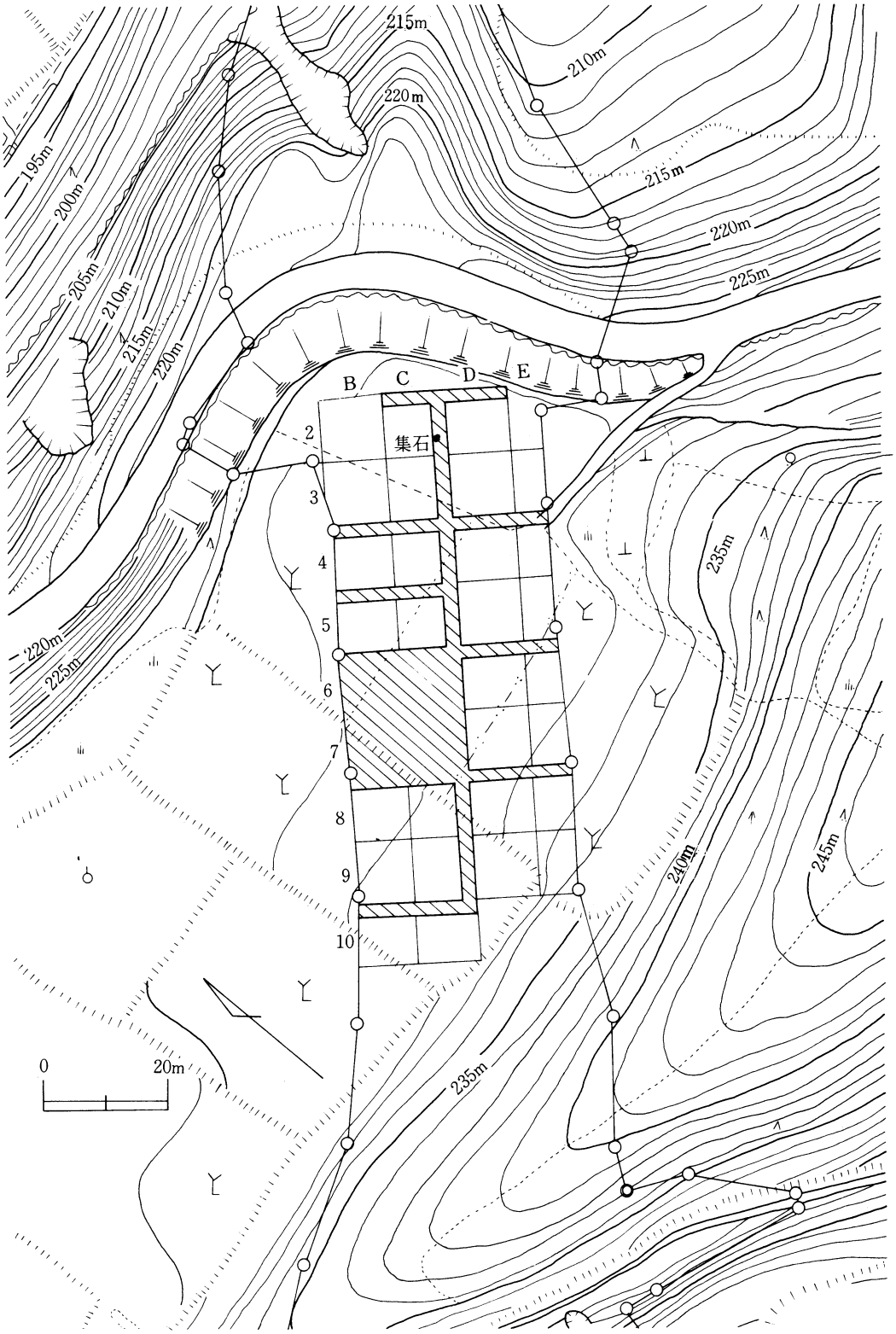
１月10日　土師式土器が２層と３ａ層に存在することを確認。出土品は少量。

１月16日　Ｂ７区・Ｃ７区の全面調査にはいり，土師式土器の分布についての最終検討にはいる。遺物の出土量少なく，遺構等も残されていない。

１月19日　調査終了。写真撮影等を行ない，道具の移動を行なう。

## 第２節　調査の組織

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査責任者 | 文化課課長 | | 谷崎　哲夫 |
| 調査企画 | 〃 | 専門員 | 本蔵　久三 |
| 調査担当 | 〃 | 文化財研究員 | 出口　浩 |
| | 〃 | 主事 | 長野　真一 |
| | 〃 | 主事 | 中村　耕治 |
| 事務担当 | 〃 | 係長 | 中条　享 |
| | 〃 | 主事 | 伊地知千晴 |
| | 〃 | 主事 | 天辰　京子 |


215m
210m
220m
195m
200m
205m
210m
215m
220m
215m
220m
225m
B
C
D
E
集石
2
3
4
5
6
7
8
9
10
235m
240m
245m
220m
225m
235m
0
20m

**第2図　地形図**

# 第３章　調査の内容

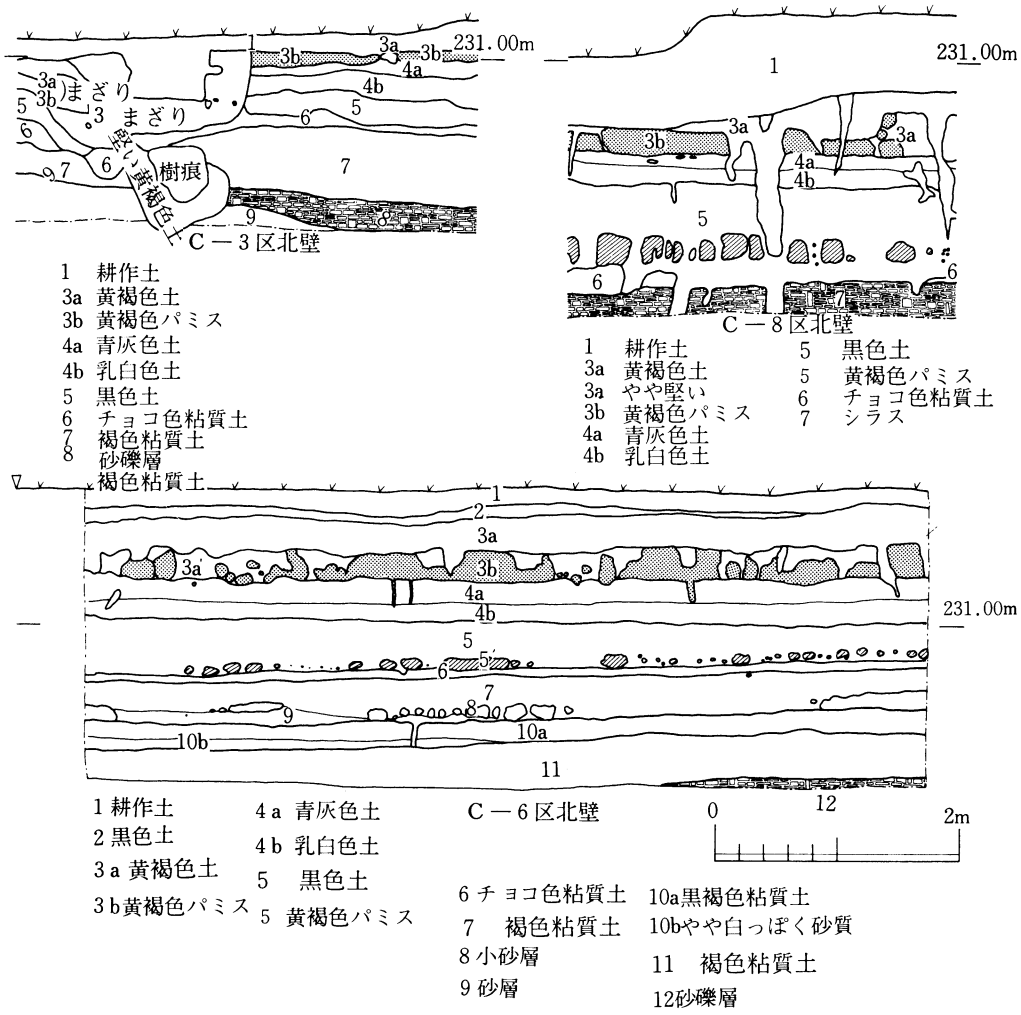
## 第１節　概　　要

木場Ｃ遺跡は，標高２３１ｍを測るほぼ平坦な地形をなしている。東・南側は舌状にのびる丘陵先端で追っており，北側は角傾斜で下降する谷を見おろす。平坦地は西のほうへ続いており，当遺跡はその東端に位置する。買収前は桑畑として使用されており，その根は下部にまで影響している。

調査は，道路中心の２点，つまりＳＴＡ174＋40と174＋60を結んだ直線を主軸とし，この線をＣ区とＤ区の境界線とした。またＳＴＡ174＋40の点を通る直交線を５区と６区との境界線とした。これによって西より東へＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄとし，北から南へ１・２…10とした。

まずＣ区の東側に２ｍ幅のトレンチを設け，さらに２，４，６，８，10の各区の北側にも２ｍ幅のトレンチを設けた。これによって６区,７区付近に土師式土器の散布がみられたので，６Ｂ区，６Ｃ区，７Ｂ区，７Ｃ区は全面調査を行った。調査面積約800㎡。

遺構としては２Ｃ区に集石がみられたのみで，遺物の多くは拡張区よりのものである。




第３図　断面図

## 第2節　層序

基本的には，溝辺，加治木周辺の遺跡と共通する層順を見ることができる。

第1層　耕作表土で黒褐色を呈している。第2層　部分的に堆積の見られない部分もあるが黒色の砂質の土である。第3層は，a層とb層に分離でき，a層はやや軟質の火山灰層で赤ボッコと通称される土である。a層に土師器が若干含まれるが，上層からの沈みと考えた方がよさそうである。b層は，黄色および赤褐色のパミス層であり，全体に均一に堆積するのではなくブロック状にとぎれとぎれに点存している。第4層，硬質で灰青色と紹介されている層で，縄文時代早期の包含層とされているが本遺跡では全く出されていない。この4層は，部分的に上位と下位で色調に変化が見られるが，明確に区別しないこととした。第5層，黒色の粘質土層で，場所によって色調の変化する部分もある。第6層，黄色のパミス層で，これもブロック状に点存している。桜島降下軽石に比定される。また，この6層は，第5層に一見浮遊した状態に見られ，第7層も5層に類似した色調をなしているが，やや粘質が強くなる傾向にある。

第8層はいわゆるシラス層である。また，遺跡の北側トレンチの1～4区までの台地の先端部では，シラスの堆積はなく，安山岩の軽石と橙に風化したバイラン土が基盤をなしていた。

## 第3節　遺構

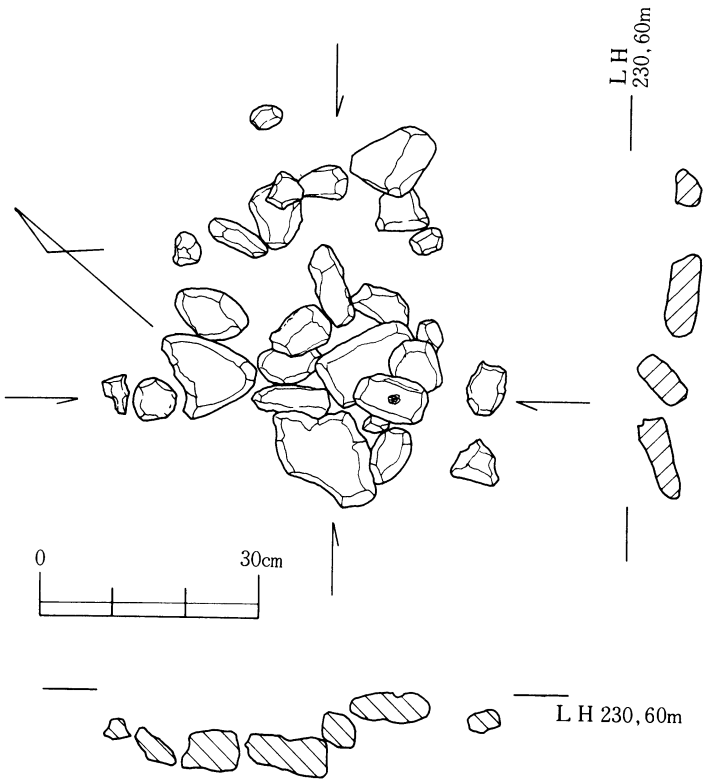
### 1．集石

C2区の確認トレンチ4層中に検出された集石である。

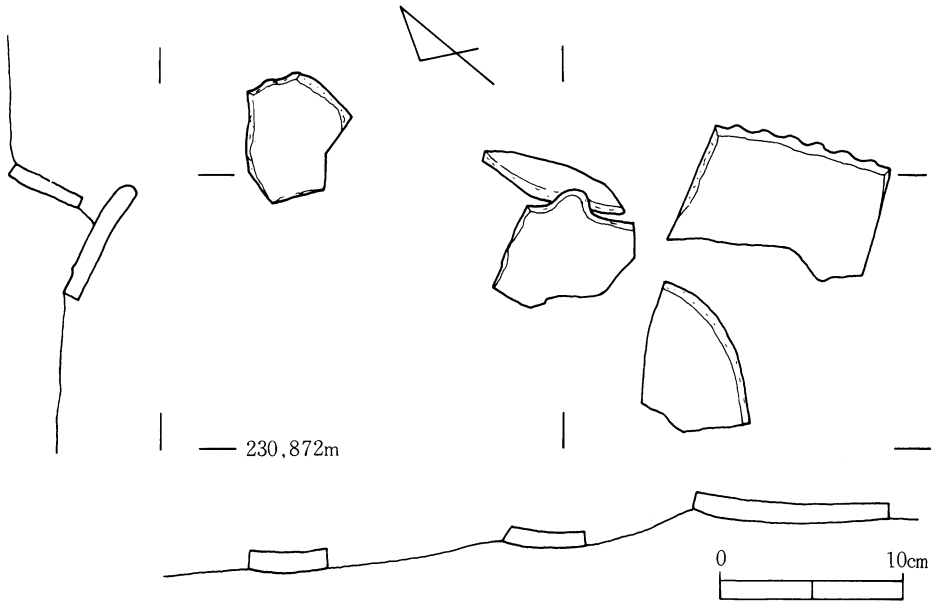
50cm四方の中に人頭大あるいはこぶし大の円礫・角礫が集中している。人工遺物はなく，掘り込み等も不明である。

### 2.縄文式土器出土状況

C5区の確認トレンチ内にある。一個体で他に土器の混入はない。3a層（アカホヤ）内に包含されている。口縁部のまとまった破片が，裏面を上にして横倒しの状態で出土した。土器の上部および底部は欠損していた。




第4図　集石




**第５図　縄文式土器出土状況**

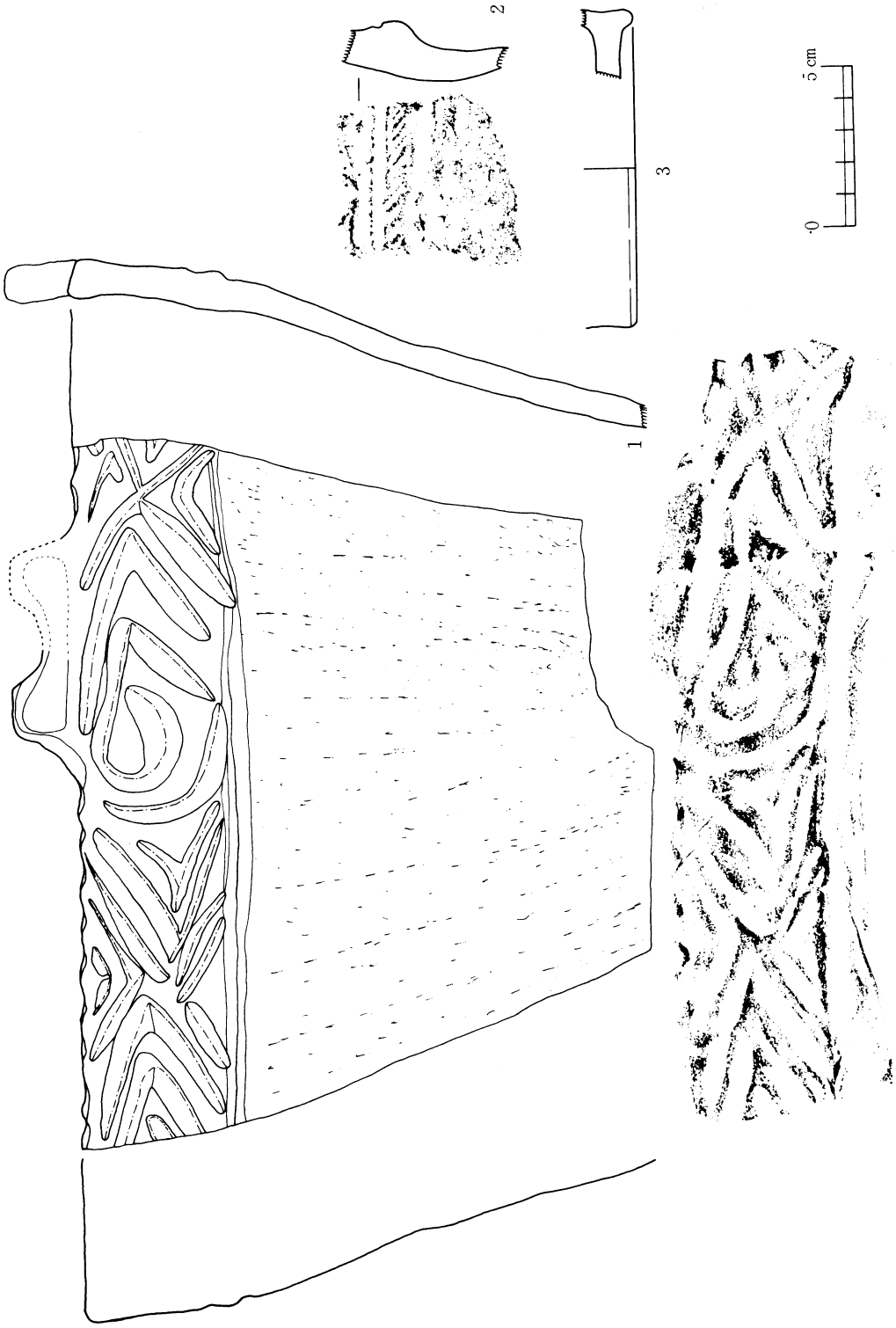
**第４節　遺　物**

表土あるいは３ａ層から縄文式土器，土師器，内黒土師器，須恵器，磁器，土製品（土錘）石製品（石鏃・砥石・不明石製品）が出土している。この他に，表土から近・現代の陶磁器，寛永通宝などが出土した。

１．縄文式土器（第６図**１**～**３**）

**１**はＣ５区３ａ層下部から出土した南福寺式土器である。口縁直径33cmを測り，底部に向かってすぼまる形態を呈す。口縁端から下に約５cmの幅でやや肥厚し，ここにヘラ様の施文具でやや幅広の凹線文様が描かれる。３重の凹線でひし形の文様を主体とし，これに弧状曲線・ハの字状直線が加わる。これら肥厚部は貼り付けによって作られ，口縁上部に２個１対の山形突起が付いている。肥厚部分以下は，ヘラ様施文具による縦方向のケズリ，内面はていねいな横なでで仕上げている。製作方法は輪積みである。茶褐色を呈するが，外面にはススが付着している。割合にこまかい砂質の胎土を使い，焼成は良好である。**２**は市来式土器である。口縁部付近が肥厚し，肥厚部分にヘラ様施文具による右下がりの斜方向きざみと，幅４mmほどの横方向凹線がみられる。外面・内面とも横方向のナデで仕上げている。茶褐色を呈し，焼成は普通である。石英・黒雲母などを多く含む砂質の胎土を使っている。**３**は底の直径 9.8cmを測るあげ底の底部である。薄手の土器で，直に近く立ち上がる。外面は茶褐色，内面は灰黒色を呈し焼成は良い。３mm位の石粒まで含む砂質の胎土を使っている。Ｃ６区出土。

以上３点の他にＣ５区，Ｃ６区，Ｃ７区，Ｃ８区の３ａ層から茶褐色を呈する薄手の破片が少数出土している。




**第6図　縄文式土器**

**2.土師器**

古墳時代から中世までのもので，器種として坏・皿・椀・高坏・鉢・かめがある。

①坏（第7図**4～24**）

底部の切離しは，ヘラ切りのものと，糸切りのもの（**23・24**）とがある。底部から口縁部へは開きながらまっすぐ立ちあがり，口縁端部は丸みをもっておわる。底部へも丸みをもって至るが，**22**は底部に近いところまでまっすぐ立ちあがり，底がたいらに切られる。内面は**4・5・17・19・20**のように底部と立ちあがりの境に段をもつものと，**6・7・16・18・21～23**のように丸みをもって境の不鮮明なものとがある。外面には指なでのくぼみがみられるものもある。**24**の内側には全面に黒色のスラッグが付着している。完形品の計測値は，**4**が口径12.9cm，底径6.3cm，高さ4.5cm，**5**が口径13.1cm，底径4.3cm，高さ4.4cm，**6**が口径13.5cm，底径6.4cm高さ4.5cm，**7**が口径15.3cm，底径8.0cm，高さ4.5cmである。胎土は精製した良質土である。

| 番 | 出土区 | 色 | 焼成度 | 備考 | 14 | D－8 | 明茶褐色 | ふつう | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | | 淡茶褐色 | 良好 | | 15 | | 明茶褐色 | 良好 | |
| 5 | | 淡茶褐色 | 良好 | | 16 | | 淡茶褐色 | ふつう | |
| 6 | | 乳灰色 | ふつう | スス付着 | 17 | | 淡茶褐色 | 良好 | 小礫多い土 |
| 7 | | 淡茶褐色 | ふつう | やや砂質土 | 18 | | 灰褐色 | ふつう | |
| 8 | | 茶褐色 | 良好 | スス付着 | 19 | | 黄褐色 | 良好 | 小礫多い土 |
| 9 | | 乳白色 | ふつう | | 20 | | 淡茶褐色 | ふつう | |
| 10 | | 灰白色 | ふつう | | 21 | | 淡茶褐色 | ふつう | |
| 11 | | 淡茶褐色 | 良好 | スス付着 | 22 | | 乳白色 | 良好 | |
| 12 | | 乳白色 | 良好 | | 23 | | 乳白色 | ふつう | |
| 13 | | 淡茶褐色 | 良好 | スス付着 | 24 | | 乳白色 | 良好 | |

**第2表　坏一覧表**

②皿（第7図**25**）

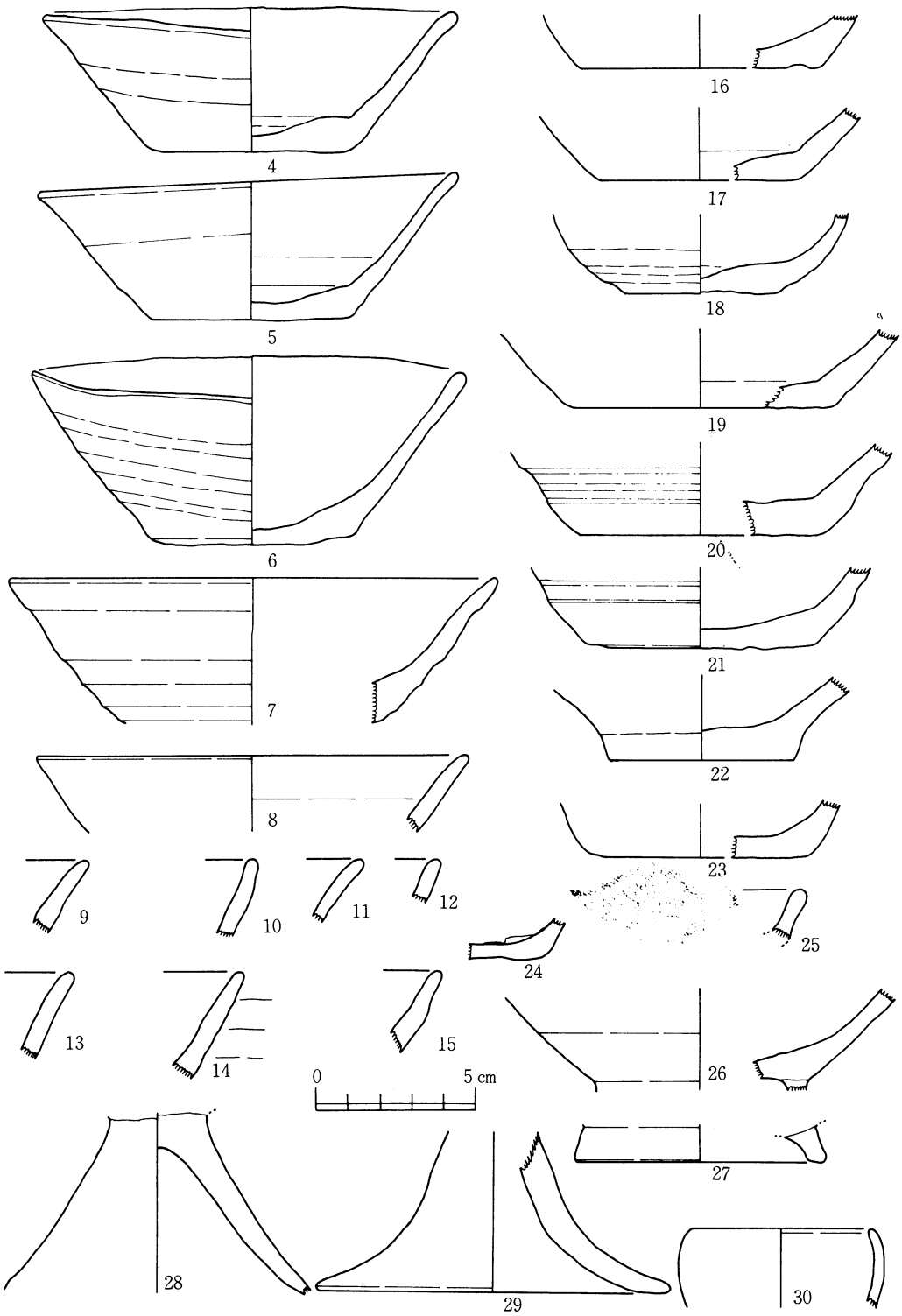
口縁端が丸みをもっておわる小皿である。内面・外面とも横方向のなでで仕上げられる。精製したこまかい胎土を用い，軟質に焼けている。

③椀（第7図**26・27**）

**26**は底の直径6.8cmを測る椀で，高台が付く。茶褐色を呈するが，内面の底には黒色のスス状付着物がみられ，部分によっては光沢もある。内黒土師器の可能性もあるが，胴部内面には付着物がない。砂質のこまかい土を使用し，堅く焼けている。**27**は直径7.8cm，高さ0.8cmを測る高台部分で，高台端部は直に切られている。赤みをおびた淡茶褐色を呈す。砂質のこまかい土を使用し，焼成度はふつうである。

④高坏（第7図**28・29**）

脚部が2点出土している。**28**はくびれ部より脚端部へ向かってゆるやかに開いていくもので，外面は縦方向のなで，内面は横方向のなでで仕上げている。外面は黄みがかかった淡茶褐色，内




**第７図　土師器(1)（坏・皿・埦・高坏・鉢）**

面は灰黒色を呈するが，外面には丹が塗られている。丹はうすく塗られ，部分的に剝脱がみられる。こまかい長石，石英粒を多く含む砂質の胎土で，堅く焼けている。**29**も**28**と同様の形態を呈しており，脚端の直径は11.1cmである。外面は縦方向のていねいなナデ，内面は横方向のナデで仕上げている。淡茶褐色を呈する。こまかい長石，石英粒を多量に含む砂質の胎土で，表面の剝脱などもみられ，もろい。

⑤鉢（第７図**30**，第８図**31**・**32**）

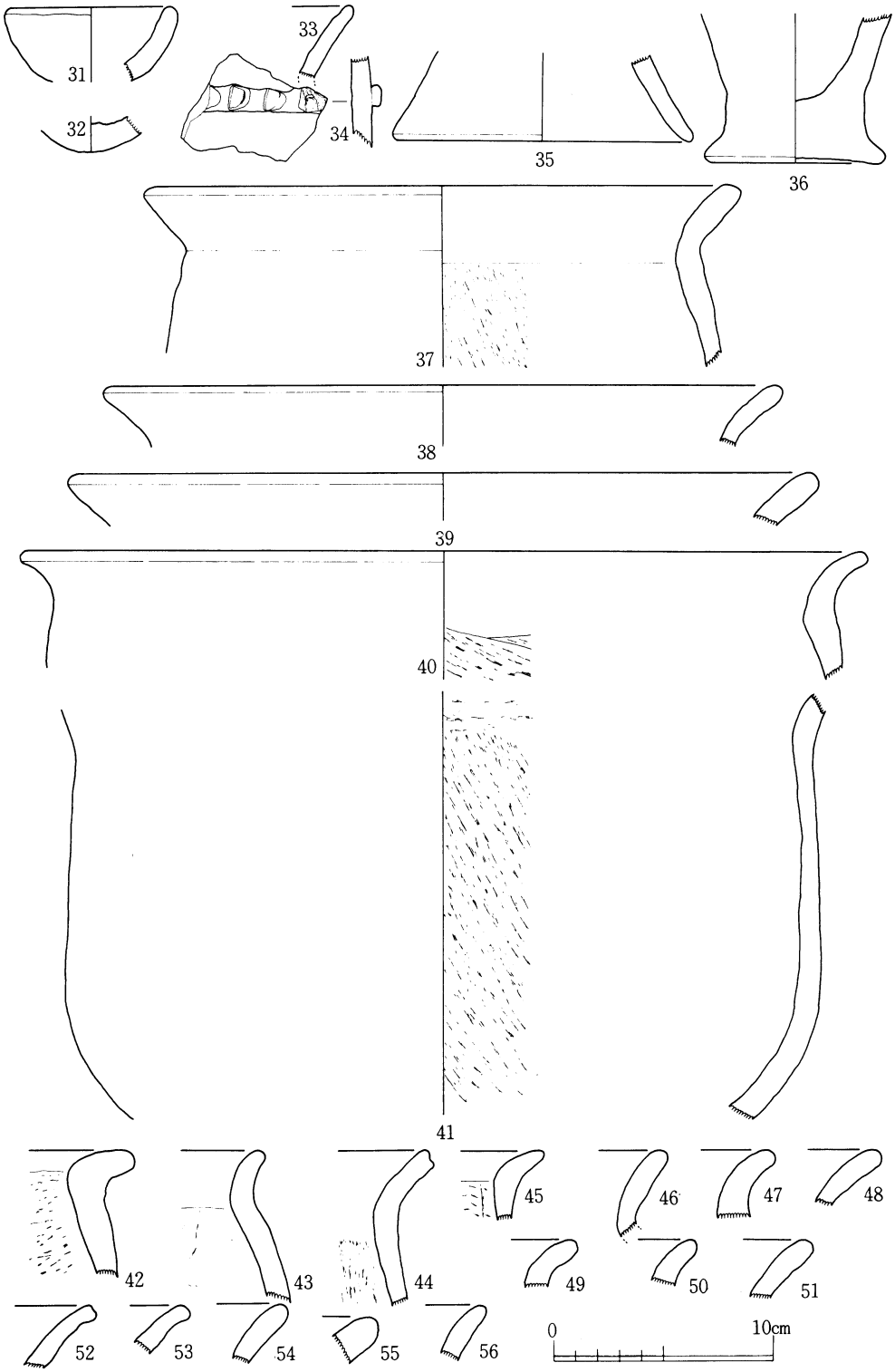
**30**は口縁直径 5.6cmを測るマリ状の鉢である。口縁端がやや内反しておわる器形をし，器厚 3.5mmと薄手である。淡茶褐色を呈しているが，外面には全面に，内面も口縁付近に丹が塗られている。石英などの微石粒を多く含む致密な胎土である。Ｃ６区出土。**31**，**32**は内面にスラッグの付着した鉢である。微石粒を多く含んだ良質の胎土である。**31**は口縁直径 7.2cmを測り器厚８mmと部厚い。口縁端部は丸みをおびており，端部は整然とせず，手づくね様である。熱のために表面は灰色を呈し，内面にはえんじ色のスラッグが端部まで付着している。スラッグは外面にも一部分，付着している。**32**は丸底の底部で，厚さ 1.2cmを測る。内面に黒色を呈するスラッグが付着しており，外面は灰色を呈する。

⑥かめ（第８図**33**～**56**）

かめの破片は多い。これらは古墳時代のもの（**33**～**36**）と，奈良時代以降のもの（**37**～**56**）とに大別できる。

**33**はくの字状に外反する口縁部で，内外ともにナデ整形で仕上げる。**34**はまっすぐ立ち上がる口縁をもつもので，丸みをもった貼り付け突帯が付される。この突帯にはヘラ押しがみられる。**35**は脚台で，脚端直径13.7cmと大きい。**36**は底径 8.2cmを測るあげ底の脚台が付いておりあまり広がらずに口縁部へ向かう。茶褐色あるいは淡茶褐色を呈し，焼成は普通である。石英・黒雲母などの細石粒を多く含む砂質胎土である。

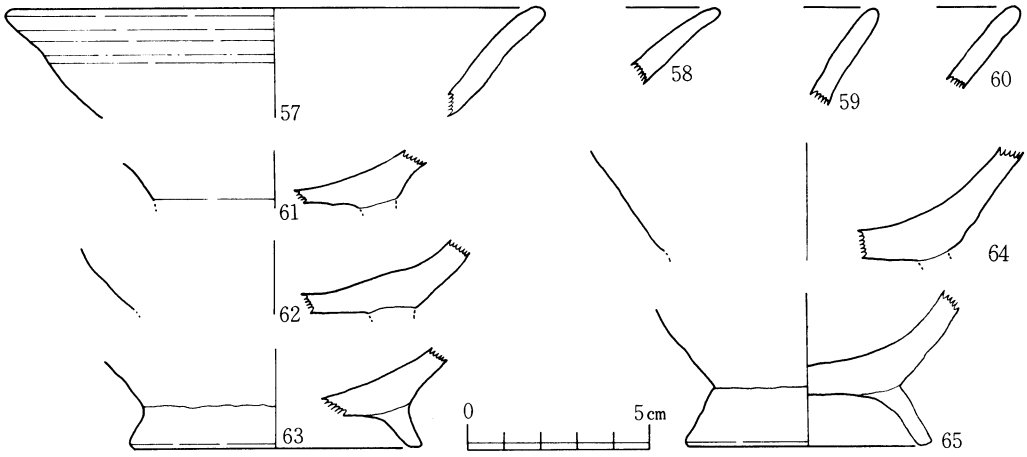
**37**は口縁直径27.2cmとやや小型で，頸部でくびれて外反する。口縁端は広く方形に近い。外面は横方向ナデ，内面の頸部より上はヘラ横ナデ，下は縦方向ヘラケズリである。**38**・**39**も頸部で強く外反する。口縁直径は**38**が30.9cm，**39**が34.2cmである。**38**は器厚 0.9cmと薄い。**40**はくの字状に外反する口縁部で，口縁直径38.6cmを測る。頸部付近に比べて，口縁部の器厚はうすい。**41**は口縁部と底部を欠いているが，全形をよくうかがえる個体である。頸部からゆるやかに外反して口縁部へ至る。胴部はあまり張らず，まっすぐ底へ向かって，安定した丸底を呈するものと思われる。器高より胴部直径が大きいどっしりした形態をしている。外面はナデ整形，内面の頸部より上はヘラ横ナデ，下は斜方向のヘラケズリで仕上げている。**42**～**56**は口縁部であるが，共通して頸部以下の内面は，ヘラケズリで仕上げる。**42**は逆Ｌ字形に近く，口縁部が強く屈曲している。**45**も強く屈曲している。その他は割とゆるやかに屈曲し，くの字状を呈する。口縁端部は丸みをもっているが，**44**は断面が方形を呈し，端部には一条の凹線が巡っている。２mmほどまでの石粒を含む砂質の胎土を使い，焼成は良い。色は黒褐色・茶褐色・淡茶褐色を呈し，外面にススの付着したものも多い。


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
10cm

**第８図　土師器(2)（鉢・かめ）**

3．内黒土師器（第９図**57～65**）

すべて埦である。口縁端は丸みをもっておわるが，**58**はやや細い。**57**は口縁直径14.7cmを測り，口縁下に浅いくぼみがみられる。底部へはまっすぐせばまって達し，高台が付く。高台は貼り付けによってつくられ，剝脱しているものも多い。底はていねいにナデられている。**65**の高台は端部が矩形を呈し，高台端の直径は**63**が 8.0cm，**65**が 6.7cm，高台の高さは**63**が 0.9cm **65**が 1.4cmである。外面は横方向になでられ，赤褐色を呈しているもの（**59・62**）と，淡茶褐色あるいは乳灰色のものとがある。内面はていねいになでられ，光沢を呈する黒色は口縁端まである。**57・59**は外面にも少しおよんでいる。精製された粘土を用い焼成は良い。




**第９図　内黒土師器**

4．須恵器（第10図**66～77**）

すべてかめである。**66・67**は頸部の破片である。**66**はなで肩の肩部から，やや外へ開きながら端部へ向かう。外面の叩きは，こまかい格子目である。**67**は部厚いつくりで，内面に剝脱の痕跡がみられる。**68～77**は胴部の破片である。外面の叩きは，**68・69**がこまかい正格子目で，**70～77**は平行線文である。**74**は無文で，外面に自然釉がかかっている。内面の叩きは，**68・70・76**が平行線文で，他は同心円文である。色は茶がかった灰色のもの（**66・70・71・74**），灰色を呈すもの（**67・77**），黒灰色のもの（**68**），赤みがかった茶褐色のもの（**69・75・76**），緑がかった灰色のもの（**72・73**）があり，**74**は外面にボロがかかる。**68**は瓦器質である。

5磁器

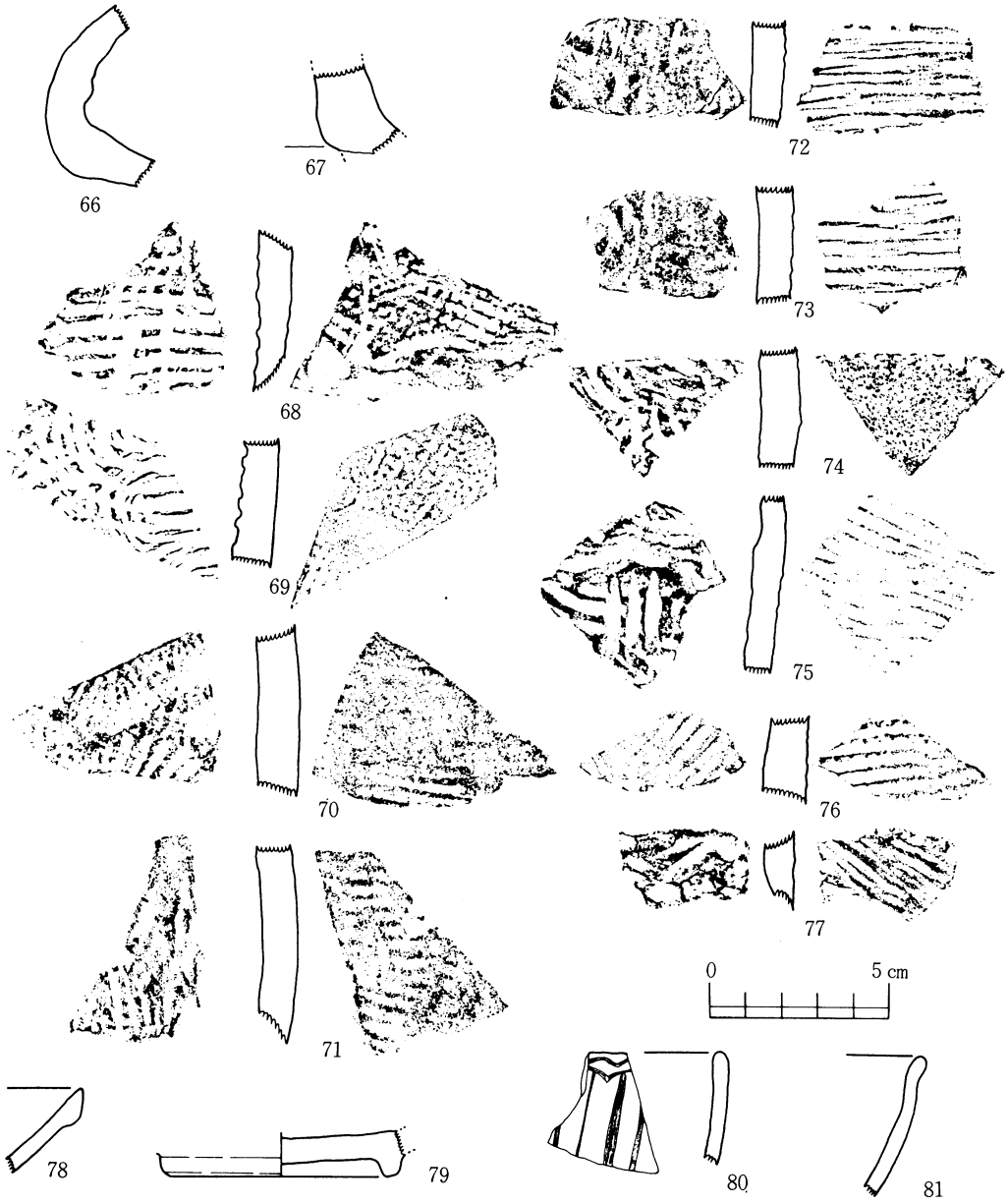
①白磁（第10図**78**）

**78**は埦の口縁で，玉縁状の口縁を有する。口縁端はうすくなっておわる。白色の胎土に，青みがかった白色の釉がかかっている。

②青磁（第10図**79～81**）

越州窯系青磁１点，龍泉窯系青磁２点が出土した。**79**は直径６cm，高さ 0.5cmの浅い高台を有

する椀で，こまかい貫入のはいった緑黄色の釉が，全面にかかっている。内底部および畳付部分に８ケ所ほどの班点状目痕をみる。高台断面は純角の三角形を呈する。胎土は灰褐色を呈する。**80**は口縁端が丸みをもっておわる椀で，貫入の多くはいった灰色がかった緑黄色釉がかかっている。ヘラで縦方向直線と稜の丸みをもった鋸歯文を描き，蓮弁を表現する。胎土はやや粗く，灰色を呈する。**81**は口縁端部がくの字状に外反する椀で，貫入の多くはいった黄緑色の釉がかかっている。内外とも無文である。胎土は白色を呈する。




**第10図　須恵器・磁器**

6．土製品（第11図**82**）

B・C区より重さ1.16gの紡錘状をした土錘が出土している。灰白色を呈し，軟質である。

7．石製品（第11図**83**～**92**）

①石鏃（**83**～**88**）

6点みられ，石材は黒曜石4点，チャート1点，安山岩1点である。すべてにえぐりがみられるが，**87**のえぐりは浅い。**83**はC2区の4b層より出土しており，三角鏃でえぐりが浅い。**84**～**86**は長脚鏃で，**86**は脚がやや内反している。**87**はあらいつくりである。**88**は長さ2.8cmと大型のもので，するどい。

②剝片（**89**）

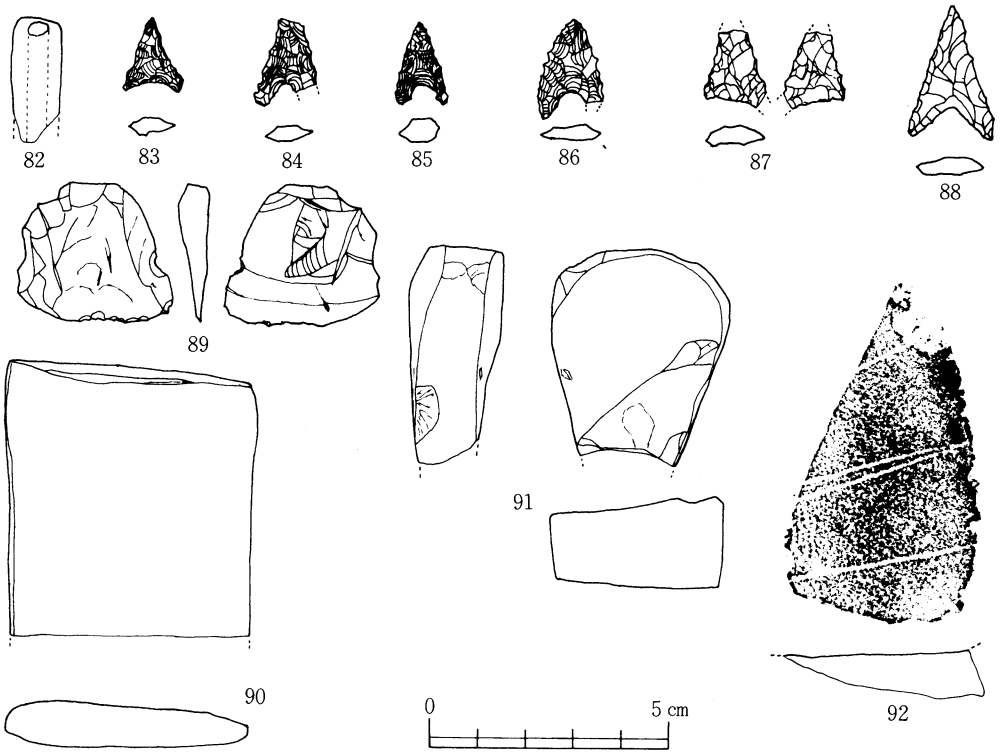
B・C4区より出土したチャートの剝片である。下辺には使用痕がみられる。

③砥石（**90**・**91**）

2点の砥石が出土している。**90**は方形をした砂岩製砥石で厚さ9mmと扁平である。4面を使用している。**91**は4面体の砥石で中央部は相当にへこんでいる。花崗岩製である。

④不明石製品（**92**）

砂岩製で，内底と思われる面がていねいに磨かれここに放射状の沈線がみられる。




**第11図　土製品・石製品**

# 第4章　まとめにかえて

当遺跡は，遺物からみて大きく3時期の痕跡を残している。ここでは各時期に分けて，特長をみてみたい。

1．縄文時代

縄文時代の遺物は，中期末～後期前半の土器である南福寺式土器・市来式土器が出土しており，石鏃・剝片などの石器類のほとんどもこれらに共伴するものである。南福寺式土器はその形態をよく残す大きな破片で，口縁近くが肥厚し，突起をもつ点などに，この型式の特長がみられる。栗野町では中尾・諏訪岡・上掛などの遺跡に南福寺式土器がみられる。市来式土器は初めての出土である。

唯一の遺構である集石遺構は，4b層で検出されたものであり，共伴遺物はないものの，他の遺跡の類例からして縄文時代早期のものである可能性が強い。こうした集石遺構は，数多くの縄文時代遺跡に検出例がみられ，その多くは早期あるいは前期である。当遺跡の近くでも花ノ木遺跡（註1）・木場A遺跡（註2）・山崎B遺跡（註3）で群として検出されており，3遺跡とも平栫式土器，塞ノ神式土器の時期とされる。こうした集石遺構の性格については，いまだにはっきりしていない。しかしこれらの中には，火を受けて焼けたり，もろくなっているもの，タール状の付着がみられるもの，炭あるいは焼骨を含んでいるものなどもあって蒸し焼き用の炉と考える意見が多い。今後，科学的メスのはいらねばならない分野であろう。

2．古墳時代

古墳時代の土器も少量であるが出土している。土師器のうち，高坏（**28・29**），鉢（**30**），かめ（**33～36**）がこの時期に該当するものであり，これは前期のもの（**33・35**）と，後期のものとに分けられよう。

3．平安時代以降

本県ではいまだに古代以降の土師器編年ができていない。したがって，土師器でもって，年代を決めることは困難である。ここでは時期のはっきりしている磁器類から推して大きく二つに分けて考えよう。

ひとつは青磁と白磁が示す平安時代（11世紀後半）である。越州窯系青磁（**79**）は亀井明徳氏の碗A－Ⅱa類にあたり，これを第Ⅱ期（10世紀中項～11世紀後半）とされる（註4）。白磁（**78**）は横田賢次郎，森田勉氏のⅣ類にあたり，これをⅡ期（11世紀中葉～12世紀初頭）とされる（註5）。これらに伴うのは土師器で底部の切り離しがヘラ切りによる坏類（**4～22**）皿（**25**），椀（**26・27**），かめ（**37～56**），内黒土師器（**57～65**），須恵器（**66～77**）などが該当しよう。なお越州窯系青磁の本県における出土地は，川内市薩摩国分寺跡，同薩摩国府跡に次ぐもので，その希少性からしても貴重である。玉縁口縁をもつ白磁も本県では少なく上記2遺跡の他には加世田市上ノ城遺跡，同栫ノ原遺跡・川内市西ノ平遺跡・姶良町萩原遺跡などに出土が知られている。

あとひとつは**80**の青磁が示す15～16世紀項である。この青磁は鋸歯と縦線頂点が接しておらず，やや退化した様相を示している。これに伴うのは土師器の坏で，底部の切り離しが糸切りによるもの（**23・24**），鉢（**31・32**）が該当しょう。この時期の遺物で注目されるのは，**23・31・32**の内面にみられるスラッグの付着である。同時にこれらの出土した同一地点からは鉄鐸も数点出土している。このことはここで一種の鍛治作業がなされたことを想像できる。このようなスラッグの付着した容器＋鉄鐸は加世田市上ノ城遺跡(註６)でも出土している。上ノ城遺跡では，糸切底の皿にスラッグが付着しており，鉄鐸の他，ふいごの羽口も出土している。この遺跡は別府城の支城とされている。当遺跡の場合，その性格づけを文献上あるいは発掘成果からおさえることは困難といえるが，①独立丘陵末端にあり，低地を見渡せること。②谷をはさんで松尾城が位置すること。③鍛治関係の遺物を出土すること。④中世，栗野一帯は勢力争いが激しいことなどから考えて，当遺跡を山城関係の遺跡と考えるにやぶさかでない。

当遺跡は台地の片隅のみの調査で終っているため，不明な点が少なくない。今後，周辺調査が必要とされよう。

註

1　諏訪・青崎『花ノ木遺跡』（『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』1）１９７７年

2　報告書は次年度発刊予定。

3　報告書は次年度発刊予定。

4　亀井明徳「日本出土の越州窯陶磁器の諸問題」『九州歴史資料館研究論集』１　１９７５年

5　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　１９７８年

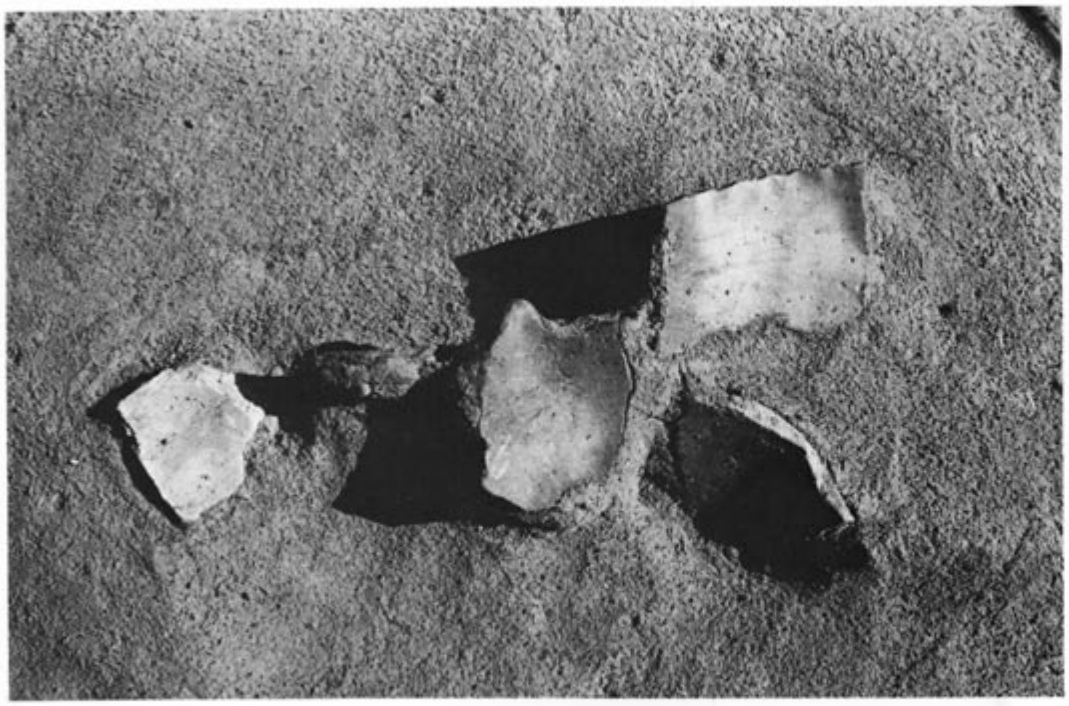
6　諏訪・池畑『上ノ城遺跡』（『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』２）　１９８０年

1．木場C遺跡遠景（木場B遺跡より望む）

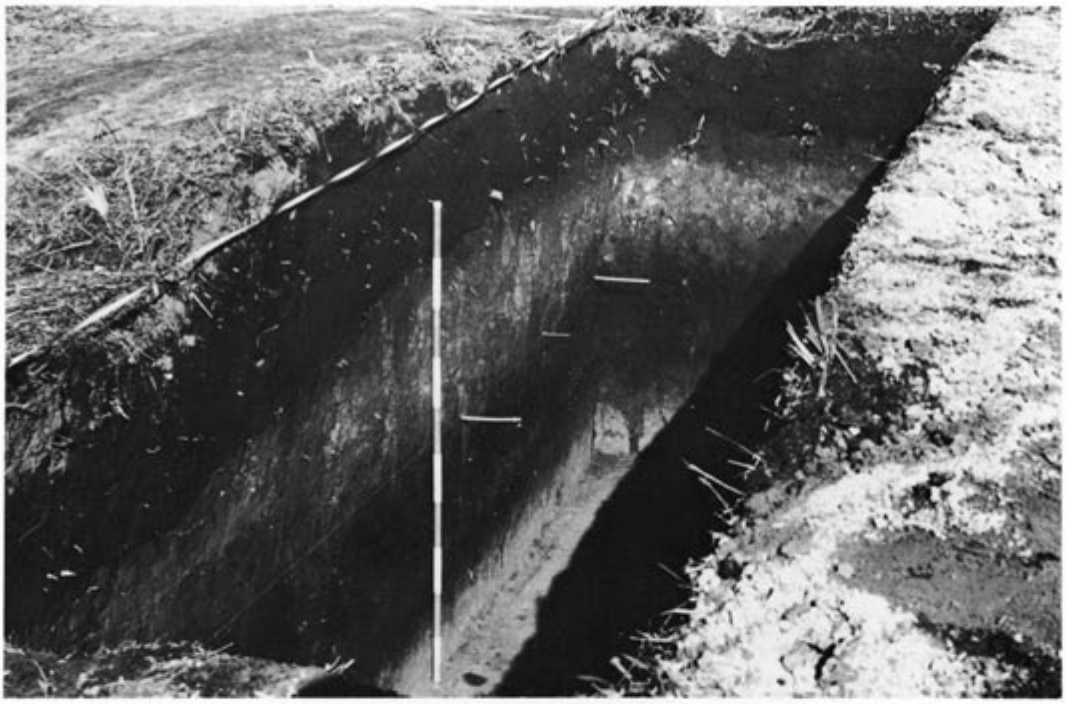
2．近景（南より）

1．集石（北西より）

2．集石（南西より）

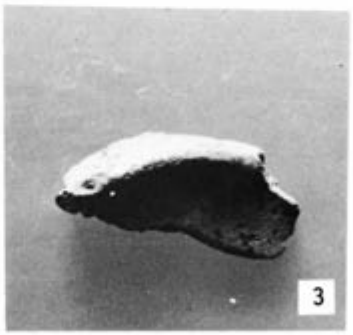


1．縄文式土器出土状況



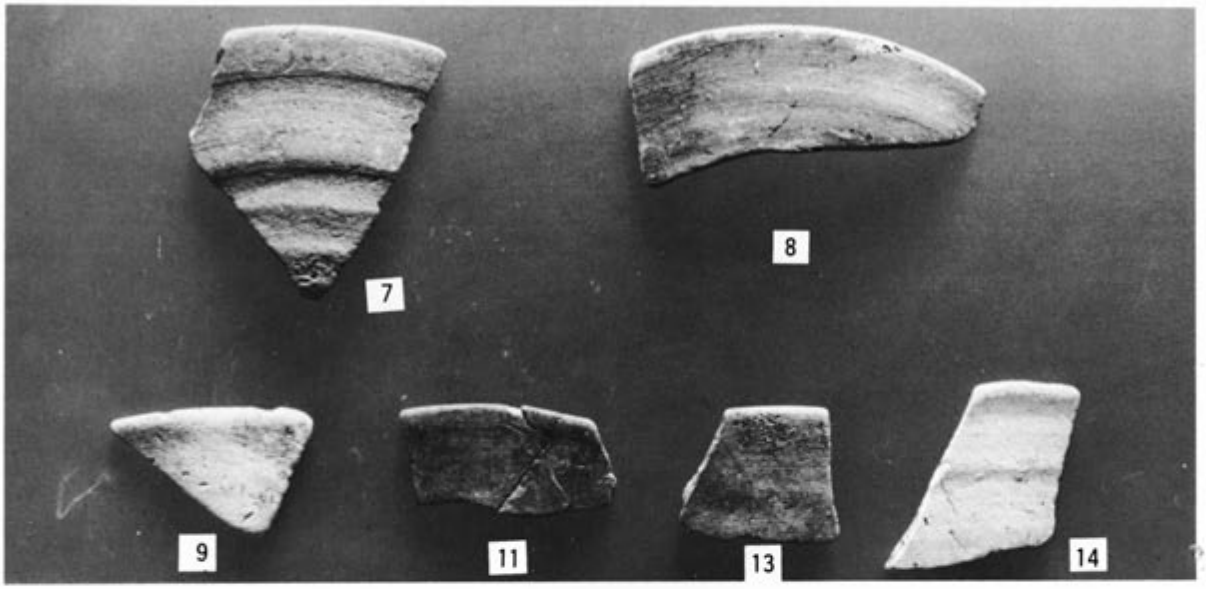
2．地層断面

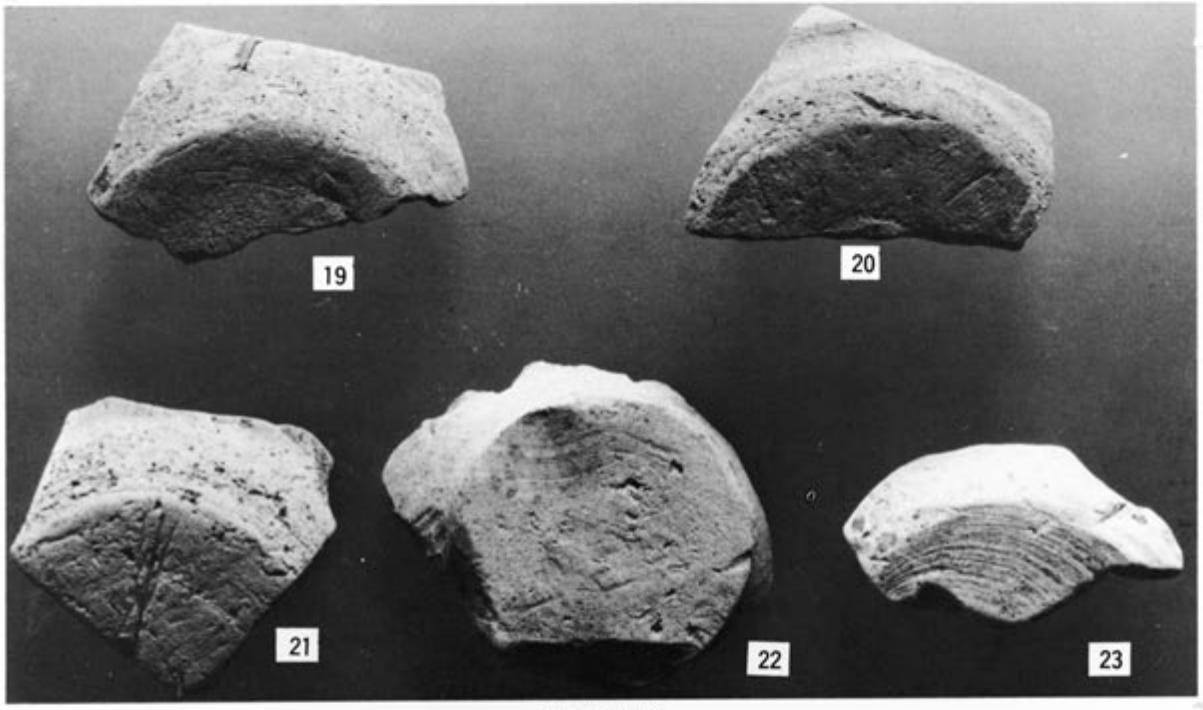
図版4



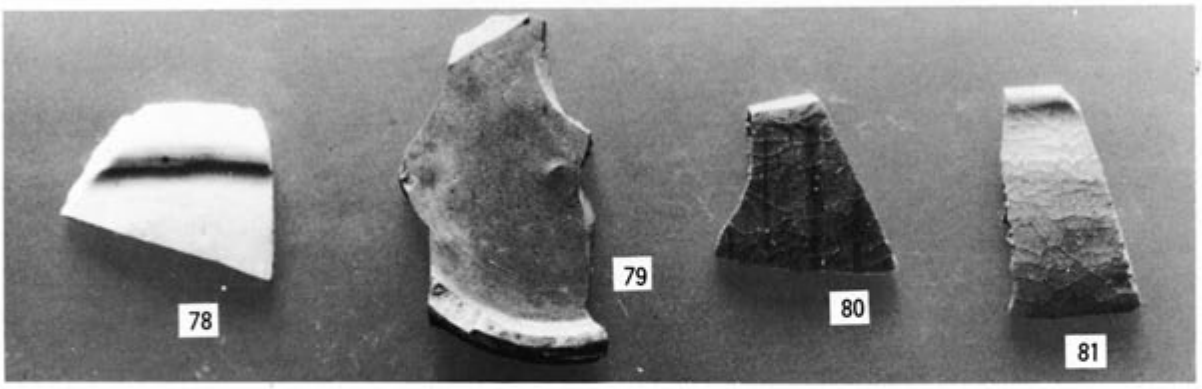
縄文式土器

土師器（坏・高坏・甕）

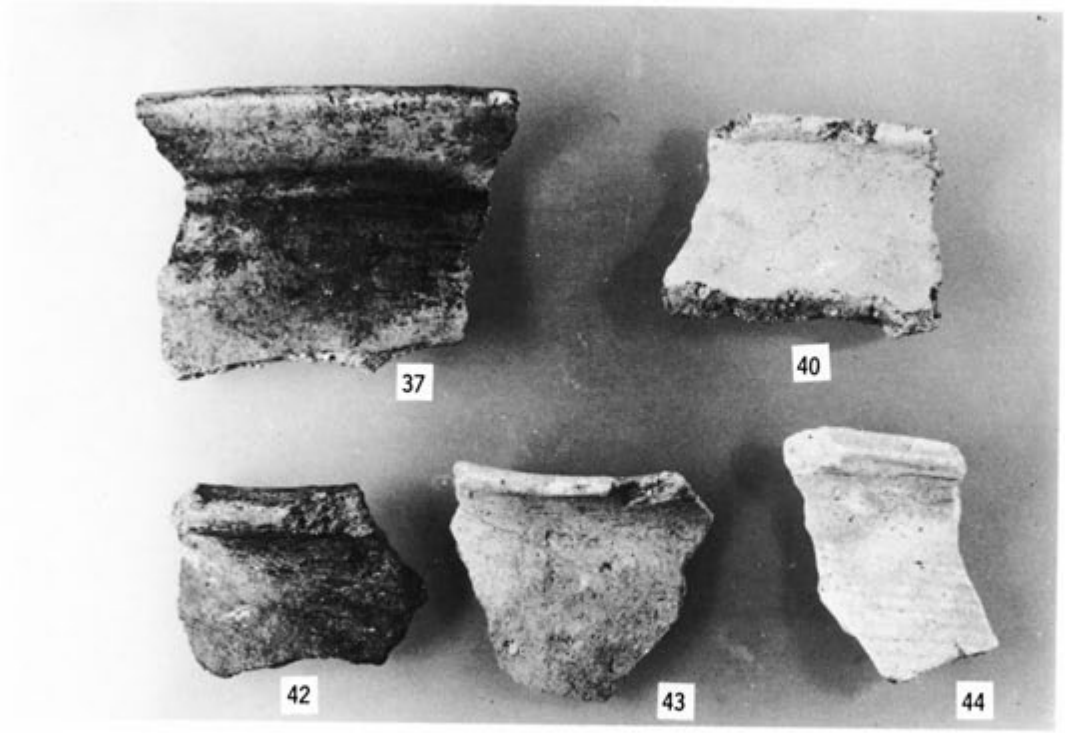


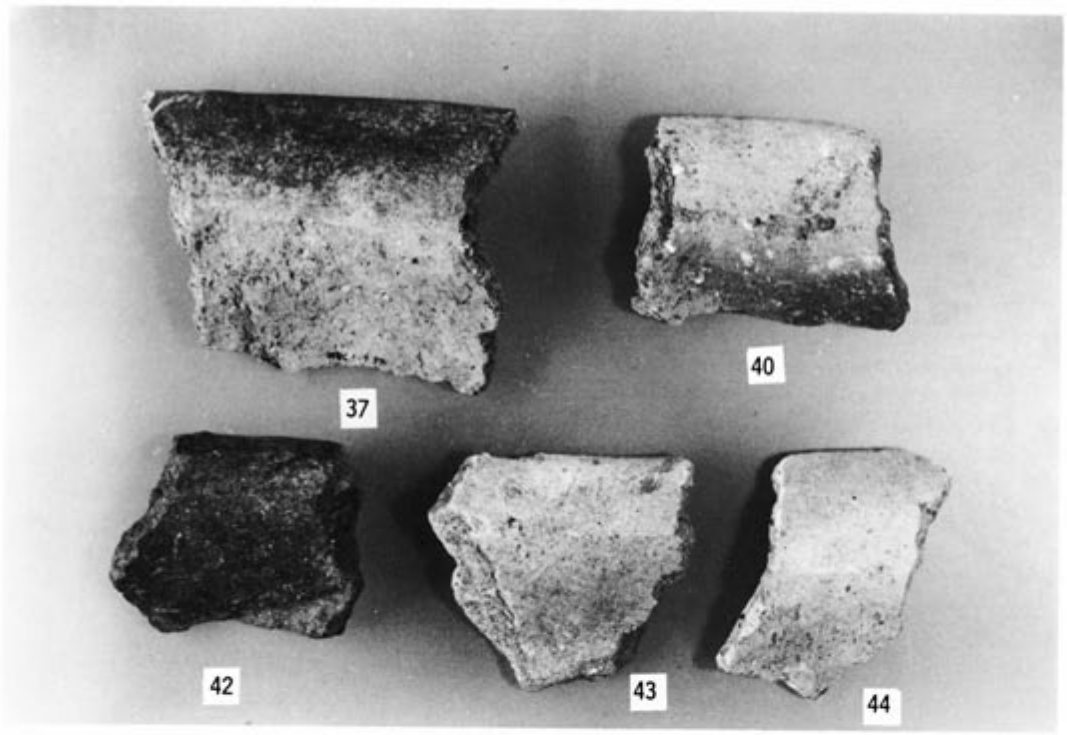

土師器（坏）




磁　器

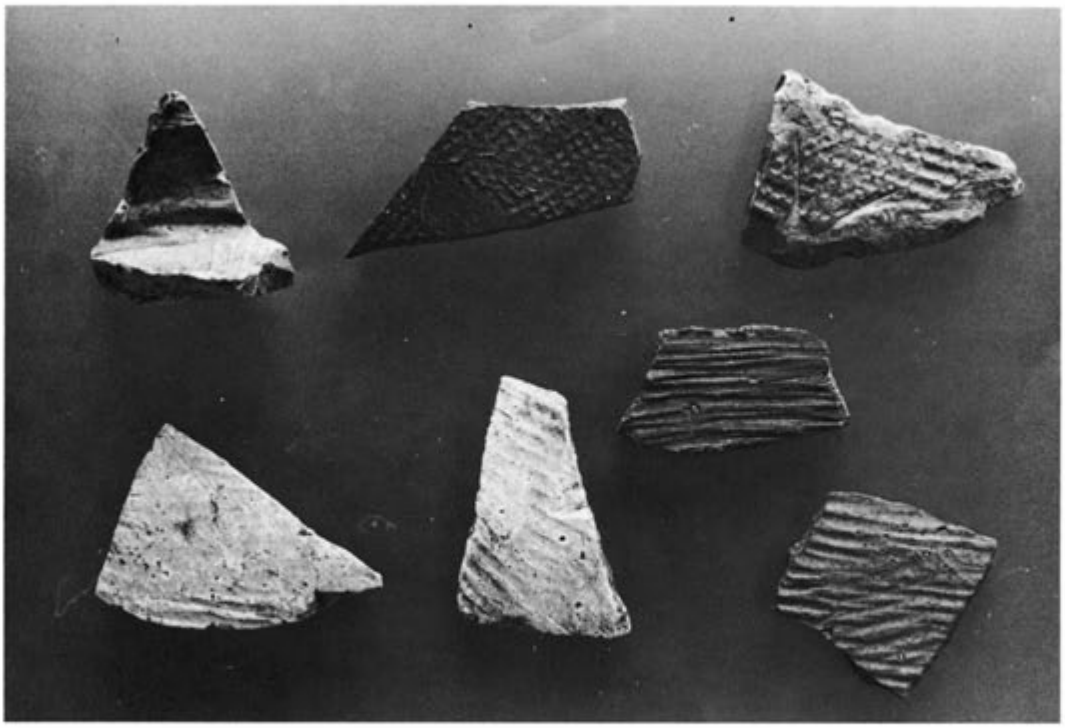



土師器（甕）表



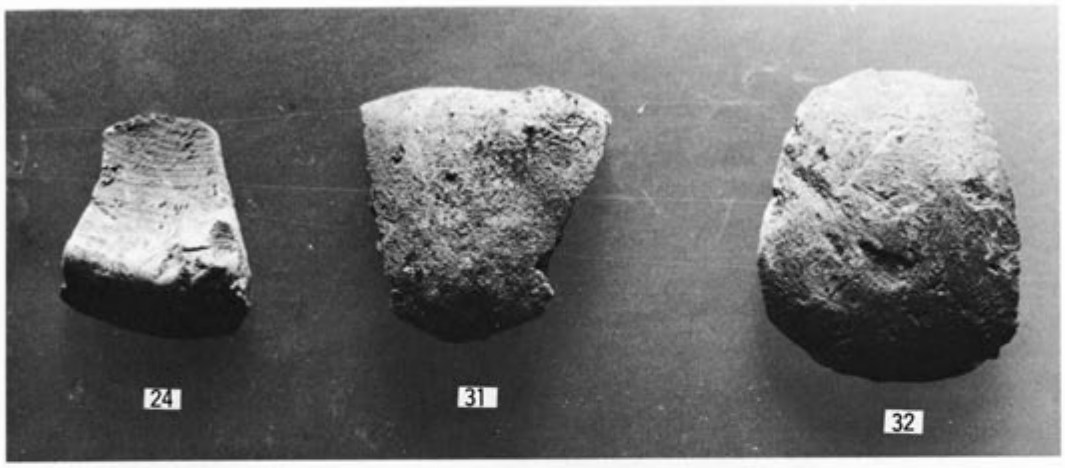

土師器（甕）裏

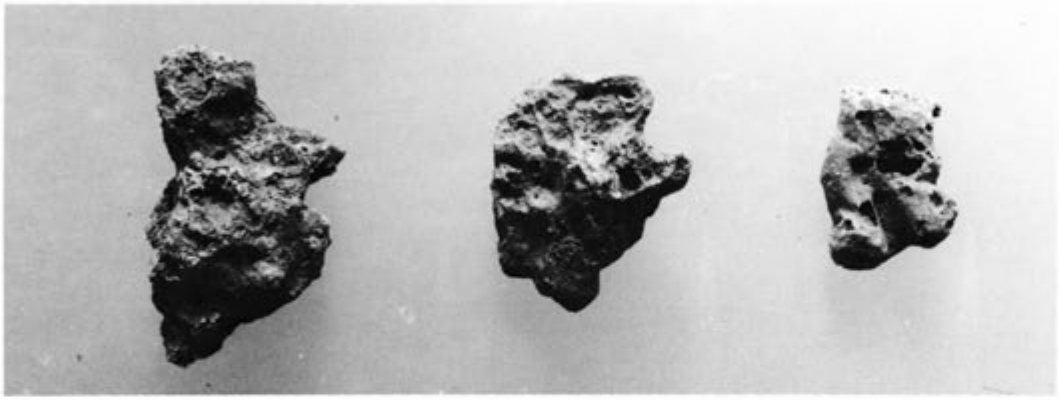
図版8



須恵器（表）

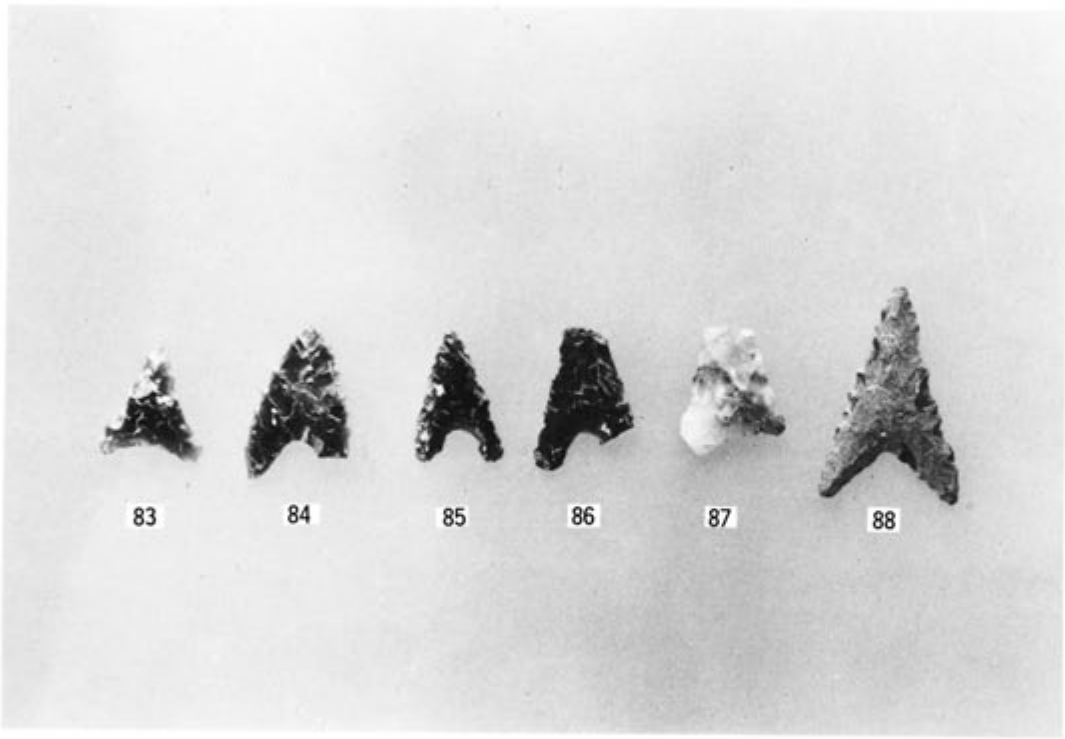
須恵器（裏）





スラグの付着した土器・鉄鋌

図版10




木場Ｃ遺跡出土の石鏃

# あ と が き

九州縦貫自動車道鹿児島線関係の埋蔵文化財の調査は，昭和55年２月に全てを終了した。

本報告書で，九州縦貫自動車道関係分はⅧ集となり，今までと合わせて27遺跡の調査結果を発表したことになる。

調査にあたっては，できうる限り詳細な記録をとることに心がけ，またそのすべてを掲載することに留意したが，必ずしも十分ではなく，読者に満足をいただけるかどうか不安である。

最後に，発掘調査にあたり，さまざまな便宜をはかり御協力をいただいた栗野町教育委員会，作業員として働いて下さった地元の方々，整理作業を担当していただいた収蔵庫の方々，そして日本道路公団関係者の方々に心から感謝の意を表わし，結びとしたい。

**鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（１７）**

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告―Ⅷ―

山崎Ａ・Ｃ遺跡
木場Ｃ遺跡

発行日　昭和56年３月
発　行　鹿児島県教育委員会　〒892 鹿児島市山下町14番50号
印　刷　㈾協同印刷　〒891-01　南栄三丁目一番